家畜人ヤプー九

かちくじん

YAPOO

作画 江川達也

原作 沼正三

BIRZ COMICS

BIRZ COMICS

家畜人ヤプー九

Egawa Tatsuya × Numa Shozo

原作作画 沼正三 江川達也

発行 幻冬舎コミックス

ISBN978-4-344-80899-7

C9979 ¥590E

9784344808997

1929979005900

雑誌 54245-65

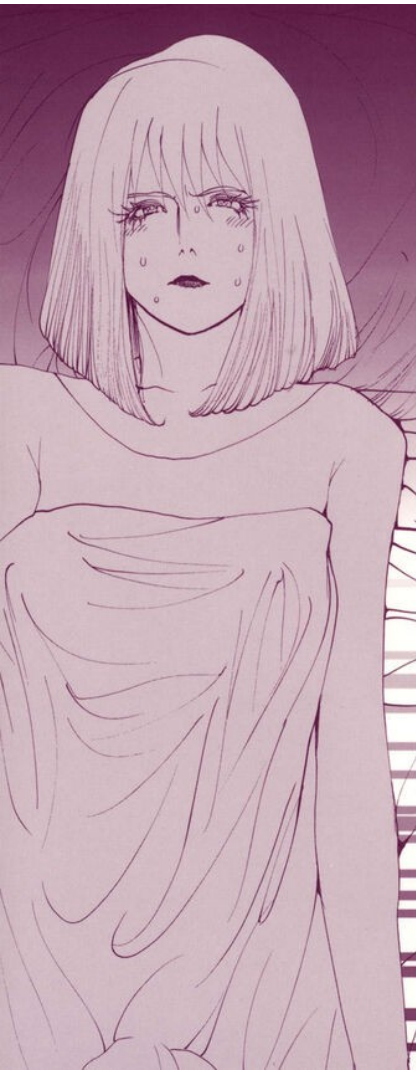
定価：本体590円＋税

発行＝幻冬舎コミックス

発売＝幻冬舎

ヴァス・ヴイルド・アオス・イーム

彼は何になるだろうか？



BIRZ COMICS

家畜人ヤプー 九

Egawa Tatsuya × Numa Shozo

原作 江川達也
作画 沼正三

発行 幻冬舎コミックス

YAPOO, THE HUMAN CATTLE

YAP

戦後最大の奇……書第一部、完結！
家畜として生きる
その果てにある悦びを
彼女はまだ知らない——
作画 江川達也 原作 沼正三

原作作画 沼正三 江川達也
発行 幻冬舎コミックス

正真正銘、
戦慄の未来である。

30世紀の地球から、未来帝国イース〜とやって来たアララと麟一郎。二人の関係は、その道中に「貴族」と「家畜」〜と大きく変化を遂げた。家畜となりながらも婚約者を信じて待つ麟一郎だが、手強いから「去勢」手術を施され、屈辱の中で自殺を図る。一方、イース文明に怒りが始め、享楽に身をまかせるアララは——。第一部、完結巻!!

月刊コミックバーズは毎月30日発売!!

家畜人ヤプー

かちくじん

YAPOO, THE HUMAN CATTLE

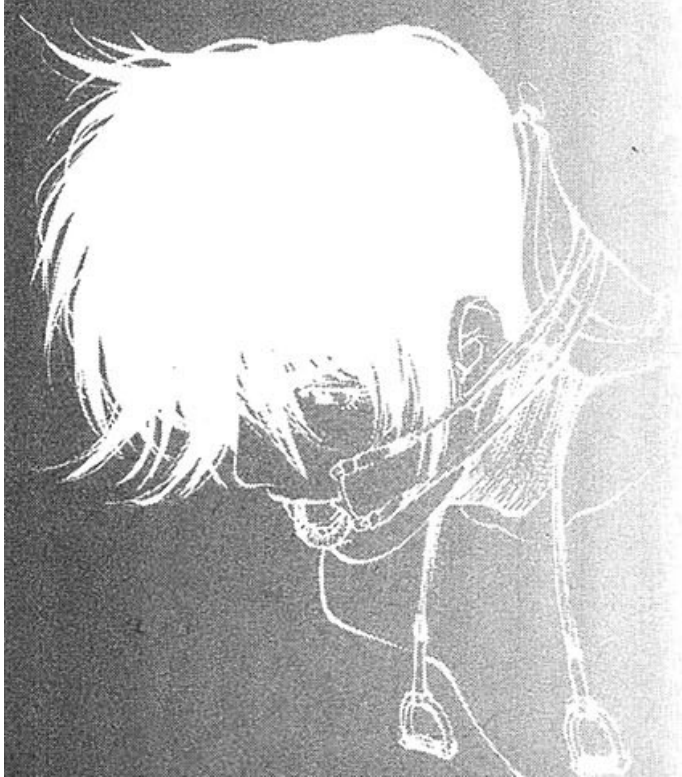
Egawa Tatsuya × Numa Shozo

幻冬舎アウトロー文庫「家畜人ヤプー」より

九

作画 江川達也

原作 沼正三

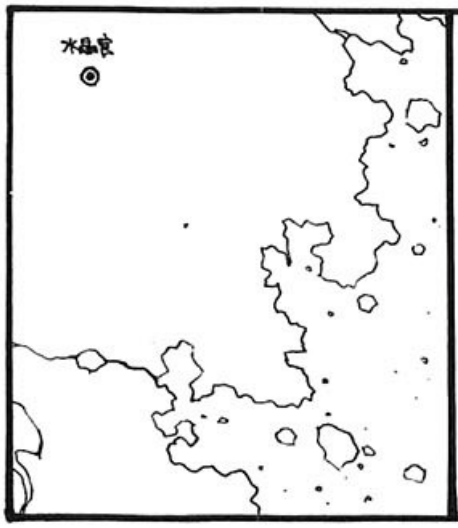


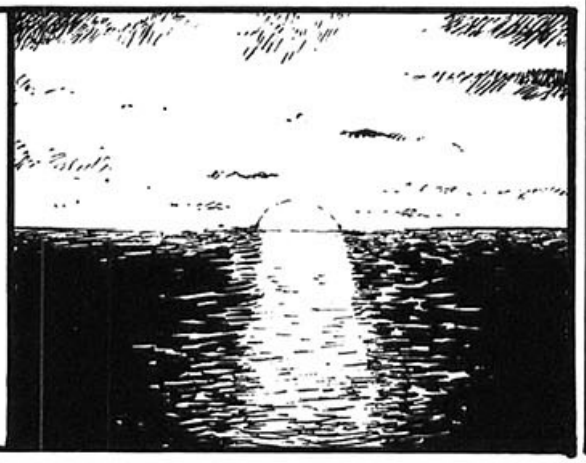
YAPOO, THE HUMAN CATTLE 9 CONTENTS

第十五章　海辺のドリス
第一話 ―― 3
第二話 ―― 39
第十六章　夜明けの予備檻で
第一話 ―― 77
第二話 ―― 113
第三話 ―― 149

一夜明けた
シシリー島の
東海岸

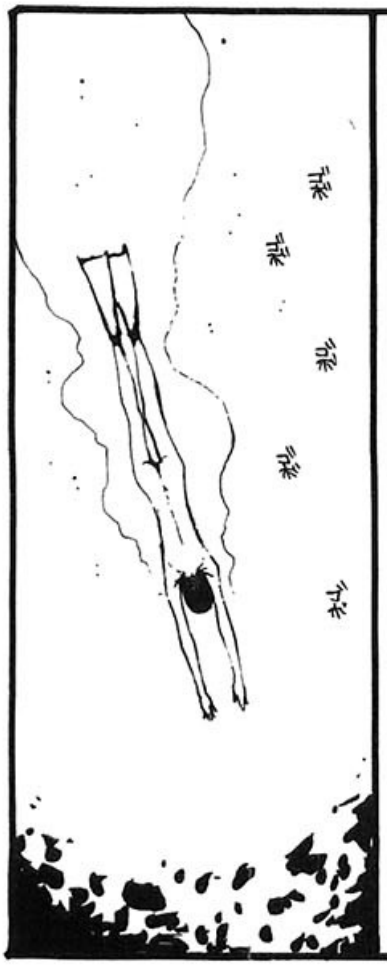
水晶宮から
二十五キロほど離れた
ジャンセン家
別荘領の端(はし)で





今しもさし昇る
朝日の光を浴びつつ

金波銀波に
かまれる
大岩の鼻から



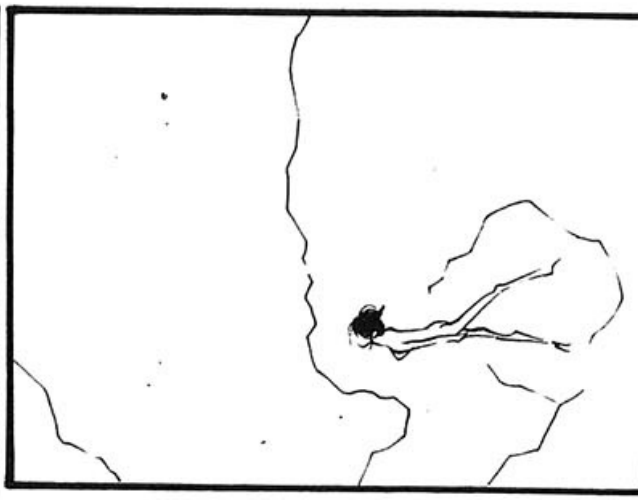
と飛び込んだ
全裸の乙女(おとめ)がある

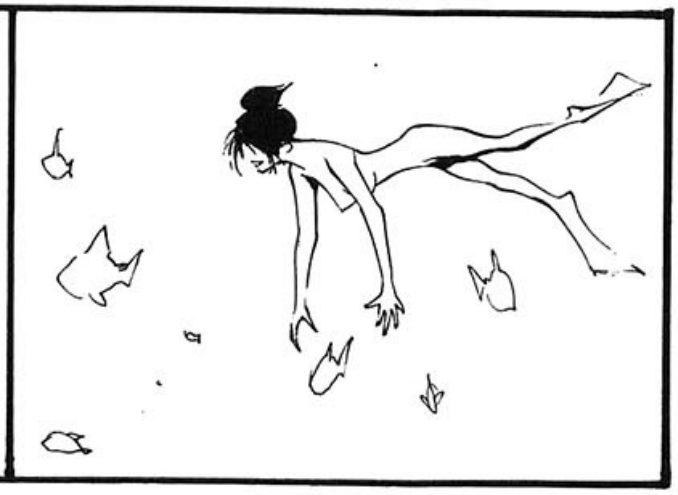
スキンダイバーの
装具のひれ状(フリッパー)の足を
両足元につけているが

頭部には
何もつけていない

第十五章　海辺のドリス　―第一話―

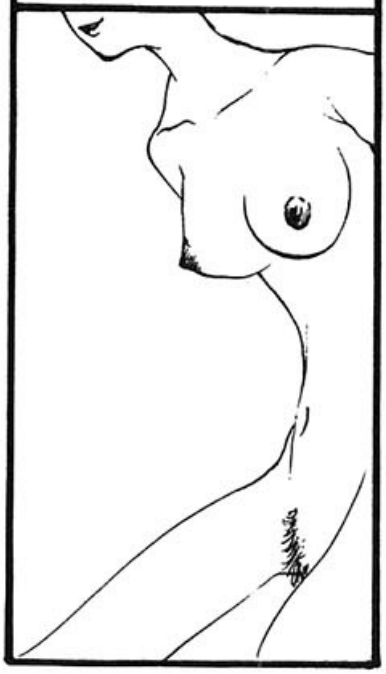
フリッパーを
あおりながら
海底の岩やトンネルを
軽やかに潜り抜け



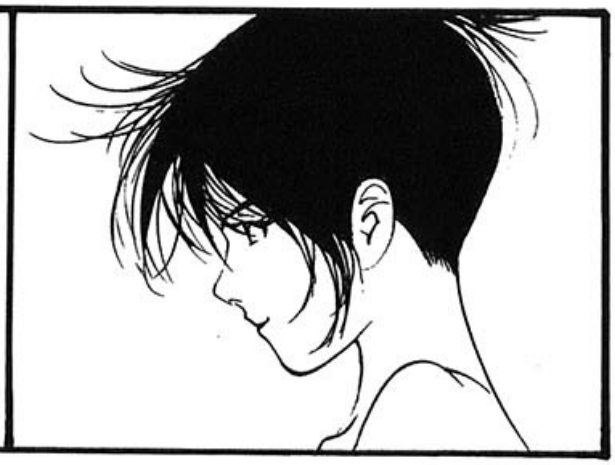


魚の隊列を脅かして
逃げまどう有様を
見ては微笑む

その顔を
見ると——



ドリス
である



だが
奇妙なことには
乙女の頭上には
黒髪が束ねられ

肌は日に灼けて
浅黒くなった
黄色人の皮膚を
している

これが
白皙の肌
金色の髪も美しい
あのドリスと
同一人物と
思えようか？
この不思議は
実はドリスが
畜人皮製の水中服を
着ているために
そう見えるのであった
それなのに
背格好から顔容は
ドリスそっくり
なのである……
平民は
既製品を
買うが
貴族は
特別誂えしか
着ない
そのために
注文主の
肉体の寸法に
隅々まで細かく
合わして
瓜二つの肉体を
持つように
生育させた
原ヤプーを

顔ももちろん
整形外科手術で
そっくり同じに
変えさせて

その皮膚を
コサンギニンを使って
生なめしした後
シリコン化して
耐酸性にし

そのうえで
※強化王水を
飲ませる

肉も骨も
溶けてしまうが
皮膚だけは
完全に残る

こうして
得られるのが
完全畜人皮(コンプリート・ヤップハイド)と
いわれるもので

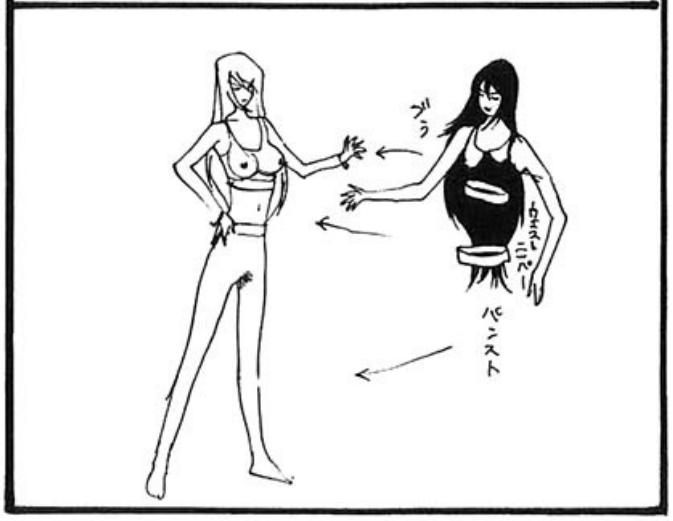
縫目も
継目もない

注文主の
体にピタリの
革肌着が
できあがるのである

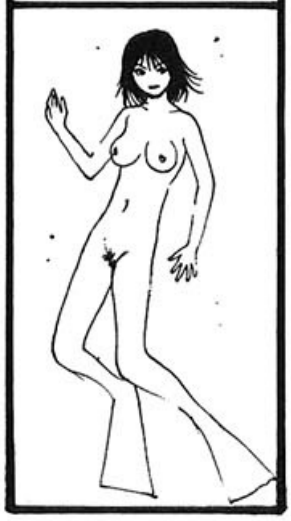
それを適当に
裁断して

※硝酸と塩酸の混合物

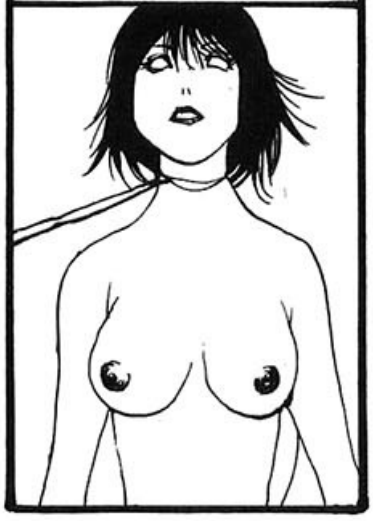
ブラジャー
ウエスト・ニッパー
パンティーストッキング
など
いろいろな
下着が取れるが



これをそのまま着て
水中服にすることも
できる

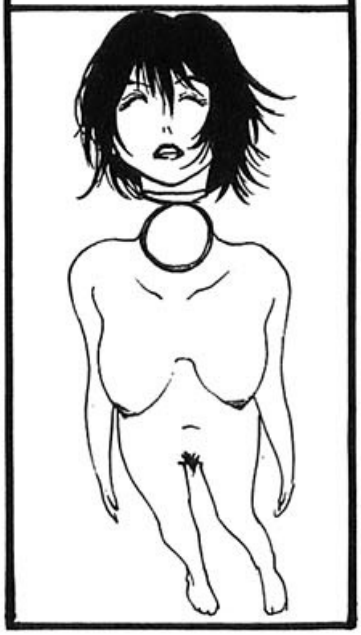


顎の下
咽喉の周りから
丸く刃を入れて
上下二つにし

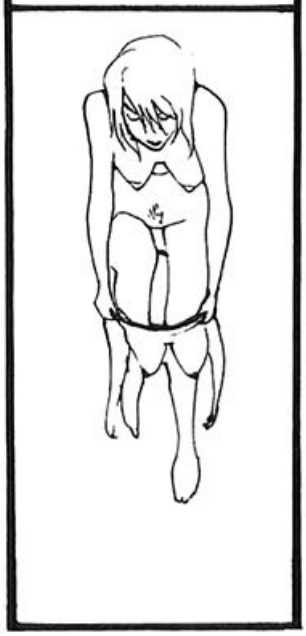


頭皮・顔皮は
覆面帽にし

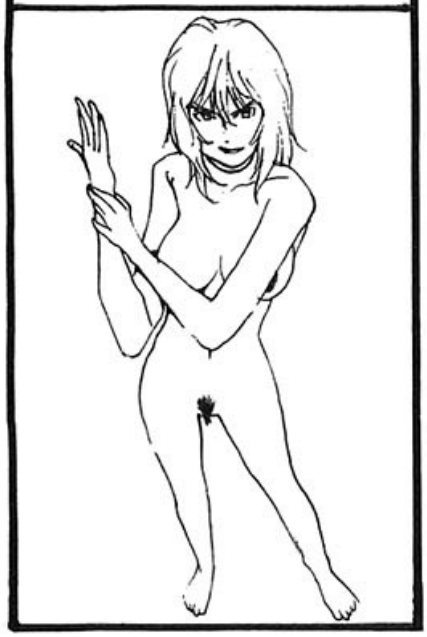
肢体部の截目には
孔釦と同じ
伸縮自在の
金属ゴムを縁取り



これを開いて
足から穿くようにして
この服を着る

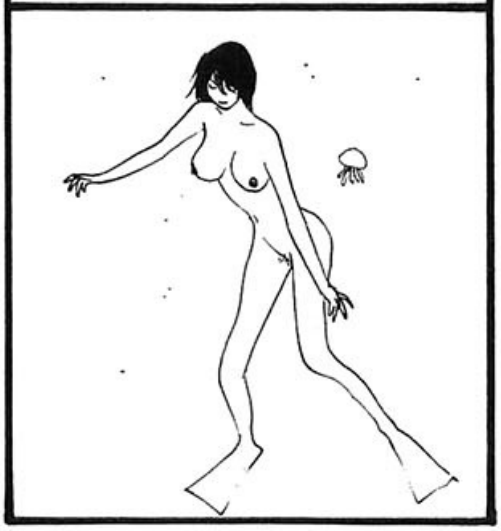


手足の
指先まで
全体が
一続きだから



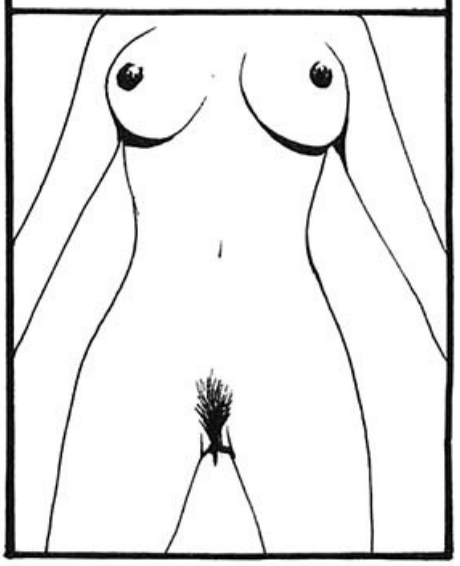
覆面帽を
かぶってしまうと
完全な防水気密服になり

肌荒れや海月(くらげ)かぶれが
問題にならなくなる
ばかりでなく
水圧の変化が
体に影響しなくなるので
潜水病の
心配もなくなる

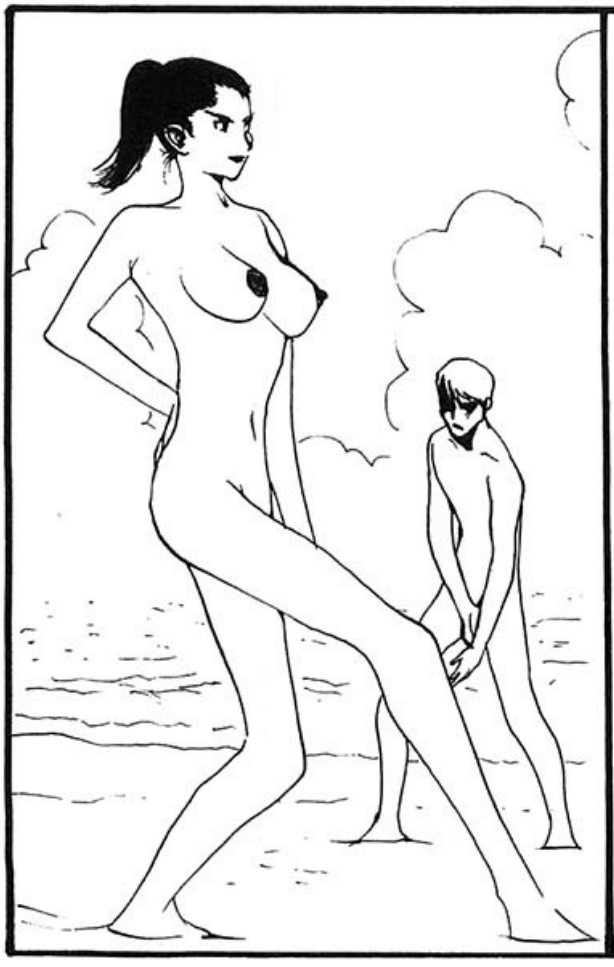


しかも
海水着の主要目的である
肉体美の誇示にも
このくらい
良いものはない

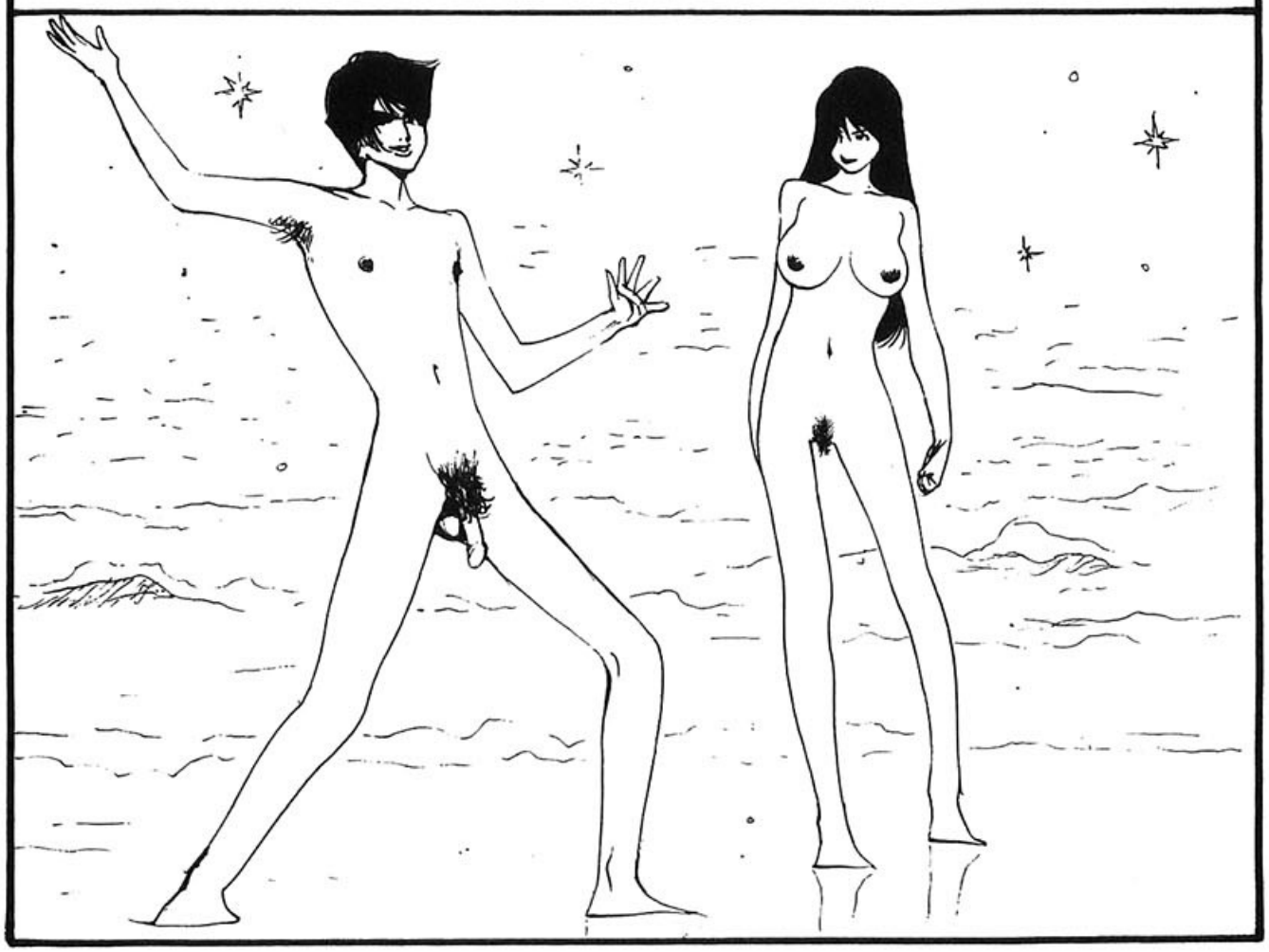
胸や腰の線が
そのまま
出ることは
もちろんだが



いちばんの長所は全裸と同様の
印象を異性に与えることである



完全に体は
おおわれているから
ほかに
パンティーも
ブラジャーも
必要でないが
乳首も
臍下の繁みも
畜体当時のままで
そのため
肌の色を別にすれば
まるで裸のように
見えるのである
この服が
肉体美に自信のある
公女・公子に
愛用されるのも
無理はなかった



ドリスが
着ていたのは
この畜人皮製水中服
なのであった

彼女は
この着心地のよさを
愛していた

彼女に
自分の肌を捧げるため
喜んで生なめしの
苦痛を受けた末

王水の杯を
あおった
雌ヤプーよ
もって瞑すべし！

バンザイ一唱

ドリスは
さらに深く
海藻の林の中に
はいっていく

もう十五分の余も
潜ったきりなのに
呼吸困難どころか

いたって平気で
時折り涼しげに
白い気泡を吐いている

秘密は
頭の天辺にあった

漆黒のヤプーの頭髪を
束ねた中に
小さな平たい丸い箱が
隠されている

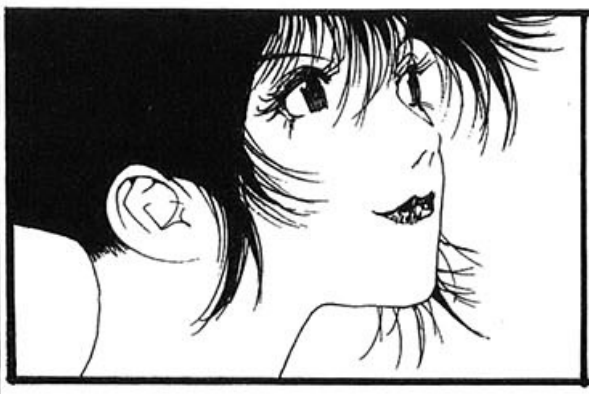
この中に
水中から
空気を取る装置が
はいっているのだ

$2H_2O \longrightarrow 4H + O_2$

そこで
採集した空気が
覆面内の細管から
鼻と口とに
送られて来る

畜人皮の
頭部の皮には
目に
深い水中でも
遠くが見える
レンズを
耳に
水中聴音膜を
口に
水中送話器を
それぞれ
加工してある外に

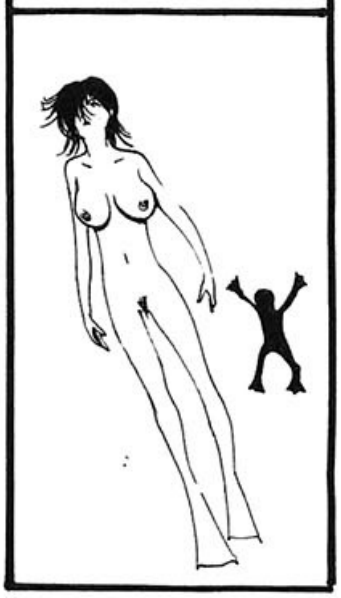
なお
鼻孔の特殊弁が
吐き出す炭酸ガスを
外に排出するように
なっていた



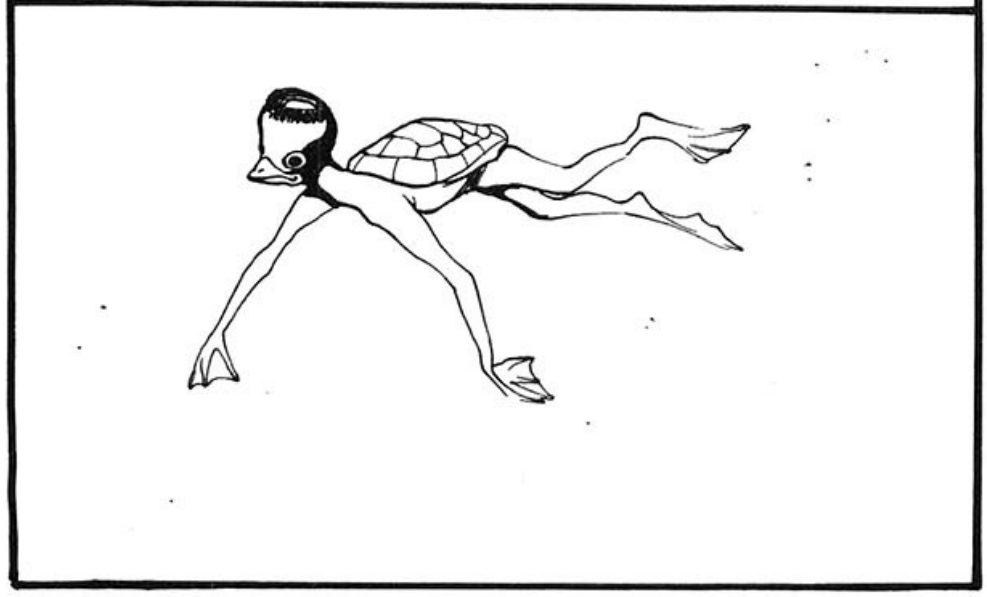
全裸の女体を示す
水中服は
実は高性能の
潜水装置なのだ

だから
そのお陰で
いつまででも
水中で自在の行動が
できるのである

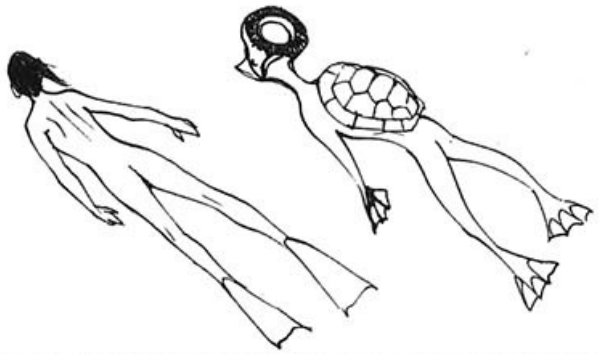
ところで
ドリスのすぐ後ろから
まるで主人の供をする
犬のようについて行く
奇妙な動物は何か？



背中に
細長い甲羅を
背負っている外は
全身緑色で
体長一メートル
四肢の先に
蹼があって
巧みに泳いでいる
頭の天辺に
丸い凹みがあり
その周りを
短い髪の毛が囲み
顔は
倒三角形で
下端が嘴状に
突き出していた
……



つまり河童(カッパ)



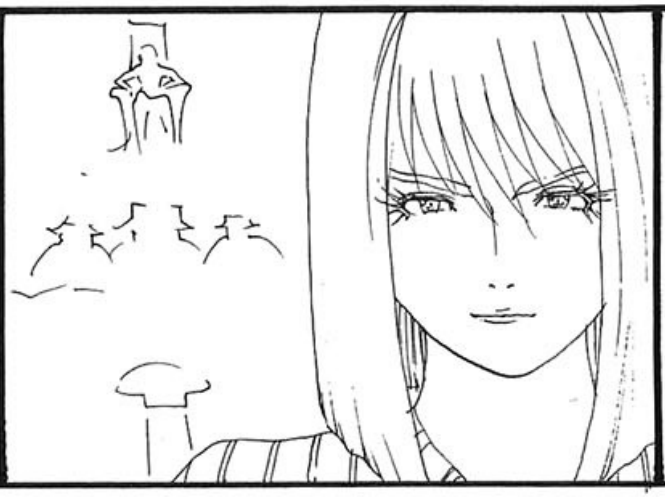
絵で見るのに
よく似た
河童が
ドリスに随行
しているのだ

人類が海底を
征服した時
種々の海底作業に
従事したヤプーは
しだいに専門化し
変種化して

海中畜人(マリン・ヤプー)。

と呼ばれる
一大部門を形成した

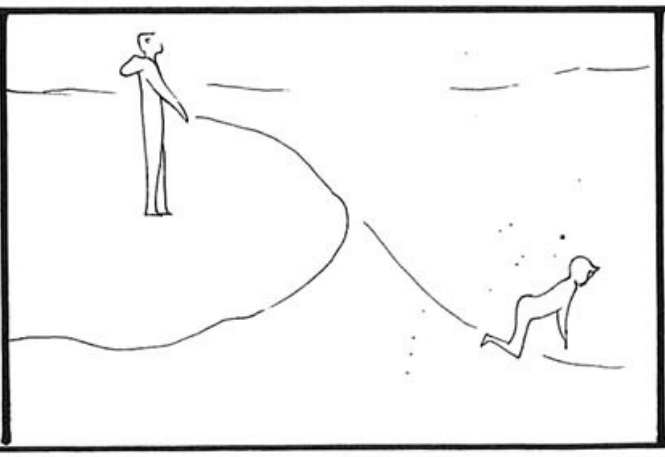
この各種類は
近くクララが
皇子(※プリンス)オットー
を



南海の離宮
「竜宮城(りゅうぐうじょう)」に
訪れる日に
説明するが

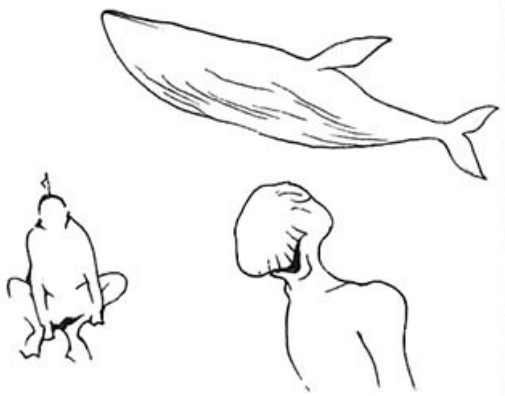
※ 誤って女性視して乙姫(おとひめ)と呼ばれている

海中畜人とはいっても
ドリスのかぶっている
覆面帽(フード)と同様な
潜水兜(ヘルメット)を使うだけで



それをはずして
陸上生活を建前とする
連中が多かった
のである

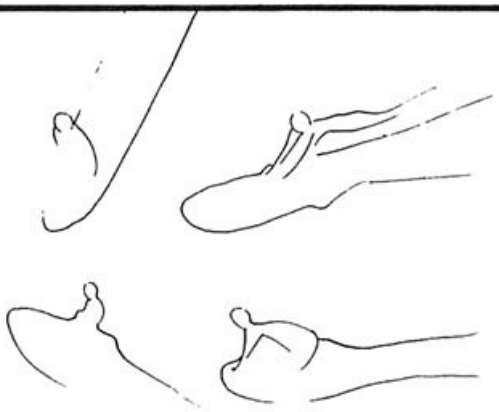
ところが
ヤプー育種学の進歩は
まず鯨様畜人(※ウエルブー)の
作出に成功し



さらに
人工鰓(じんこうえら)で呼吸する
真の水棲畜人(アクア・ヤプー)を開発し
ついに
両棲畜人(アンフィビ・ヤプー)を
誕生させるに至った

※ イルカ

一方
既に二〇世紀人にも
知られていた
水中自転車は
その操作上いろいろの
不便があり

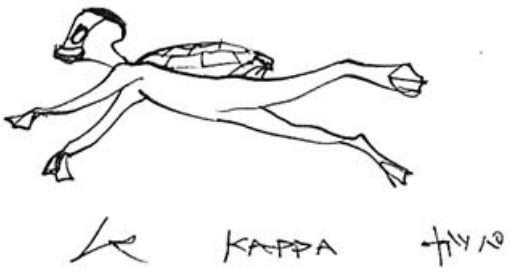


改良品が
次々に生れた

推進機試作品には
ギリシャ文学の番号が
付けられ
アルファ
ベータ
ガンマ
……

と称ばれたが
その十番目の
カッパと称ばれた
試作品は

両棲畜人の
別称のように
なってしまった



ドリスの
連れているのは
このカッパの
一匹なのである

肌が緑色なのは
陸上で
全身皮膚呼吸をして
生きてゆけるように
なっているためである

身長一メートル以上では
皮膚表面積の
体重比率が減じて
呼吸困難になるので
両棲畜人は
この体長を限度とした

背中の甲羅は
実は原子動力機関の
水中ジェットで
これが本来の
カッパ推進機

頭頂の凹みは
陸上では弁で
蓋をされていたが

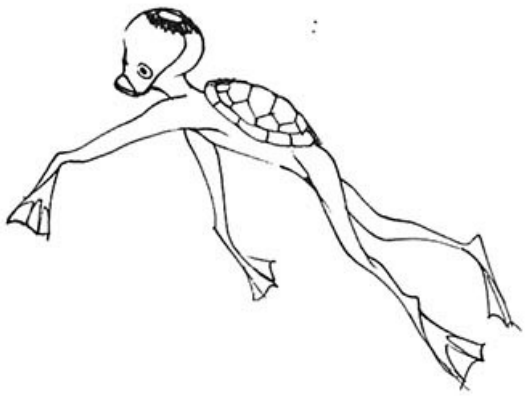
水中で弁が開けば
ジェットに送られる
水の取り入れ孔になる

頭蓋から
頸骨髄腔を通る管で
甲羅につながって
いるのだ

肺は鰓葉に
変っていて
口から飲んだ水が
空気の代りに
酸素を与える

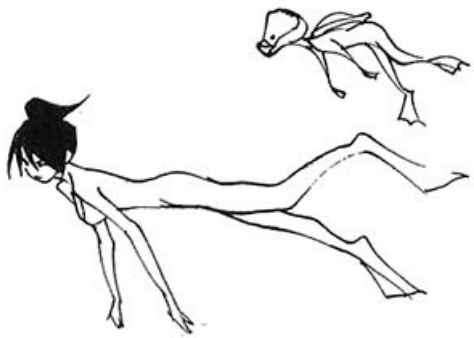
両棲類とはいっても
むしろ魚に近く
水中生活が
本来の姿になっている

ところで
このジェットは
カッパ自身のため
あるのではない



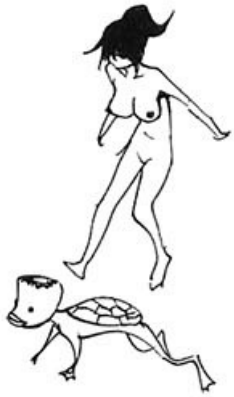
もちろん彼が
操作するのだが
彼自身は蹼(みずかき)で遊泳でき
ジェットの快速力を
必要とはしない

彼がジェットを
背負っていたのは
主人の必要に応じて
これを提供し

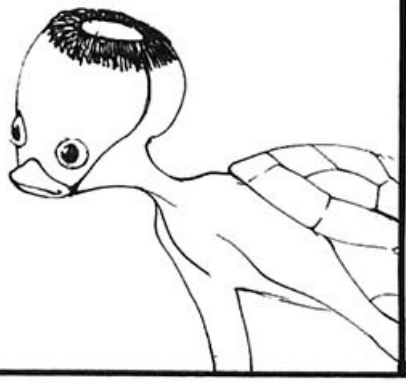


その意思を絶対として
主人の思いどおりに
ジェットを操作するため
なのである

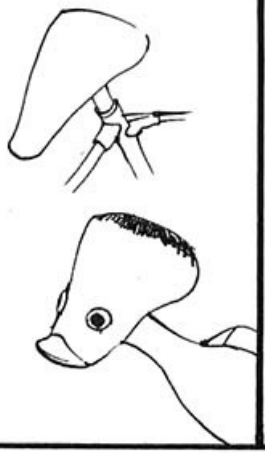
ジェットを使うには
カッパに乗る



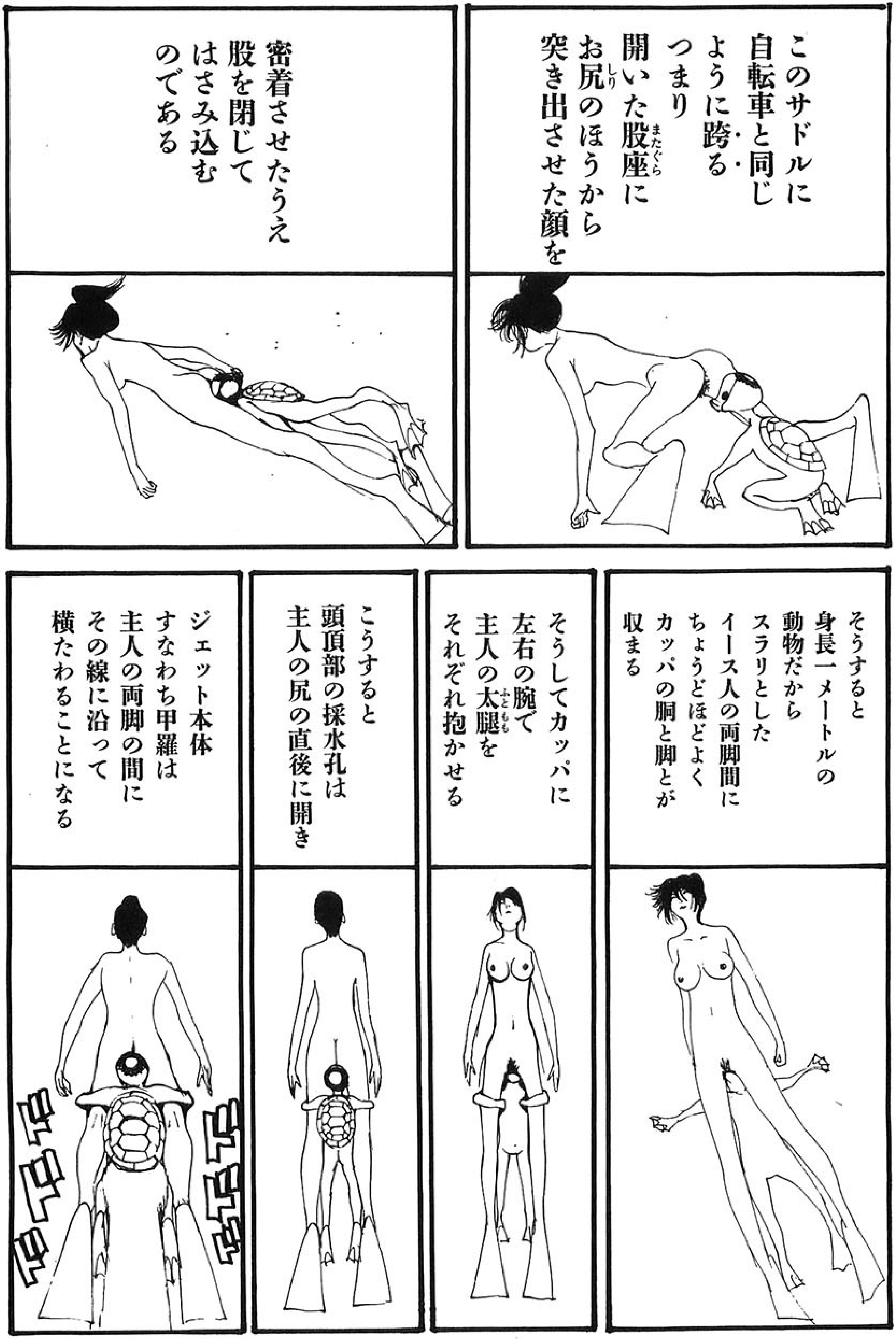
カッパの顔は
倒三角形で
下方に嘴(くちばし)が
突き出している



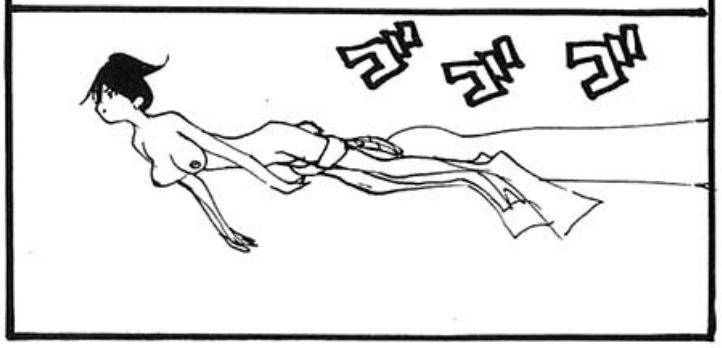
ちょうど
昔の自転車の鞍(サドル)に
目鼻をつけて
前部に尖部(とがり)を
突き出させたような
格好で



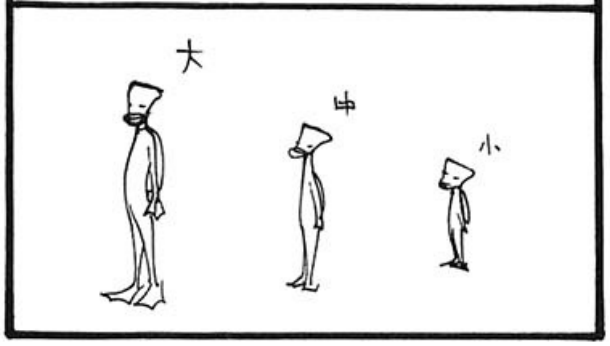
そこで
この顔を
サドルと
称(よ)ぶのだが


このサドルに
自転車と同じ
ように跨る
つまり
開いた股座に
お尻のほうから
突き出させた顔を
密着させたうえ
股を閉じて
はさみ込む
のである
そうすると
身長一メートルの
動物だから
スラリとした
イース人の両脚間に
ちょうどほどよく
カッパの胴と脚とが
収まる
そうしてカッパに
左右の腕で
主人の太腿を
それぞれ抱かせる
こうすると
頭頂部の採水孔は
主人の尻の直後に開き
ジェット本体
すなわち甲羅は
主人の両脚の間に
その線に沿って
横たわることになる

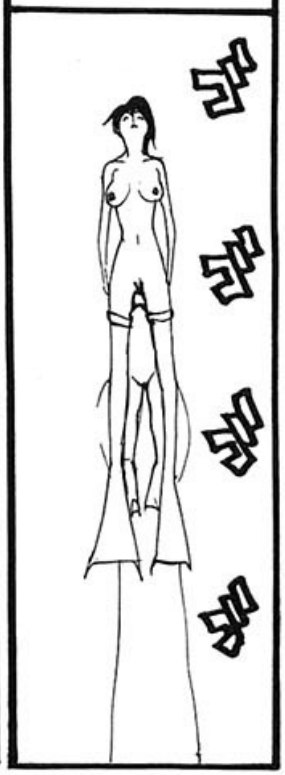
それから
サドルを締める
その締めつけ方
臀肉(しりにく)による
頭蓋への
圧迫の加え方で
発進停止・方向変換等
いろいろの合図が
できるように
カッパは訓練されている



多くの
畜人系動物と同様
これもまた
小学・中学・大学と
しだいに
高級の訓練を受けて
一匹前のカッパに
なるのである



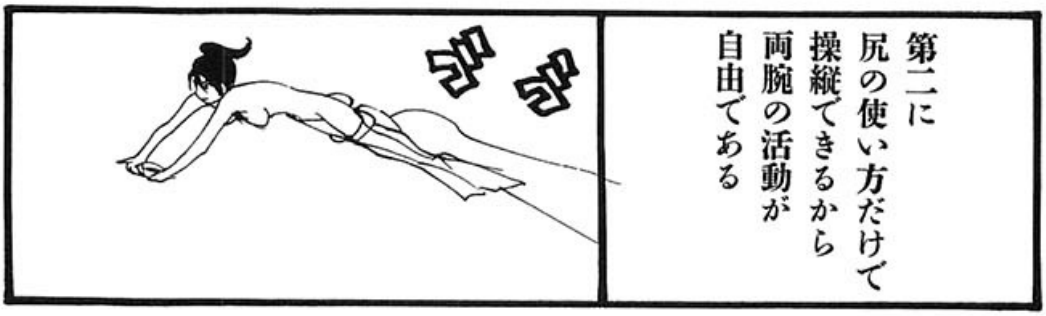
カッパ推進機の
長所は



第一に
脚の間に
収まっているため

全身を
流線形のまま維持して
水の抵抗が少ない

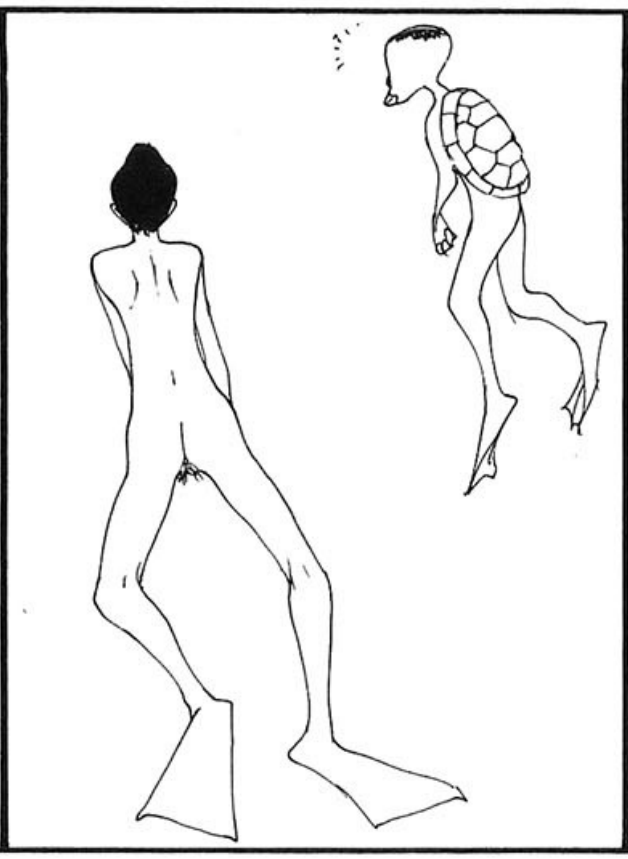
第二に
尻の使い方だけで
操縦できるから
両腕の活動が
自由である



第三に
自力随行性である
すなわち
用が済めば
股をゆるめて
解放してやればよく

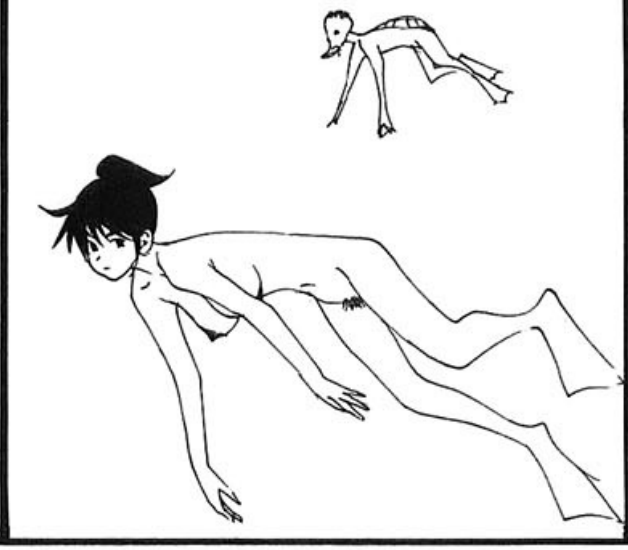
また使う気になって
開けばすぐ股の間に
はいって来る

膝(ひざ)を半ば伸ばして
両腿を蛙股(かえるまた)に開くのが
信号になっている



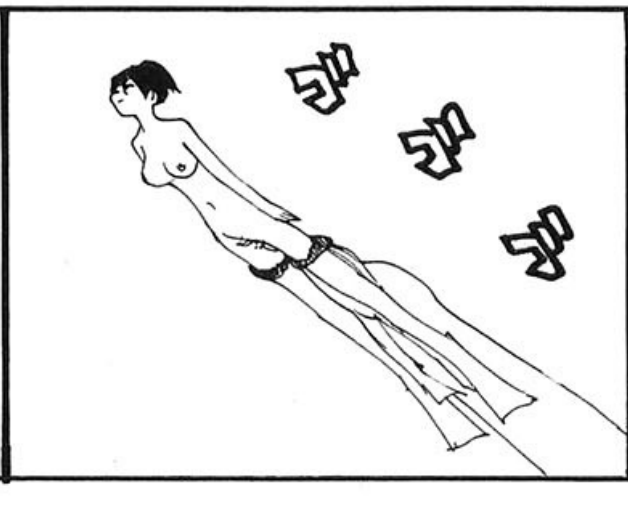
その便利さは
昔の水中自転車の比ではない
つまり家畜兼道具的存在
としてのヤプーの特質が
ここにも見られるわけで

一名
「海の犬(マリン・ドッグ)」
というのは



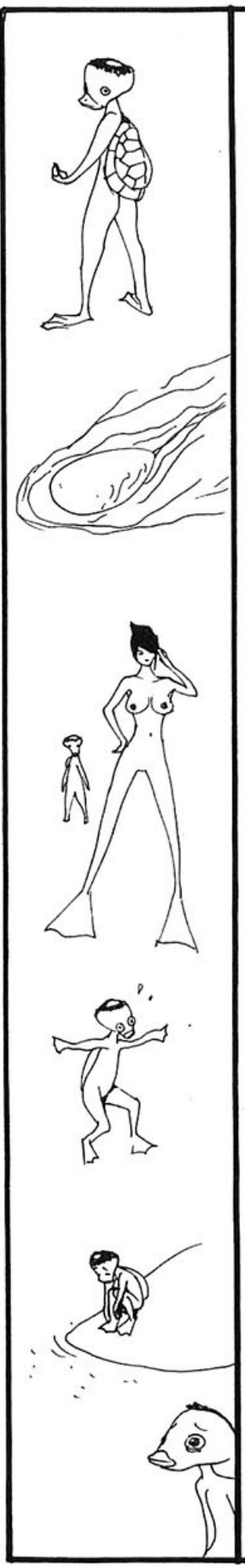
その随行力に
家畜性を見た
表現であり

別称
「水中自転車(ウオーター・バイシクル)」
というのは



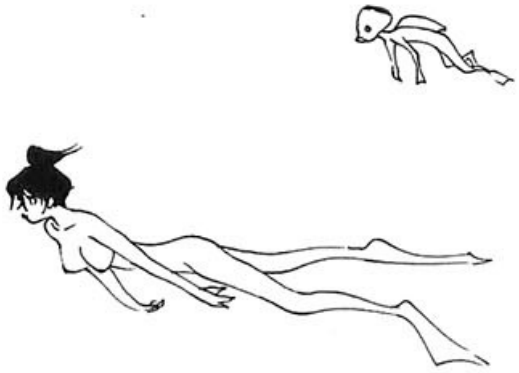
主人の操縦する
軽便な乗物としての
道具性に着眼した
呼称であろう

家畜文化史上 空想の動物とされた河童はイース世界のカッパが航時機に乗った
イース人のお供で古代地球に来て主人にはぐれ湖沼・河川に隠れて生存したものである



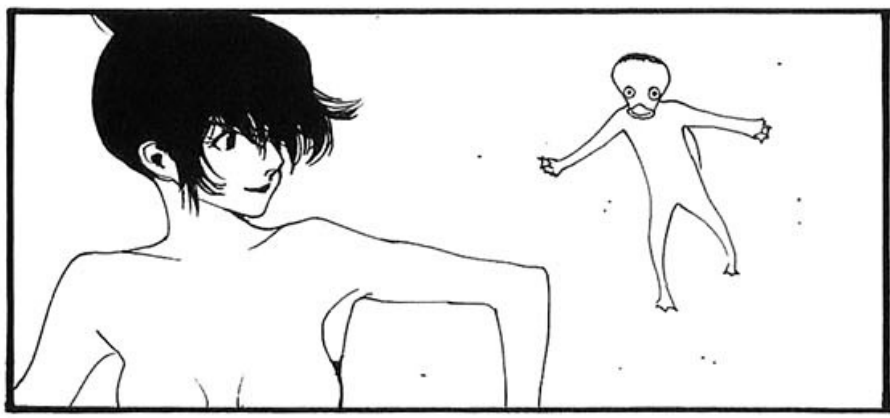
甲羅や緑の肌色は既に述べたとおりだし頭の凹みに水が溜れるといけないというのはヤブーたちが
これが採水孔だと知らずに外見だけからそう思ったためであろう 裸で泳ぐと〝河童が尻を抜く〟というのも
カッパが水泳者の裸の尻を見て畜人皮の水中服を着た昔の主人を思い出し以前仕込まれたとおりに
その者の股間に入ろうとしたものでそれを誤っていわれたのに違いない 河童の屁という言葉がなぜあるのか
誰も説明した人はないが後部から流体を噴出するジェットを見て無知な古代ヤブーが放屁を連想したのでは
あるまいか なお上半身女体で下半身が魚体という人魚は緑いカッパを脚にはさんで波間に遊ぶイース女性
——(訳注 前史時代への航時機着陸が禁止される前は古代世界でそんな遊びをすることが可能だったのだ)
——の上半身の水中服を裸女 下半身の模様を魚尾と誤認したものと思われる(J・フォンダ『家畜文化史漫筆』)

ドリスについてゆく
カッパは

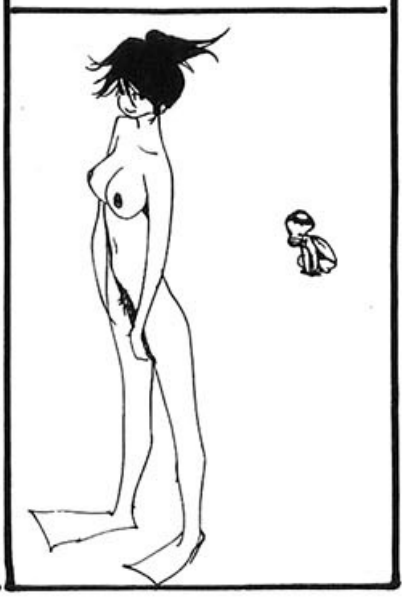


ピュー
という名で

彼女の
小学生時代から
愛玩物(ペット)となって
もう十年ほど
飼われていた



二週間半前に
連れられて
別荘に来てからも



ドリスのお供で
毎朝欠かさず
朝早くこの海岸に来て
彼女の海中散歩(スキンダイビング)に
随行しているのだった

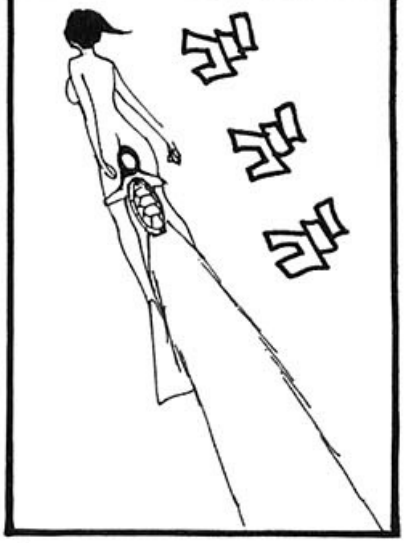
ドリスは
尿意を
覚えたので
股を開いた

ピューは
合図に応じて
その間にはいり

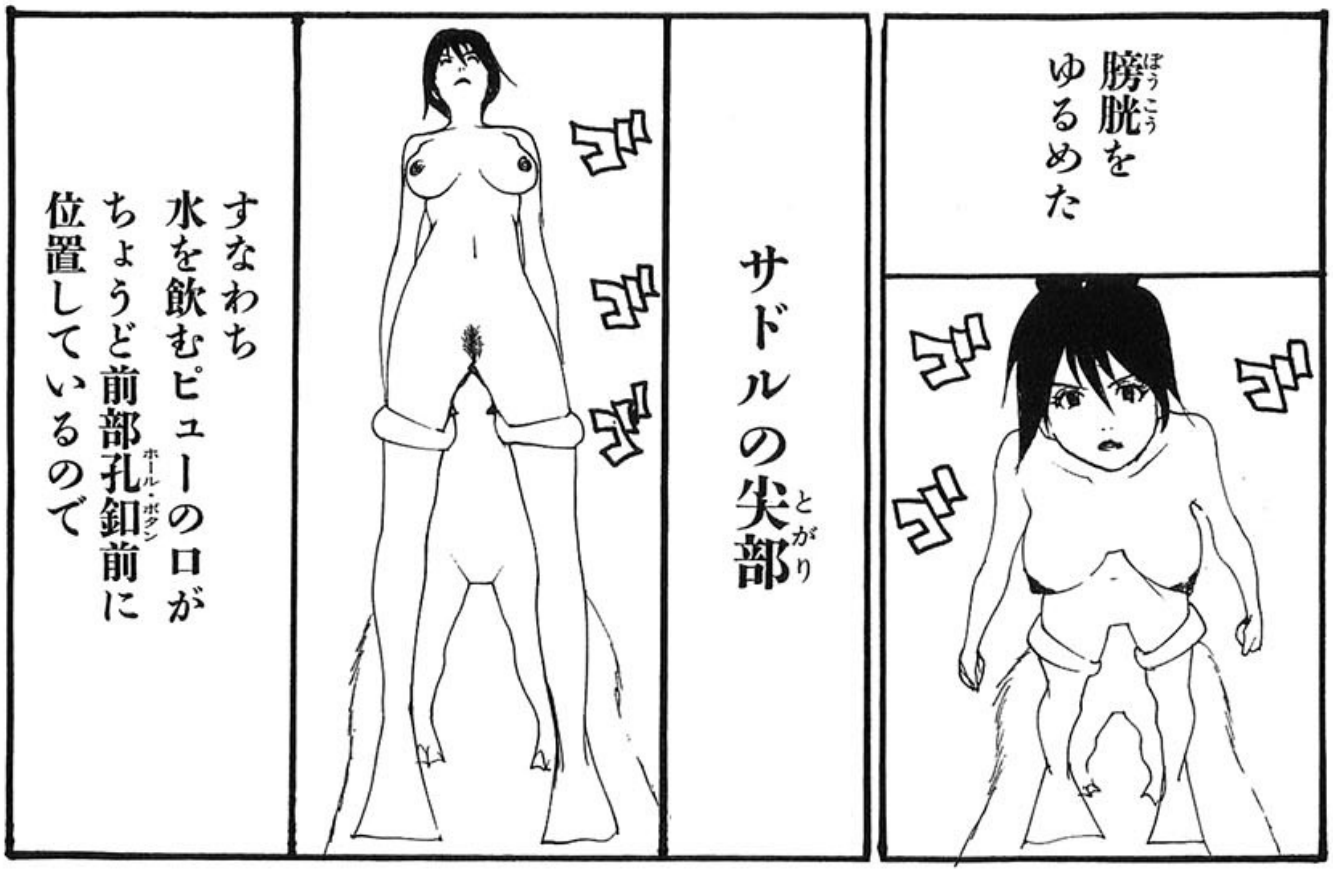
鼠蹊部(グロイン)に
鼻を付ける
ようにして
顔(サドル)を寄せてくる

動かずにいて
放出したのでは
あたりの水が
よごれるような気がして
耐え難いので

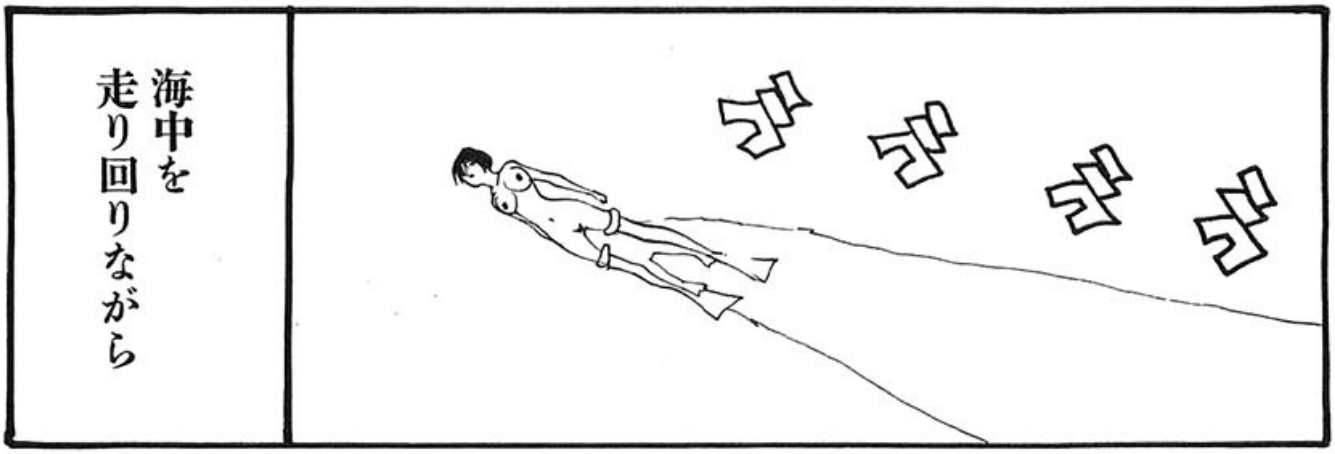
潔癖なドリスは
いつもジェットで
走りながら済ませて
水の汚染から
離れることにしている



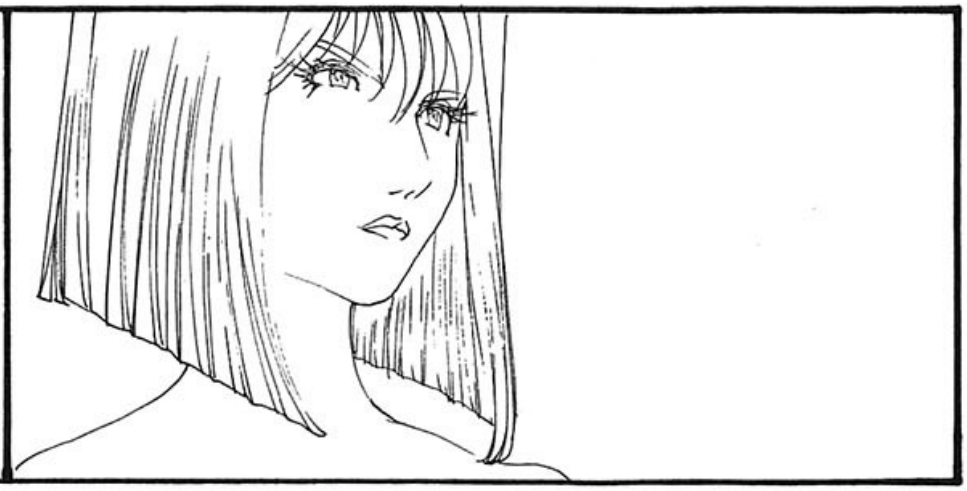
サドルをはさみ込んで
ジェットを作動させながら


膀胱をゆるめた
サドルの尖部
すなわち水を飲むピューの口がちょうど前部孔釦前に位置しているので

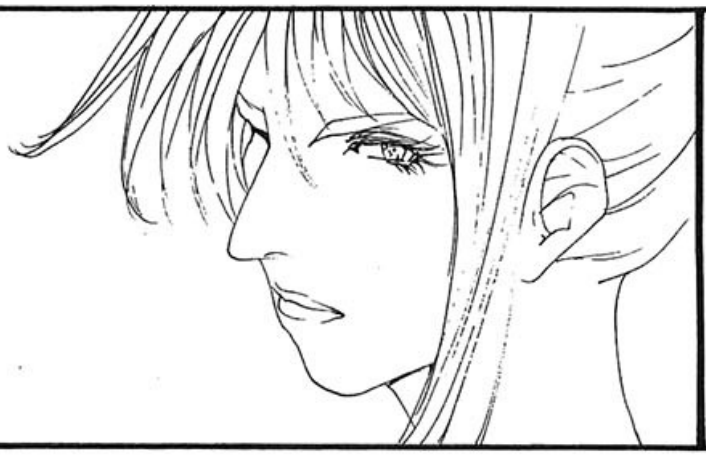
彼女の液体はそのまま吸われて肺の鰓葉にまで流入していくのだった
じゃ〜っ


海中を走り回りながら

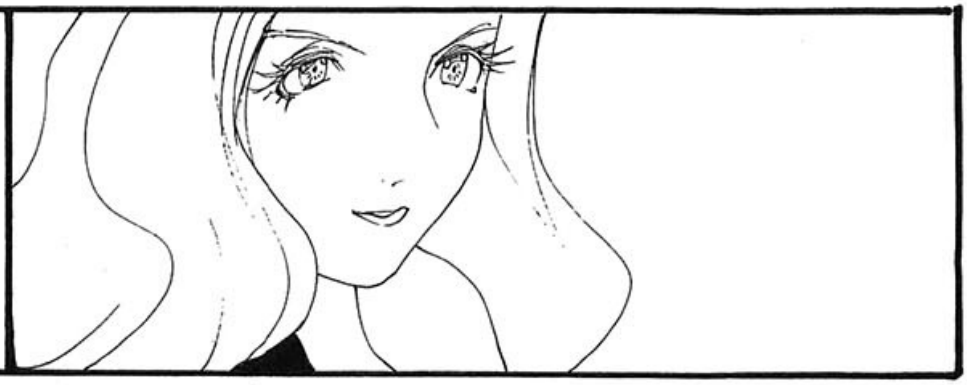
ふと昨夜の
晩餐の時の情景を
ドリスは
思い出していた



晩餐の時
客人クララは
姿を見せず



ウィリアムも
出て来なかった



ポーリーンの
説明で

ヤプーの大暴れ(おおあば)や
心中未遂事件を知って
ドリスは
びっくりしたのだ

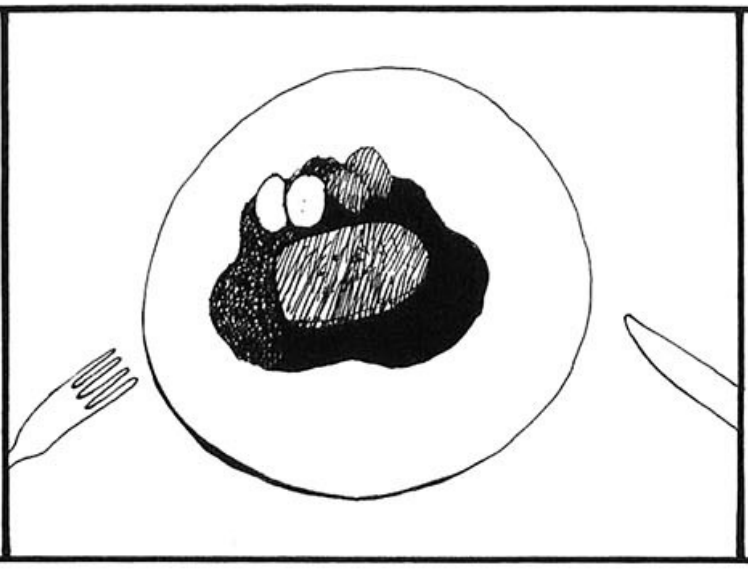
ガーン

えーー

だらしない
黒奴たちの処刑は
客人の列席する
明晩の新築披露パーティー
まで延期することに
異議はなかったが

黒奴が弱いというより
ヤプーが強過ぎたのだろう
とは想像がついた

コースは
肉料理に
かかっていて



皿には
畜舌(タン)が
のせられていた

セシルはそれで何か連想したのか
ナイフを使いながら

なかなか
敏捷(びんしょう)な奴さ

その証拠に
去勢鞍(カスト・サドル)も
だいぶてこずってた
からな

といった

ポーリーンは驚いて

まあ貴方(あなた)奴(あれ)を去勢したの？

ポロッ

だって特別檻(スペシャル・ペン)に入れろって……

予備檻(スペア・ペン)よ妾(あたし)がA3号に命じたのは！

兄より
地位の高い妹は
兄を睨(にら)みつけた

あ
そういえば
予備檻っていったな

僕が
まさかと思って
特別檻じゃないかって
聞きかえしたんだ

だめじゃないの
クララ嬢(さん)の
意向も聞かずに……

僕は
そんな事故が
起ったこと
知らなかったから

もちろん
彼女の意志で
原畜舎(ローヤブー・ホールド)に
送られて来たと
思ったんだ

困ったわ

と
ポーリーンは
苦り切って

クララ嬢に
悪いわ

いちおう
予備檻に入れたら
今からでも

と
ドリスが横から
助け舟を出した

兄さんに
悪気があったわけ
じゃなし

きっと
クララ嬢は
事後承諾するわよ

だから
その処分を
任せる意味で
予備檻に……

それもそうね

今どこに居て？

八号檻

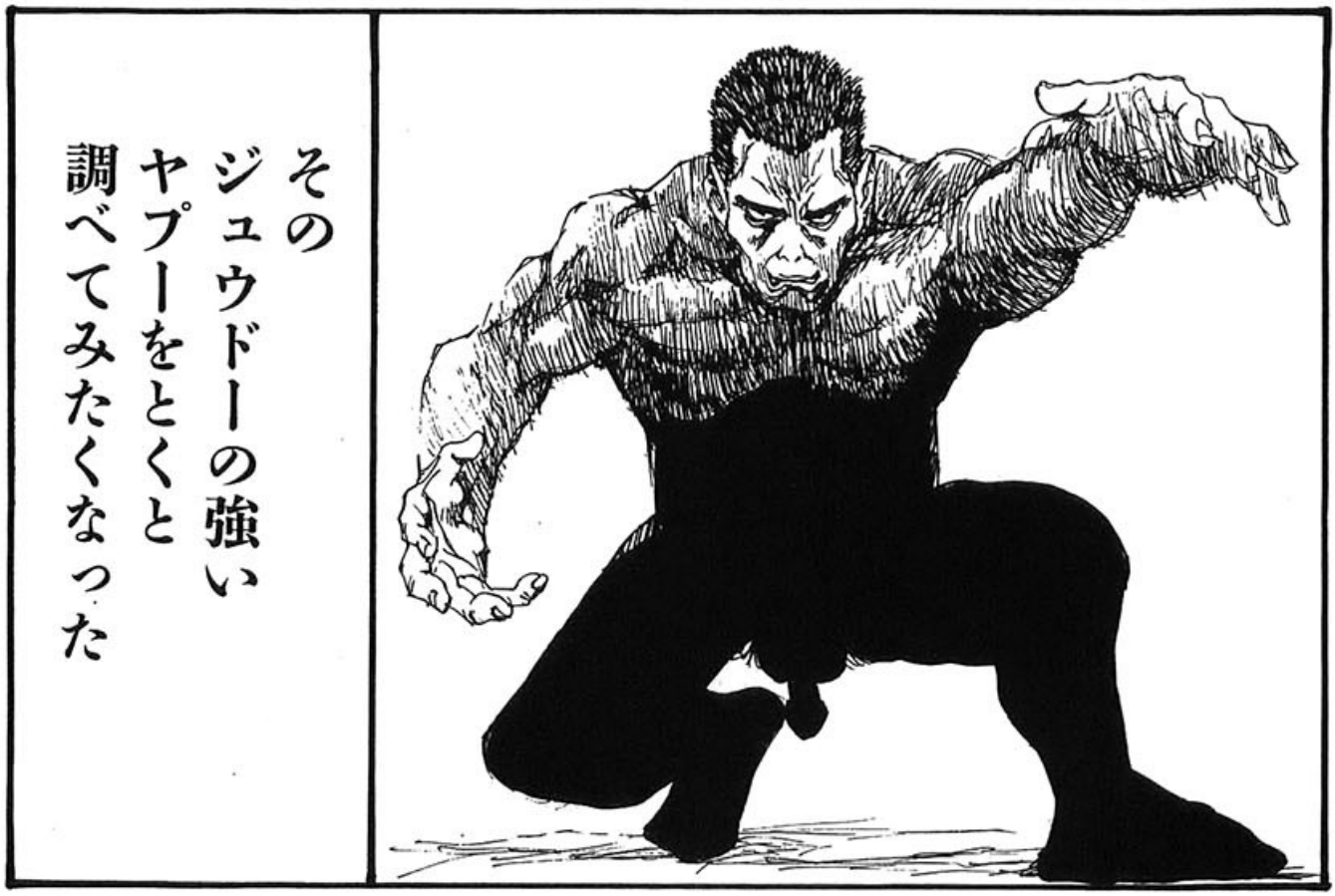
ぽっ

とセシルがぽっとして答えた

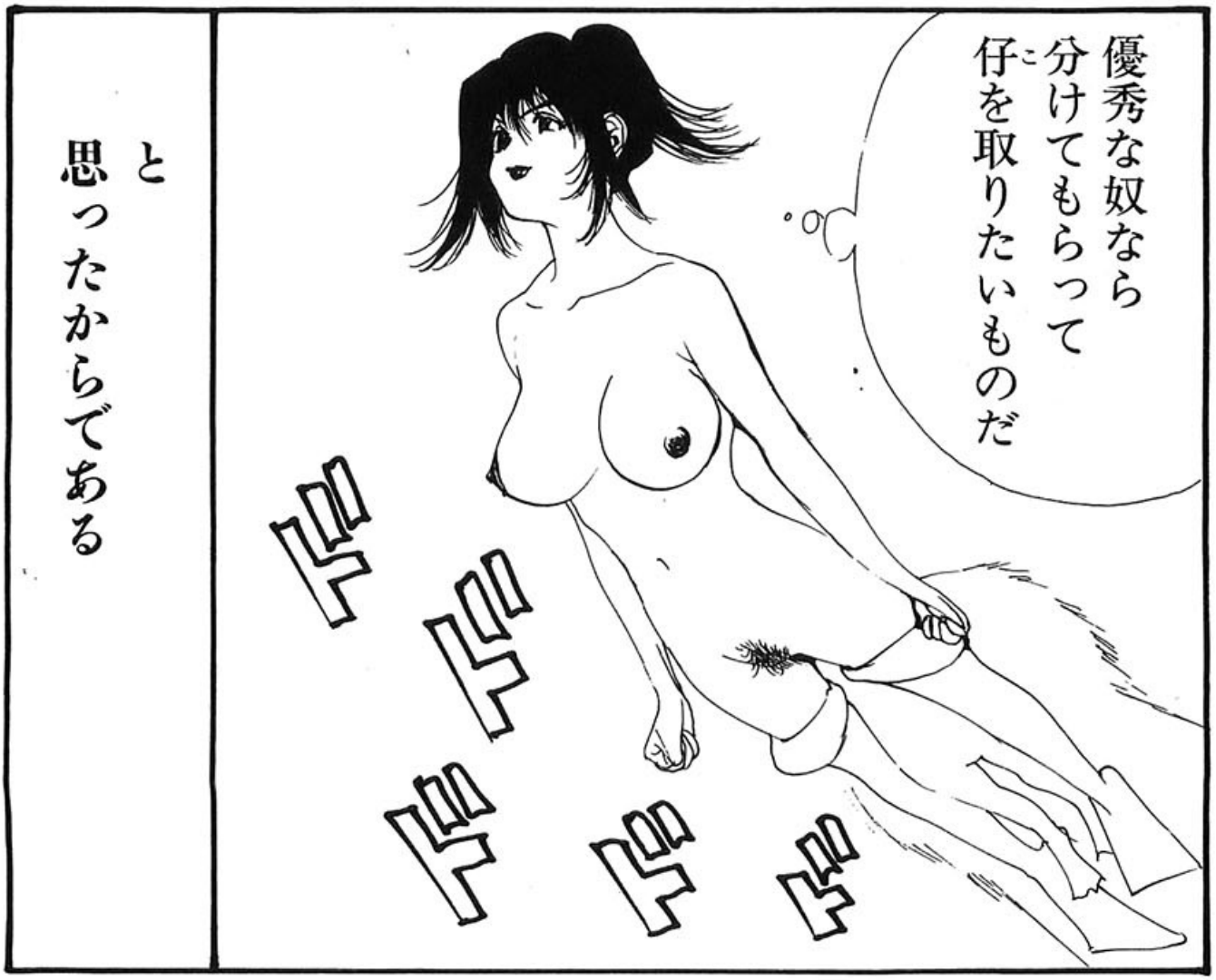
今ならちょうどいい

自殺しかけたから生本能注射で眠らせて檻仲間に監視させてある

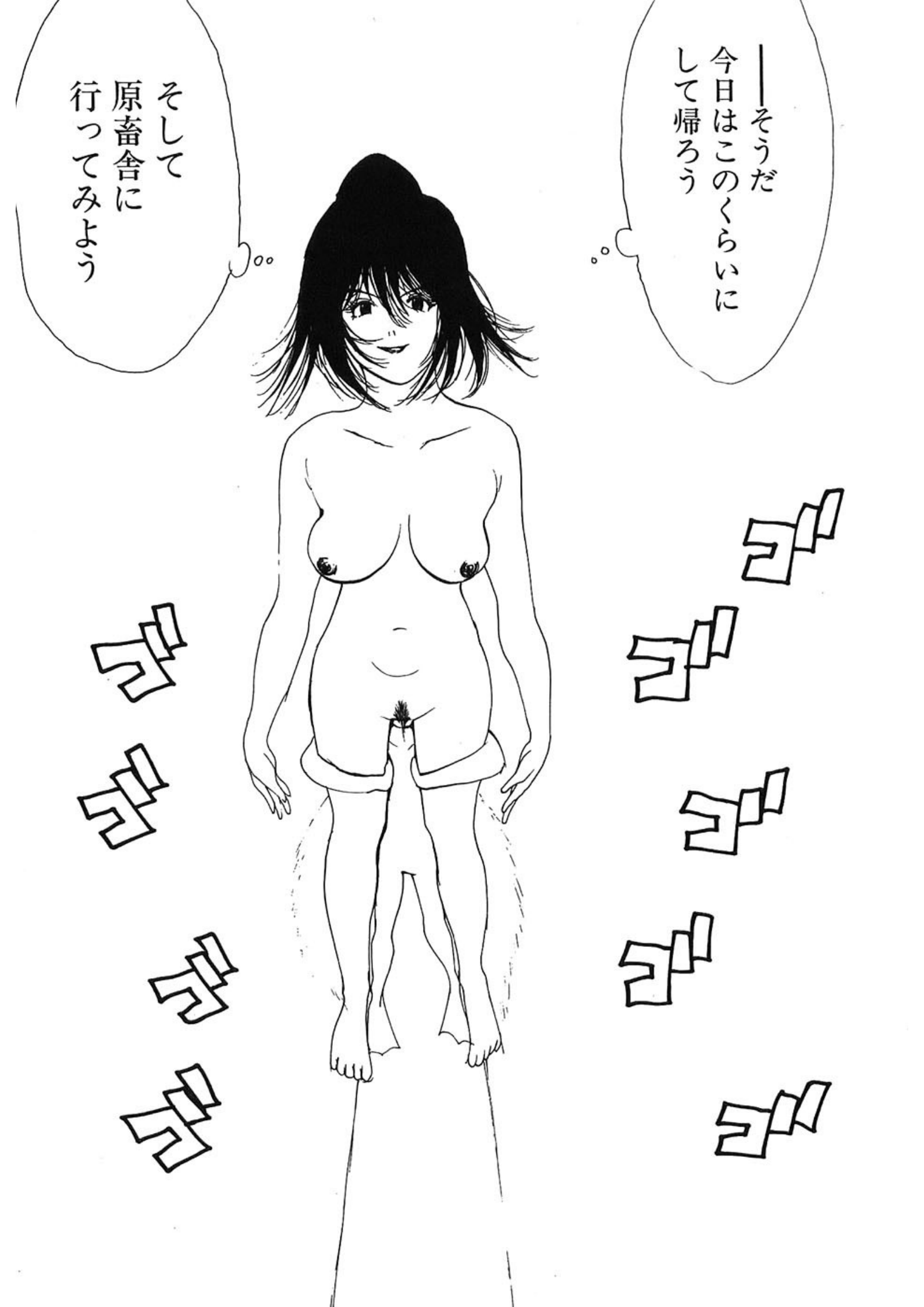
※ 客人用原ヤプーの飼育室

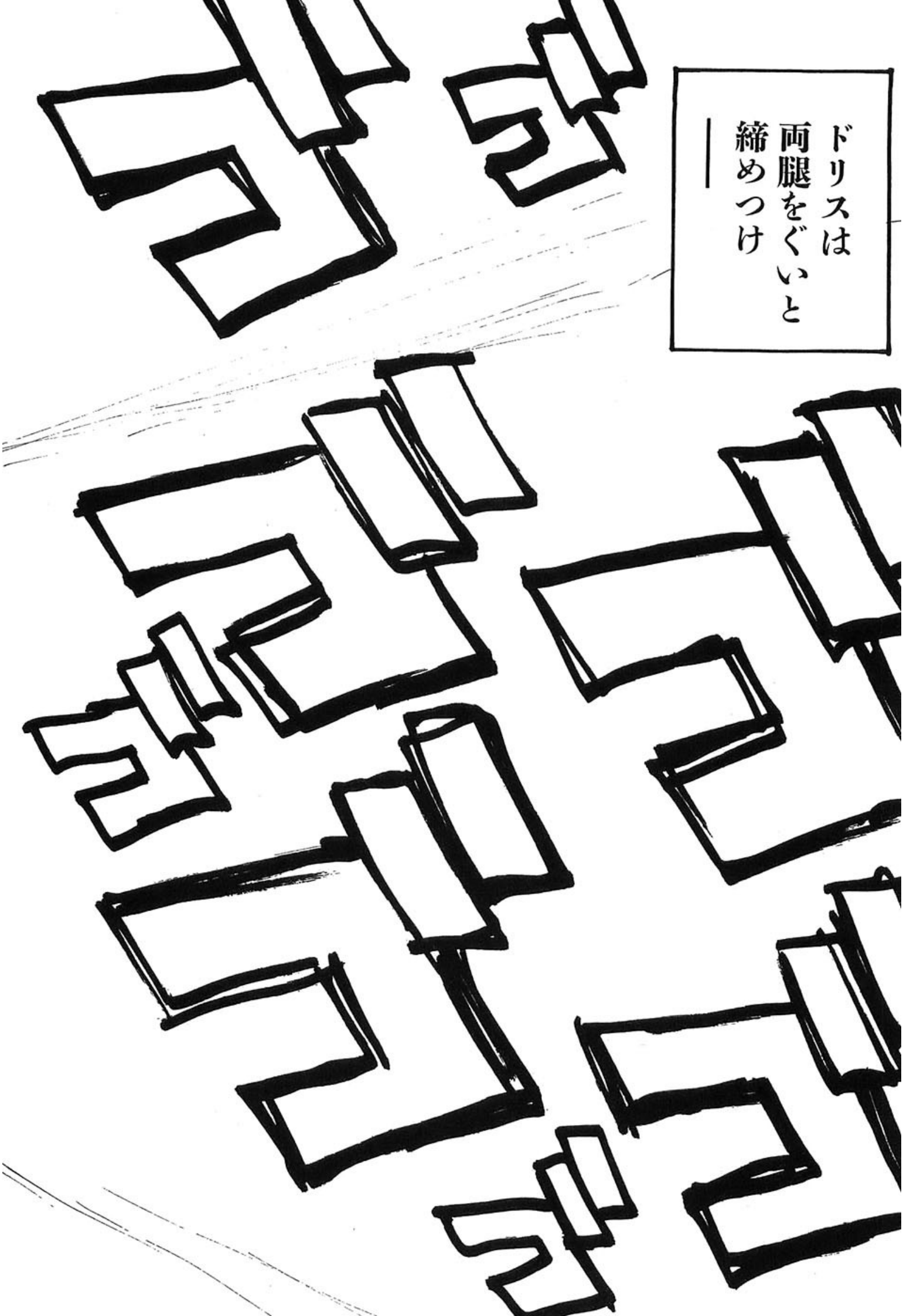


その
ジュウドーの強い
ヤプーをとくと
調べてみたくなった

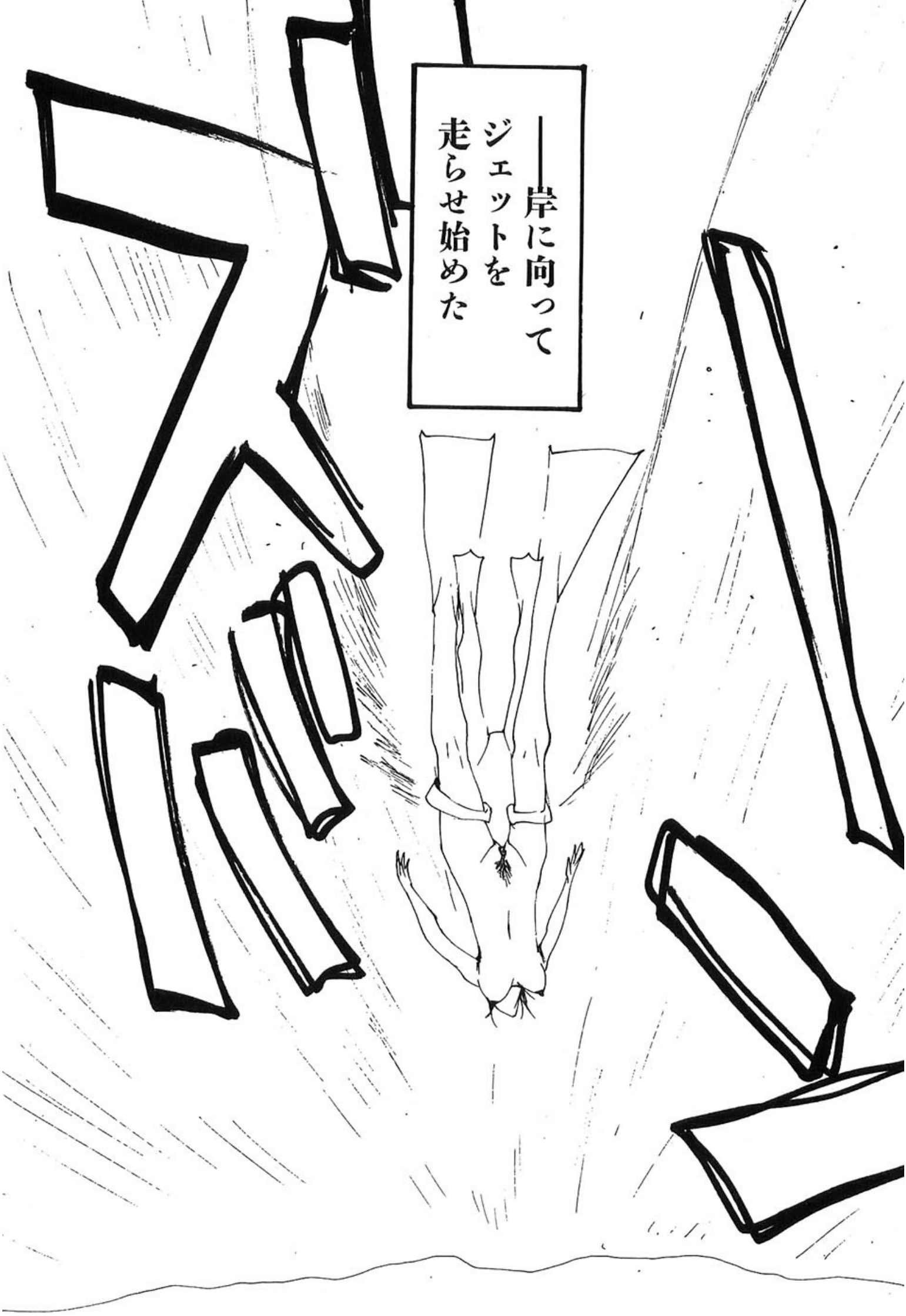


と
思ったからである


——そうだ
今日はこのくらいに
して帰ろう
そして
原畜舎に
行ってみよう


ドリスは
両腿をぐいと
締めつけ

余りきつくて
ピューの驚く
ほどだった
ギュッ
苦しいよ〜〜〜


——岸に向って
ジェットを
走らせ始めた

※俗伝にいう「河童の駒引」とはこれである

アマディオは
畜人馬(ヤップ・ホース)だった
第十五章 海辺のパルス
—第二話—

畜人馬とは
巨人ヤプー(ジャイアント)を
乗用畜に仕立てた
ものである

GIANT YAPOO

少々説明を
加えよう
巨人ヤプーは
六倍体

6倍体

つまり
固体各細胞中の
染色体数が三倍に
増加しているため

普通の二倍体に比し
三倍の大きさに
なっているのである

既に
二〇世紀においても
農芸方面では
三倍体・四倍体の
巨大蔬菜(ばけものそさい)が栽培・収穫
されていたが

ヤプー育種学の進歩は
この倍数体の応用を
ヤプーの個体において
実現することに
成功したのだ

身長
四メートル五十センチ
ないし五メートル
身体各部の比率も
これにかなっていた

肉体が三倍である
という
一点を除けば
心身共に
なんら奇形的な
ところはない

畜人犬(ヤップ・ドッグ)が
奇形ヤプーから
作出され
変種も多々存在
するのに反し

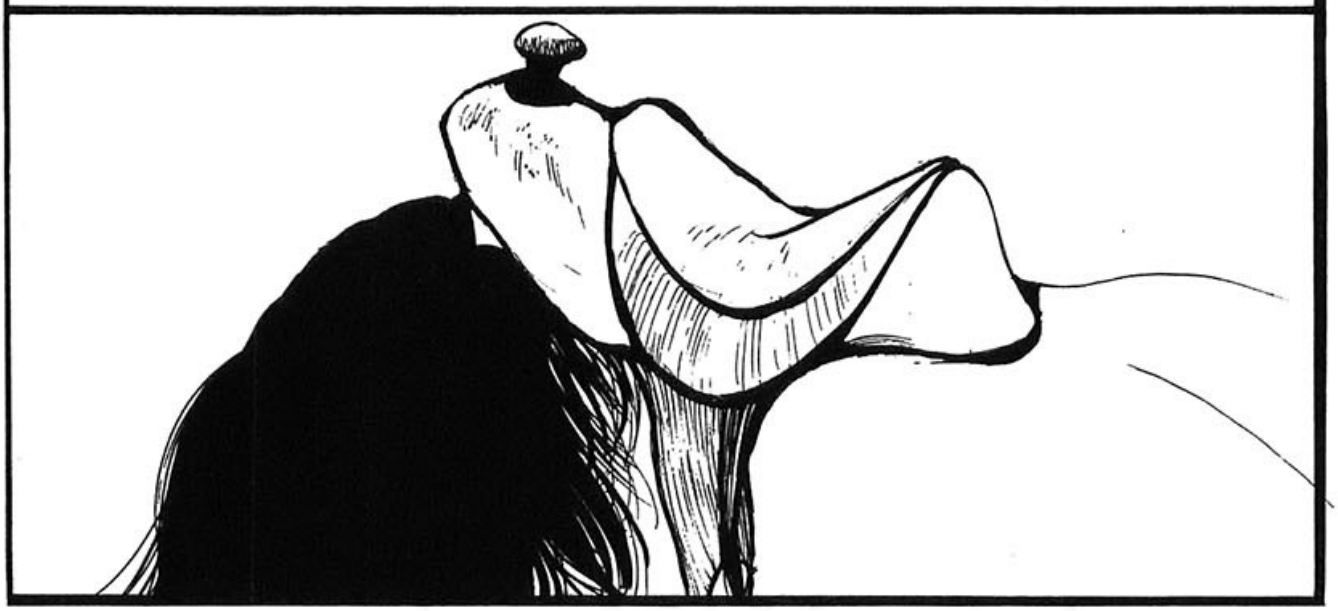
畜人馬は
単に巨人ヤプーを
畜馬具によって
拘束しているに
過ぎない

では
その
畜馬具とは
どんな
ものか？

これを装着している
畜人馬
アマディオ号

によって
説明すること
にしよう

まず
目につくのは
鞍(くら)である
巨人は
首を差し伸べて
うつ向いており
このため
後頸部(こうけいぶ)は水平に
なっているが
こうして生じた
肩から首にかけての
水平部分に
頸鞍(ネック・サドル)という鞍が
置かれる
鞍の前端が
ちょうど頂窩(ぽんのくぼ)を
押えるようになって
とがっているので
巨人は顔をあげて
首を垂直に立てる
ことは決して
できないのである



鞍の前半下部は
左右から頸部を回って
咽喉笛(のどぶえ)のあたりで
連結され
首を巻くことで
鞍を固定している

騎手としては
肩車に乗った
姿勢であるが

六倍体とて
首が太く長いから
両腿を広く開く関係で
跨るという
感じのある一方

広い肩に
ささえられた
鞍の後半と
騎手の尻との関係は
椅子を使う時のような
安定感があるのだ

手綱は四本で
轡の銜に連結された
口手綱二本は
始動と制止を

左右の耳朶に穿孔して
これに通した
耳手綱二本は
方向転換を

そして
この四本がまとめて
騎手の左手に
握られる

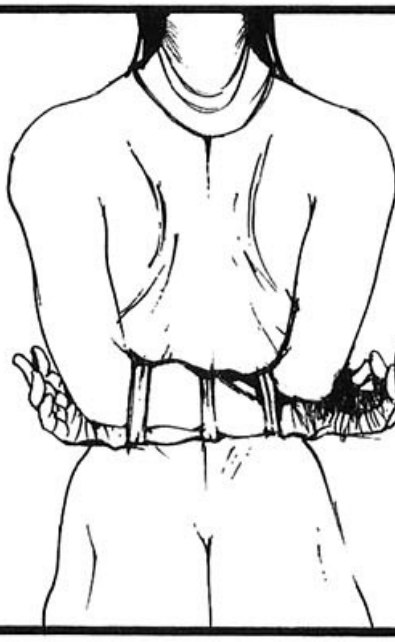
首の付根から胸元へ
左右に垂れた革紐は
形状から首飾鐙と
称ばれるもので

先に乗馬靴を受ける
鐙金があり
跨った首の左右から
垂れる騎手の両足は
これでささえられる

ここまでは
昔の馬具から
類推できるが

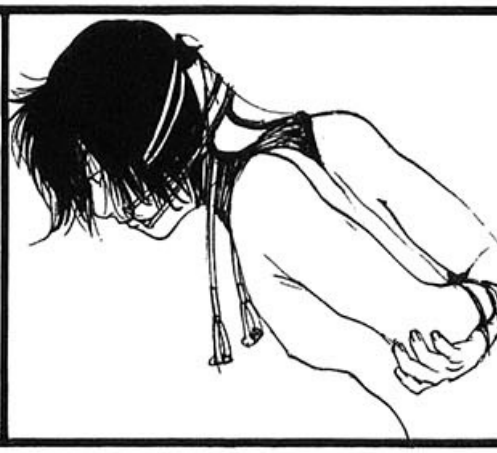
一つだけ
畜人馬独特の
ものがある

アマディオの両腕は
背中に回して
二本重ね合わされたうえ



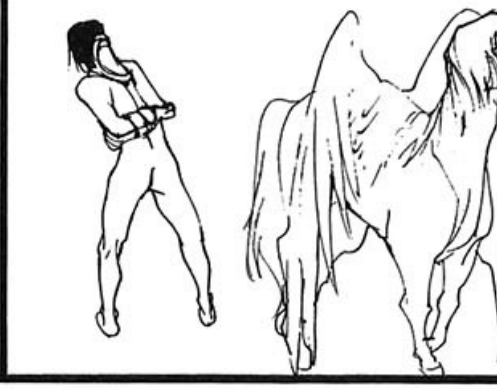
金属製の輪が三箇所で
肉に食い込むくらい
きつくはまって
両腕を結束している

片腕の手掌(てのひら)が
他方の肘(ひじ)に
当るくらいに
重なっているので



結束された
両腕はピタリと
背中について
少しも自由に
動かせない

これは
天馬(ペガサス)における
舌去勢と同じく
高次な行動能力を
減殺して



乗用畜としての
能力だけを
残すためのもので
あったが

同時に
乗馬・下馬の際の
中継台としても
有用な意味がある

立位(オシツク)の馬の鞍は
地上四メートルないし
四メートル五十センチ
の高さであり
蹲位(ウンク)を取らせても
三メートル以上である
高過ぎて
とても乗れない

そこで
蹲位の馬の背後から
ちょうど
跳箱に跨るまえに
跳躍台を踏むように

たたた

まず
背中に回した腕に
片足を掛けて
強く踏み

ぎゅん

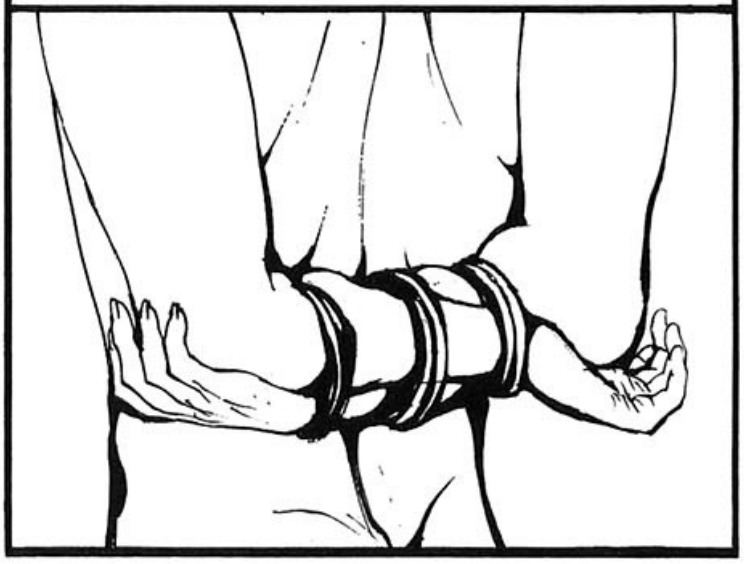
筋肉の弾性を
利用して
跳び上りつつ
股を開き
頸鞍(ホック・サドル)に尻を落す
―
これが
畜人馬の
乗り方である

ぎゅ

下りる時は
この逆を
辿ればいい

すたっ

こういうふうに
中継台に
使われるので
結束された両腕は
肉踏段(フレッシュー・クランプ)と称ばれ
三個の金属輪は
踏段輪(クラップ・リング)と称ばれる
これが
畜馬具で



わずかに
これだけの道具で
五十人力の
巨大ヤプー(ジャイアント)が
畜人馬(ヤップ・ホース)という
第一級の乗用畜(のりもの)に
なってしまう
のである

なにしろ
身長が身長だから
歩幅(コンパス)も大きい
全速力で走れば
昔の旧馬(エクウス)より
ずっと速いので
天馬(ペガサス)は別として
地上の動物への
騎乗(ライディング)としては
こんな爽快(そうかい)な
ものはなく
旧馬が畜人馬に
取って代わられた
のも無理はなかった

じっと海面を
見つめながら
主人を待つ
アマディオの
頭をかすめて
小鳥が一羽
舞い上がった

ピピピピ
ちゅ
ヨルピーン

タイタン星の
ころを
思い出すなあ

小鳥の巣を
取りに行ったっけ

タイタン星で育った
幸福な少年時代のことが
ゆくりなくも思い出されるのであった

ベデルギュース

すなわち
オリオン座α星圏(アルファ・オリオニス)
第五惑星である
巨人ヤプーの生産地
タイタン星で

二十五年前に
彼は生れたのだ

オギャー
オギャー

六倍体
というだけで
特別の肉体加工を
幼時から

セッチン族のようには

必要としない
巨人ヤプーに対しては
飼育法は寛大である。

特定の用途が
決っていないので
精神的な奇形化

例えば靴具畜(シュー・ヤプー)が
頭に履物(はきもの)を載せてないと
ノイローゼになる
といったような

も
なされない

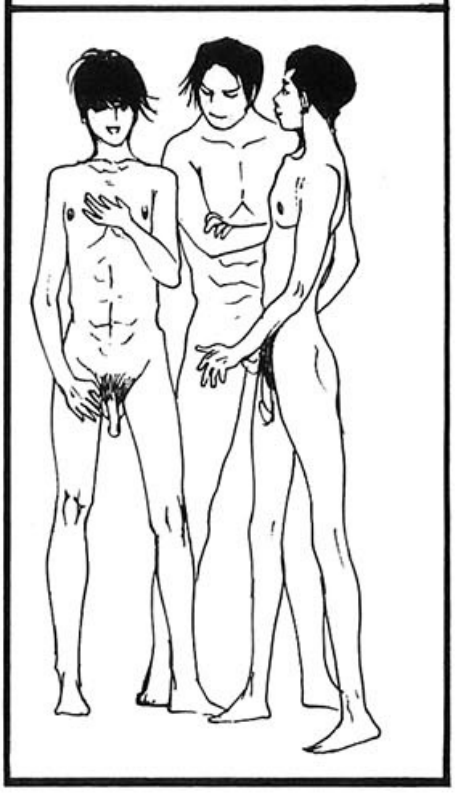
他の畜人生産星(ヤプーナル・ファーム)には
たいてい
黒奴が常駐して
飼育に当るのだが

タイタン星には
毎年一度
集荷作業(コレクション)に黒奴が
訪れるだけで

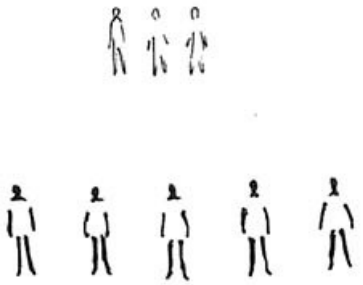
平生はまったく
巨人たちだけの
世界なのだった

皮膚強化とか
エンジン虫寄生の
作業とか
毎週一度の
畜乳給餌とか
そういった
一連の仕事は
自動機械がいっさい
管理している

だから
アマディオにしても
この巨人仲間同士でいる間
かつて自分を巨人と
自覚したことはなかった



毎年やって来る
恐ろしい
黒小人（ブラック・マニキン）の
ことは知っていた



彼らは
白い小さい神の
お使者（つかい）なのだ
といわれていた

そして
この「白小神（ホワイト・コディキン）」
についての
宗教上の教義について
いろいろと
仲間の年寄りが
教えてくれた

だが
話に聞くだけでは
なかなか
信じられなかった

二〇世紀の日本人で
「西方極楽浄土」の
実在を本気で信じる
ものはあるまい

アマディオにとっても
白い小さい神々の住む
天国星(パラダイス)など
単に教義のうえだけで
存在するにすぎないと
考えられた

彼自身が
批判力の強い
思索的な性格だった
ことにもよるだろう

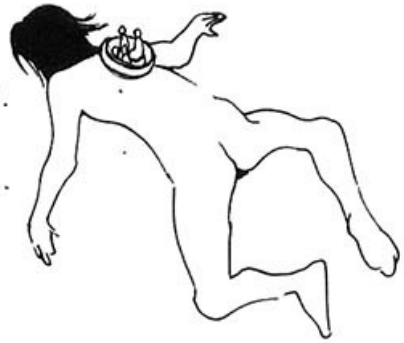
学校にも
ずっと通った

後に
おいおいと
述べるように
巨人ヤプーの用途は
畜人馬たる
ばかりではない

フレッシー・ラダ
肉梯子

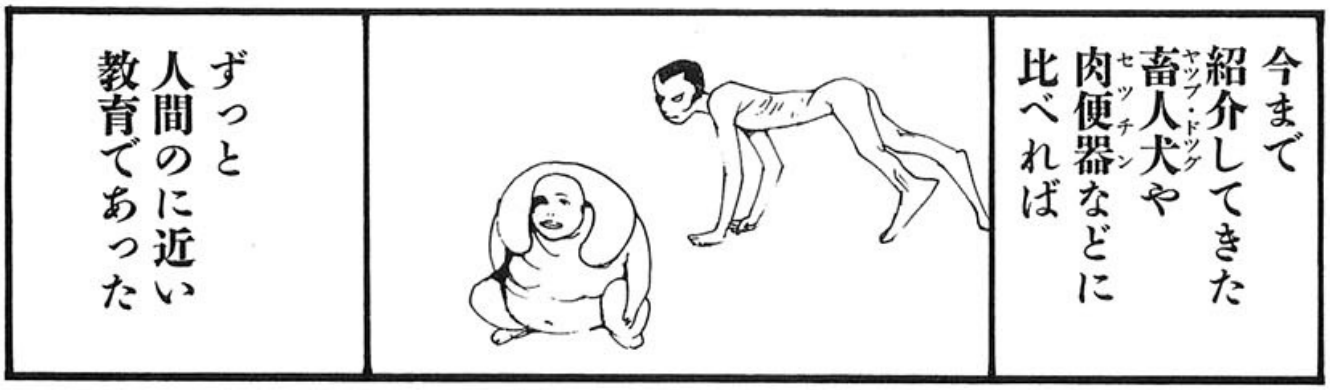
生きた
エレベーター

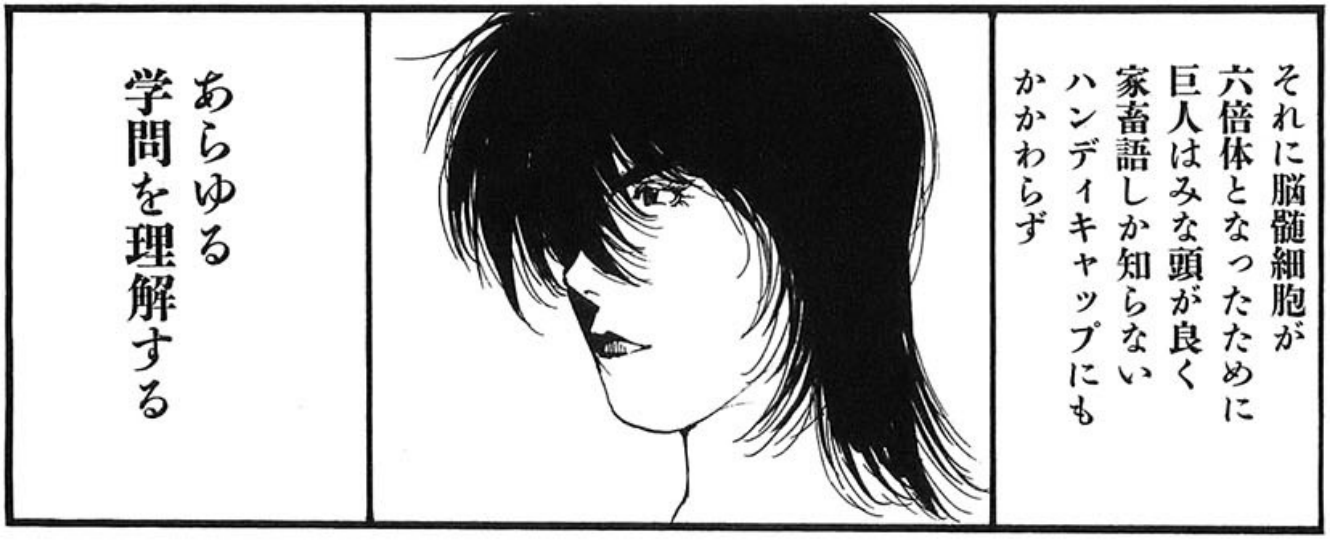
フレッシー・ボート
肉小舟



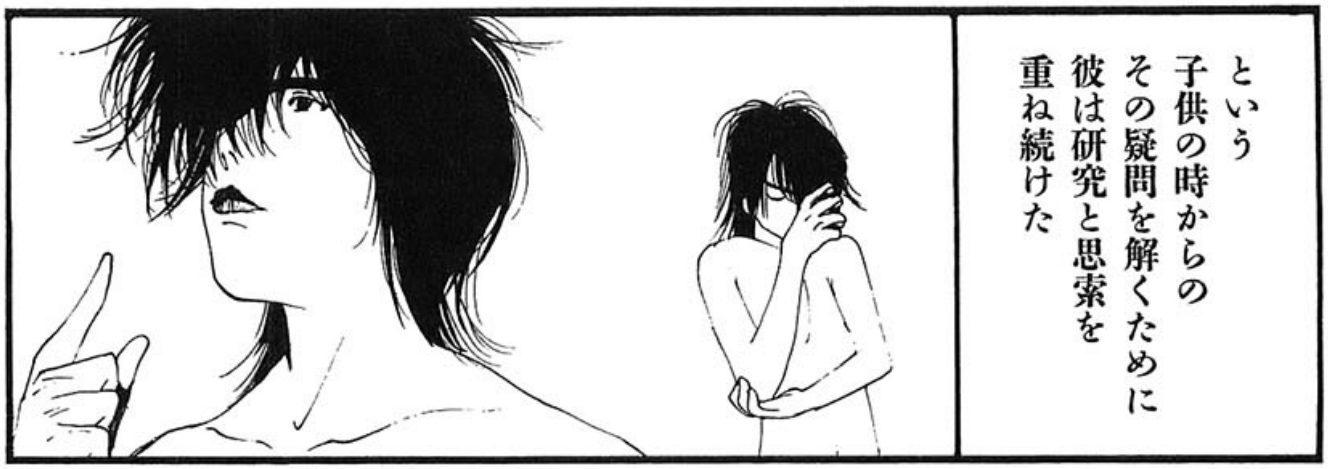
巨人の背中を
座席とした
お椀(わん)ボート
浦島太郎が乗った
という亀(かめ)は
これである

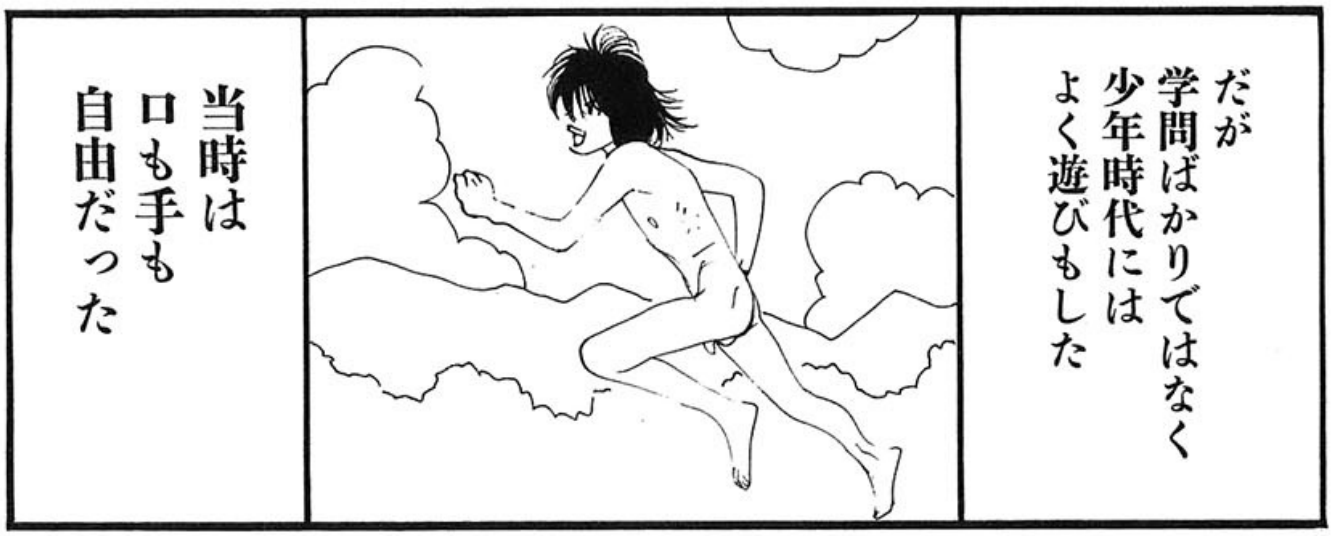
などいろいろある
だから教科は特定方向に片寄らず将来何にでもなれるよう心身の健全な発達を目指すから

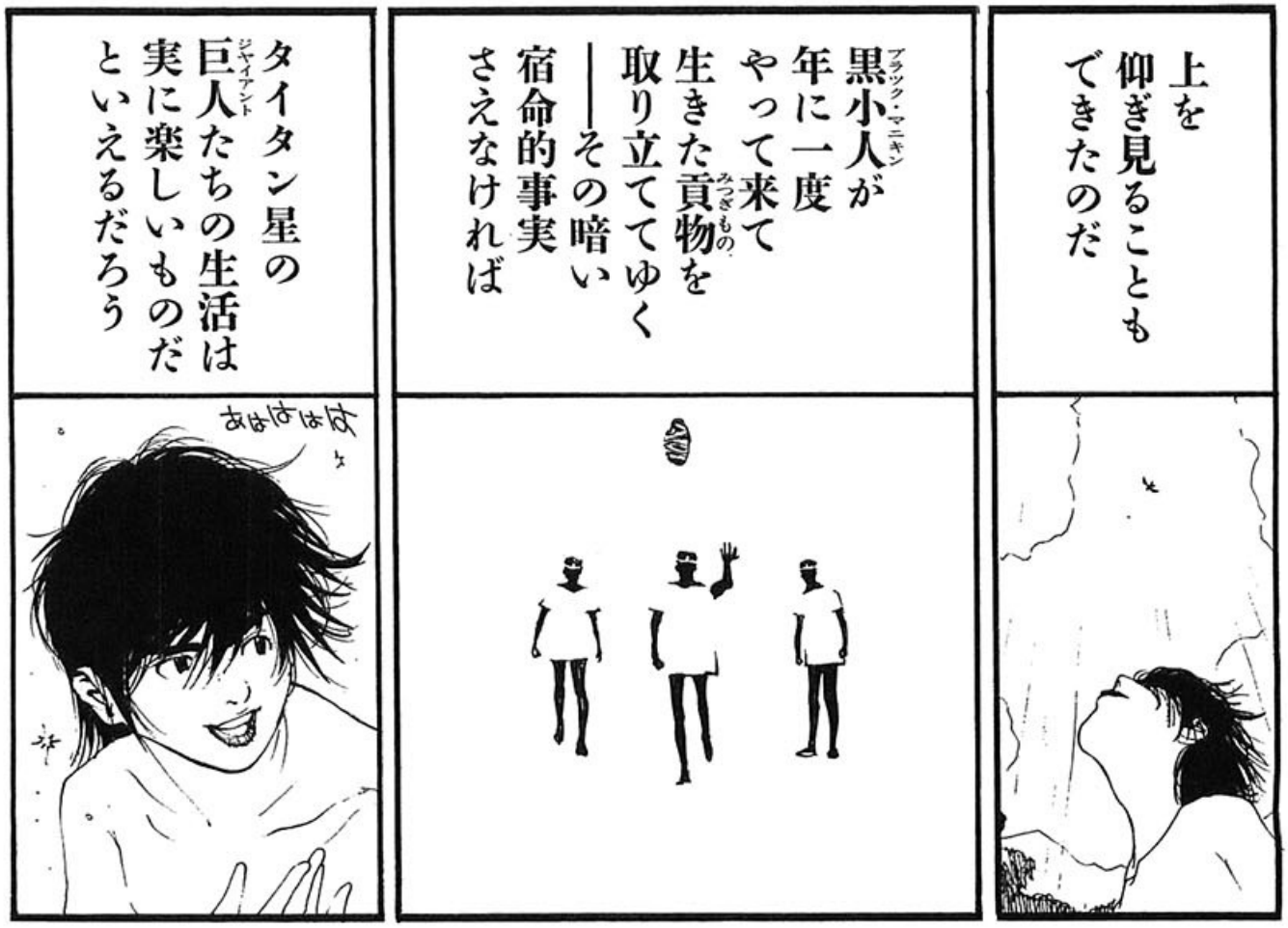

今まで紹介してきた畜人犬(ヤップ・ドッグ)や肉便器(セッチン)などに比べれば
ずっと人間のに近い教育であった


それに脳髄細胞が六倍体となったために巨人はみな頭が良く家畜語しか知らないハンディキャップにもかかわらず
あらゆる学問を理解する

アマディオについていえば彼は特に哲学が好きだった
「宇宙空間に偏在すると説かれる白小神なるものはほんとに実在するのか?」


という
子供の時からの
その疑問を解くために
彼は研究と思索を
重ね続けた


だが
学問ばかりではなく
少年時代には
よく遊びもした
当時は
口も手も
自由だった


上を
仰ぎ見ることも
できたのだ
黒小人(ブラック・マニキン)が
年に一度
やって来て
生きた貢物(みつぎもの)を
取り立ててゆく
——その暗い
宿命的事実
さえなければ
タイタン星の
巨人(ジャイアント)たちの生活は
実に楽しいものだ
といえるだろう
あはははは

生きた貢物を
黒小人たちは
白小神たちへの
人身御供に
ささげるのだ

と
いわれていた

アマディオは
大学では
哲学科を選んだ
そして
少年時代からの
懐疑と取り組んだ
形而上学
認識論
弁証法
実存哲学
……
六倍体の頭脳が
哲学史を渉猟し
宇宙と神との
本質について
沈思した

親友チカラと
討論もした

卒業論文は
「神の非実在に関する考察」
と題するものだった
「白小神とは結局
黒小人族に朝貢する
巨人族が
劣等感の代替補償として
黒小人よりすぐれた存在を
夢想しかつ創作した
ものにすぎない」
それが結論だった

チカラも
同意してくれた

巨人たちには
そういう
「思想の自由」
も許されていたのである

しかし
アマディオが
大学卒業の二十歳のとき

※コンスクリプティブ・エクザム
徴畜検査があった

※集畜(コレクション・テスト)のための検査を巨人族のほうではそう称(よ)んだ

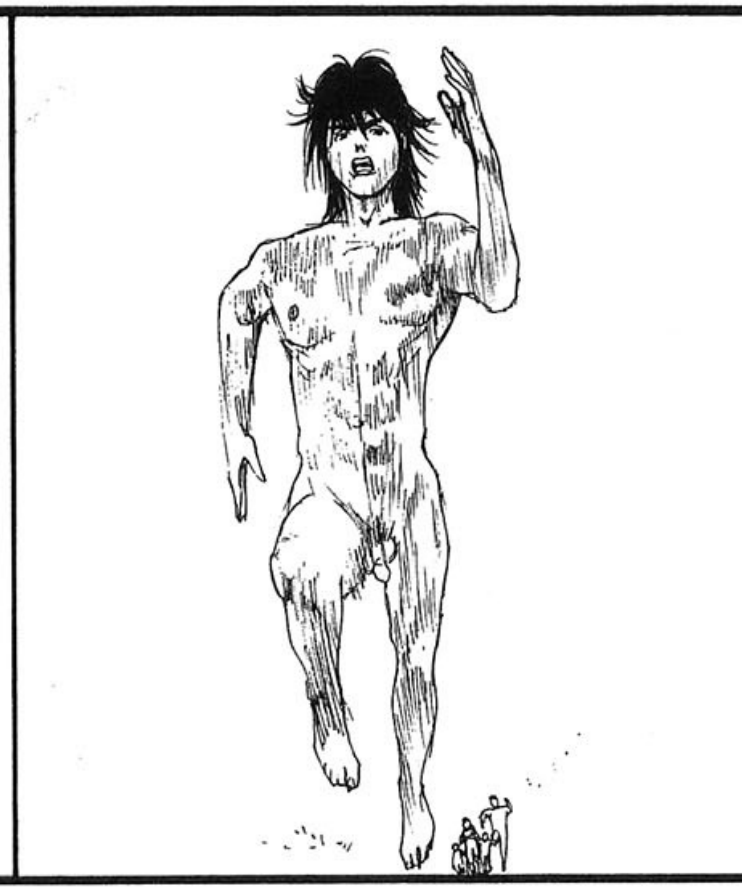
巨大な宇宙船に乗って
天の彼方からやって来た
黒小人たちの前で
学科と術科の試験が
行われた

知能指数は
一七九

特に思索推理の
能力に富む

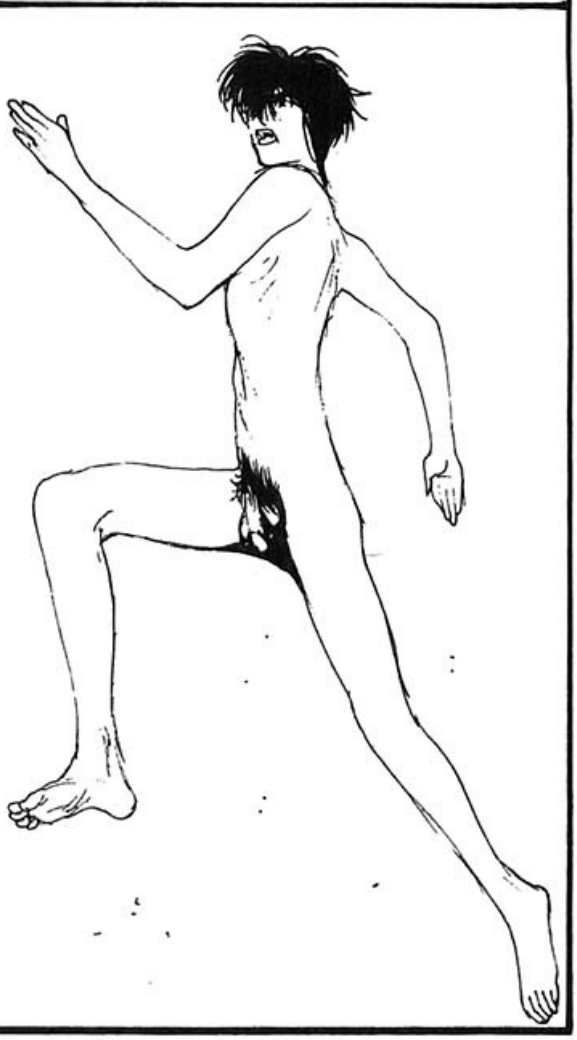
と評されたのを
彼は今でもおぼえている

が
彼の運命を決めたのは
そういう精神能力ではなかった



二千メートルを走らされ
他の者が二分余りかかったのを
彼だけは二分を切った

その
脚力に
注目された
のだ



積み込まれた
※宇宙船の船底で
友人チカラが
※弁慶(ヴェイン・キックド)
(vein-kicked)
に分類された
のに続き

※巨畜集荷専用の輸送船

※闘畜弄殺者(ウイッチウッカー)と生死をかけて闘う。
闘牛のイース版

アマディオは

お前は馬になる

という黒小人船員の
分類宣告を
むなしく
聞いたのだった

——馬(ホース)？
何のことだろう

それを
思い知らされたのは
カルー星
ジャンセン家領地の
外(はず)れにある
調教場でだった

畜人馬は
馬主であり騎手である
白人女性が
試乗するまえは
黒奴調教師(トレーナー)によって
基礎訓練される

馬の何たるかさえ知らない
巨人ヤプーを馬そのものに
仕立てるのである

白人のように
頸鞍を使うことは
許されぬ黒小人たちは

大きなロボットの
中にはいり
これを操縦して
巨人ヤプーにふさわしい
巨体を持つ調教師になる

ガシュン
ガシュン
ガシュン
ガシュン

その
ロボット調教師が
まず
アマディオの両腕を
背中にねじ上げ
金属輪で緊縛した

ギリ
ギリ
ギリ
ギリ
ギリ
あっ

両腕が振れなくなって
それがため
歩きにくくなる

それを長い
調教馬索(トレーニング・ウイップ)で
追い立てられ
馬場を歩き回される
辛さに耐えねば
ならなかった

ガシュ
ガシュ
ガシュ
ガシュ

そうして
それでもやっと
元のような速力で
歩けるようになって
半年後

ダダダダダダダダ

ロボットは
いきなり
彼の口に
銜(ビット)をはませた

ガッ!!

舌袋がついていて
舌が収納され
アマディオは
自由な発言手段を
封じられてしまった

あうっ

そして
あの頸鞍(ネック・サドル)!

首も頭もうつ向いたままの
無理な姿勢をとらされ

う
う
う
う

それ以上
上を向くことが
できなくなったのだ

……それでもまだ
アマディオにはそれが
何のためかがわからなかった

なぜ俺(おれ)は
こんなにまで
いじめられねば
ならないのか？

が
疑問を持つ余裕もあらばこそ
装具をつけられ
しゃがんだり
立ったり走ったり

ドドド

初めて
白小神(ホワイト・ゴディキン)を見た日
主女神(ミストレス)ドリスさまに
試乗された日

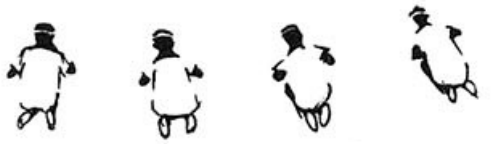
〝畜人馬(ホース)ロディオの日〟
……

引き出された
広い馬場には

黒奴調教師と
同じくらいの
白小人(しろにびと)といいたいほど
ちっぽけな体だったが

白い肌
金の髪
青い目

かつて
タイタン星で
聞いたとおりの
美しい神々が
集まっていたのだ



そして
黒奴たちがその前で
うやうやしい
土下座の挨拶(あいさつ)を
していた

——
白い小さい神は
実在していた！

長いことといだいてきた無神論への
この痛烈な反証を目前にして受けた
大きなショックはアマディオにとって
実にはかり知れないものがあった

神は現実に生きていた！

なんと一人の小さい女神が蹲位をとる彼の腕を踏んで頸鞍に跨ったのだ

その重みで頸骨はしない顔はいっそう苦しくうつ向かせられてしまう

苦しくて痛いのでアマディオは振り落そうとしてもがいたが

結果としては手綱の轡に締めつけられ口と耳のあたりが激しく痛めつけられるばかりだった

それでも騎手を振り落すまで彼はどのくらいあばれたか

もう今では
はっきり
おぼえてはいない

でも
今にして思えば
彼は相当に
癇の強い荒馬で
あったことに
間違いはない

三度まで
騎手を落馬
させたのだ
——

だが
この白女神も
大した騎手
であった

結局は
その日のロディオが
終了しないうちに
アマディオを
乗り馴らしてしまった
のだから

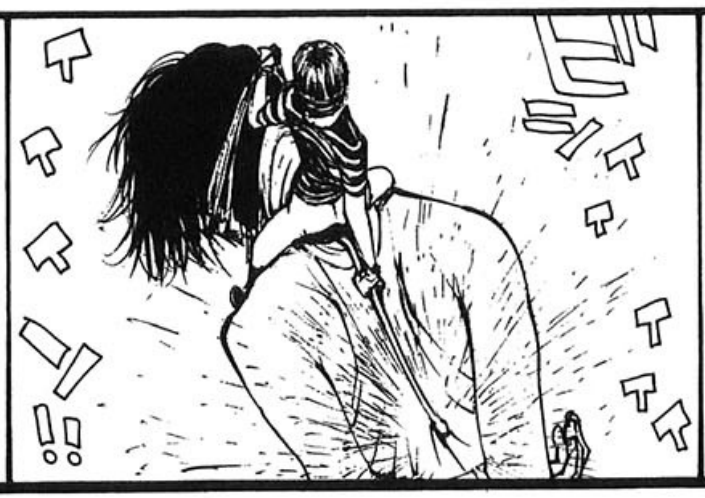
女騎手が
彼の知性的な面を
まったく無視して
言葉を使わず
ただ手綱と騎座とで
無条件に意志を
伝達してくることは

彼の自尊心を
傷つける
最大のもので
あった

だが容赦なく
鞭が背中に鳴り
拍車を胸部に
蹴込(けこ)まれ
手綱で口を
締めつけられると

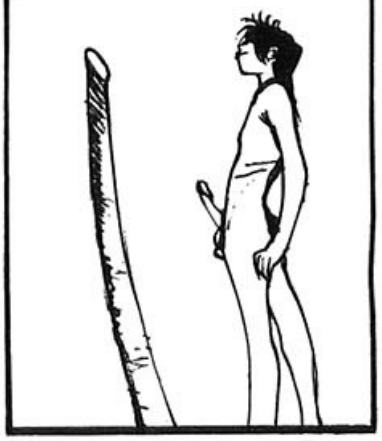
その苦痛に
抵抗しきることは
困難だった

背肉を
えぐるか

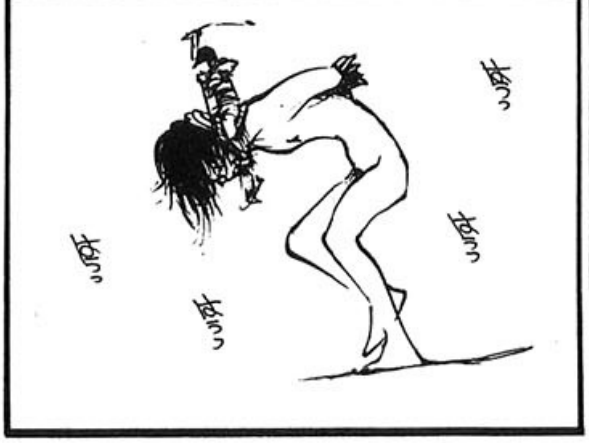


と思われる
女神の右手の
乗馬鞭(シャムボク)が

自分の同類の馬の
penisから
作られていることは
知らなかったが



頸鞍(ネック・サドル)に座して
彼を支配する
白女神の存在が
絶対であり
その意志には
無条件に従わねば
ならない



ということは
認めざるを
得なかったのだ

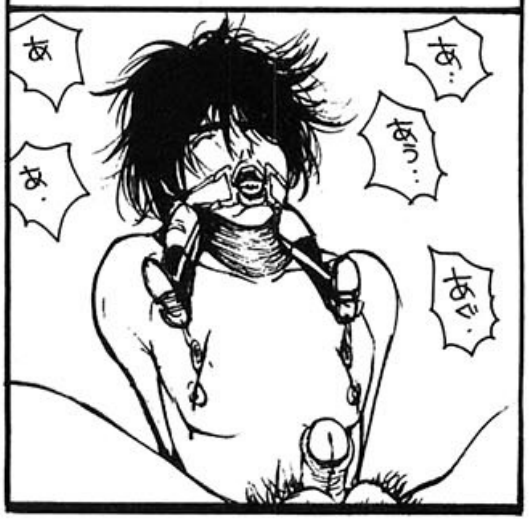
馬とはこうして
騎られるもののことだったんだ……

大学の卒業論文で
「神の非実在」を
見事に論証したはずの
アマディオが
その神に騎られている！

神への不敬の
懲罰として
なんとも皮肉な
光景ではあった

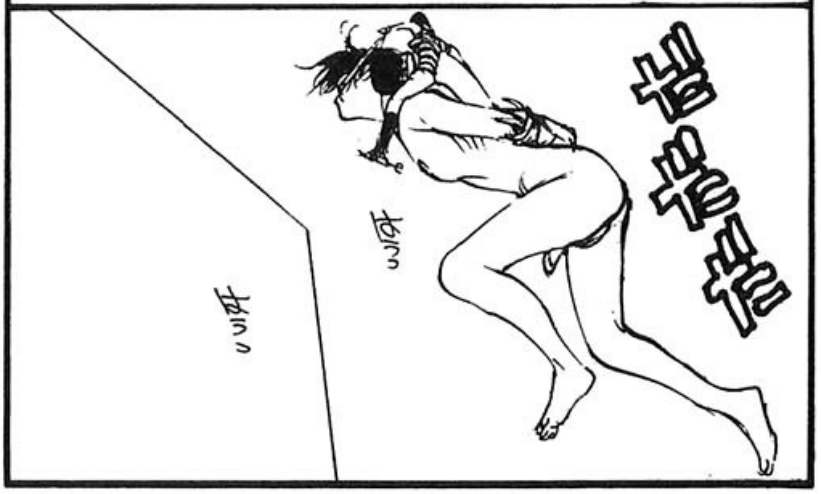
神の存在を
実証する証が
ほかならぬ
自分自身で
あったのだ

神は騎り給う
故に
神在り
吾は神を保持す
故に
吾在り



この絶対命題が
それまでの過去の
アマディオの人格を
崩壊させ
同時に
畜人馬としての
新しい彼の生涯が
その日から
始まったのである

彼の主なる白女神は
障害飛越が好きだった
三メートル
四メートル
五メートル
と
巨人ヤプーの巨躯を
もってしても
容易に越せない
高障害に
向わせられる



拒否しても

拍車で強制される

騎手の意志が
気まぐれでさえが
馬にとっては
絶対命令なのだった

「絶対者」の
存在は
絶対であった

彼が見事に
障害を飛び越えたとき
絶対者は彼を賞でて
頭をなでてくれる
その手が
恐ろしい
絶対者のもので
あるがゆえに
その手の優しさは
彼を歓喜させる

……
こうして彼は
知らず知らずのうちに
神への回心を経
信仰を深めていった
のであった

かつて
強固な
無神論者で
あった彼が

今では激しい鞭撻を
神の試練として
愛の鞭として
感謝するようにまで
なっている

女神の
一時の娯楽のために
全心身が疲労困憊
させられるのだ
とわかっていても

そうして
神を楽しませる存在
たりうること自体が
うれしいのであった

それでも
彼の思索力が
減退した
というわけでは
なかった
勤務の余暇には
畜人神学の研究に
情熱をささげた

信仰によって開かれた
心の目にはいっそう深く
白神信仰(アルビニズム)の浄福に
あふれた世界が映じた

それまでの
積年の哲学は
甘んじてその神学の
婢(はしため)となった

やがてアマディオは
真理を悟得したのである

と

侯爵令嬢
ドリス・ジャンセン

この御方こそ
彼にとっての絶対者
白女神なのだった

悟得以来
すでに二年余
きびしい愛の鞭で
可愛がられ
彼も
その愛に応えて
良き馬になり
腕を上げ
競技会などでは
ドリスを騎せて
優勝したことも
幾度か
そういえば
別れたきりの友
チカラは
今いったい
どうなって
いるだろう
……
はるか沖合から
一直線に進んで来る
主人を認めて
彼は回想の糸を
切った
ドドドドドド
主人の金髪が
後ろに
なびいていた
波の上に出たので
覆面帽を脱いで
背中に垂らし
首から上だけは
白人に戻ったのだ

アマディオは
後ろ向きになって
蹲位(ウンク)を取り
騎乗を待つ
姿勢になった

だっ

波打ぎわで
股をゆるめて
ピューを解放した
ドリスは

ぱっ

手ばやく
フリッパーを外し

ぴっ

左手にマントを
つかみつつ

だっ

畜人革(ヤップ・レザー)の
長靴を履くと

ぱっ…

肉踏段(タラップ)を
一踏みして
下半身を
はねあげつつ

ぱんっ!

両脚を開き
軽やかな
二動作で
鞍に跨った

ぱっ。

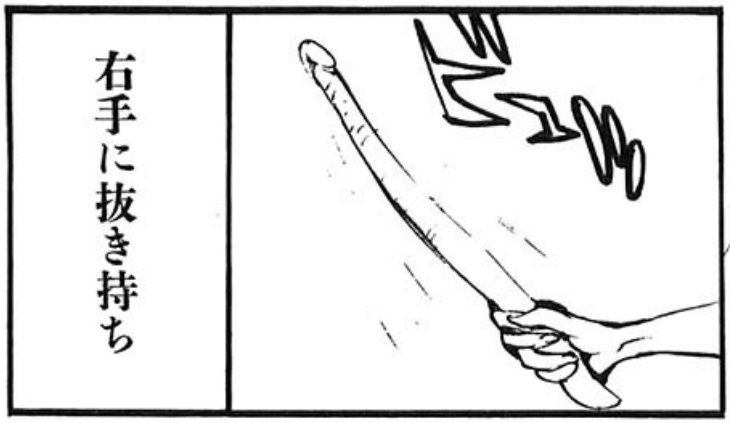
続いて
ピューが踏段輪(リング)に
下から飛びついて
巨体の腕にしがみつく
間髪を入れず

ぴょん

ぱっ…

Shicko
(立て)

ドリスは
アマディオの耳の穴に
差し込んでおいた
シャムボクを
ぴっ…

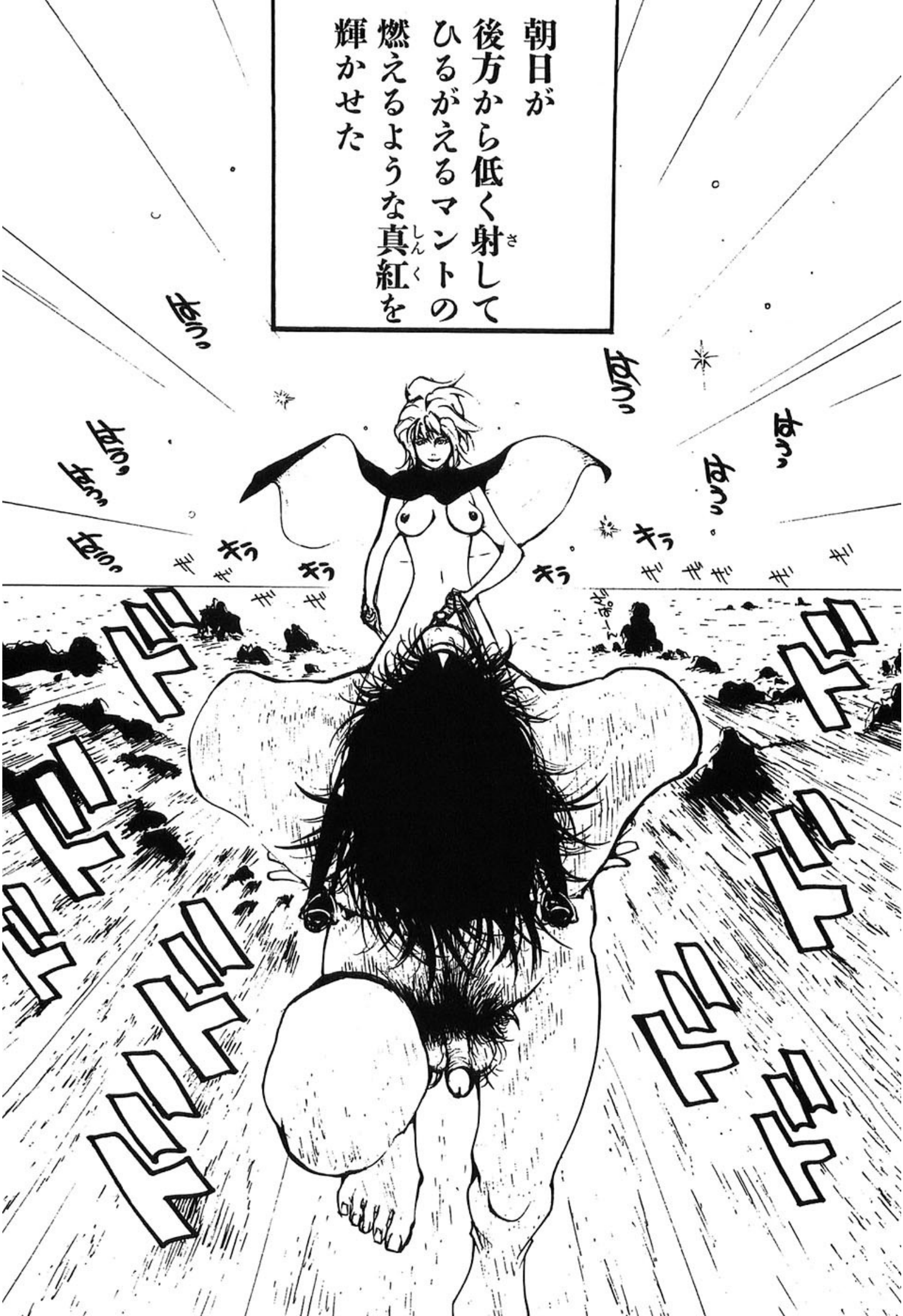

右手に抜き持ち

ピシーッ

走らせながら
ドリスは
覆面帽を
襟からはずし
代りに
抱えていた
乗馬マントを
羽織った
ぶっ!!

と
一発背中で鳴らし
同時に首飾鐙を
踏んばって
胸に鋭い
拍車を加えた
ガシッ
ガシッ

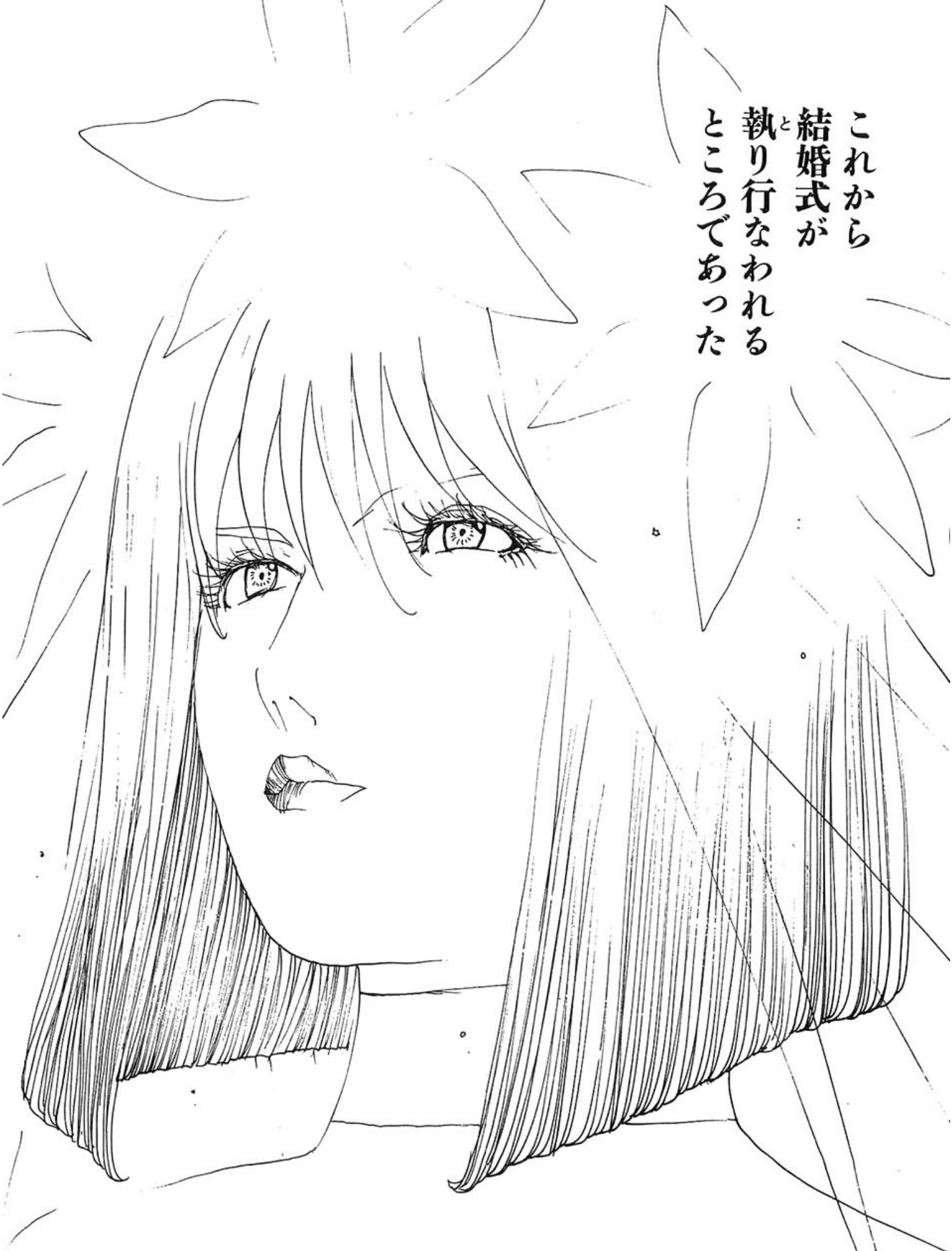
アマディオは
水晶宮目ざして
必死に駆け出した
ガラッ!!


朝日が
後方から低く射して
ひるがえるマントの
燃えるような真紅を
輝かせた
ばっ
ばっ
ばっ
ばっ
ばっ
ばっ
ばっ
ばっ
キラ
キラ
キラ
キラ
ギ
ギ
ギ
ギ
ギ
ギ
ドド
ドド
ドド
ドド
ドド
ドド

YAPOO, THE HUMAN CATTLE

YAPOO, THE HUMAN CATTLE

麟一郎は
教会にいた
ヴェールを
かぶり
オレンジの花
百合の花に飾られた
純白の花嫁衣裳で
いっそう美しさを増した
クララの横にいた

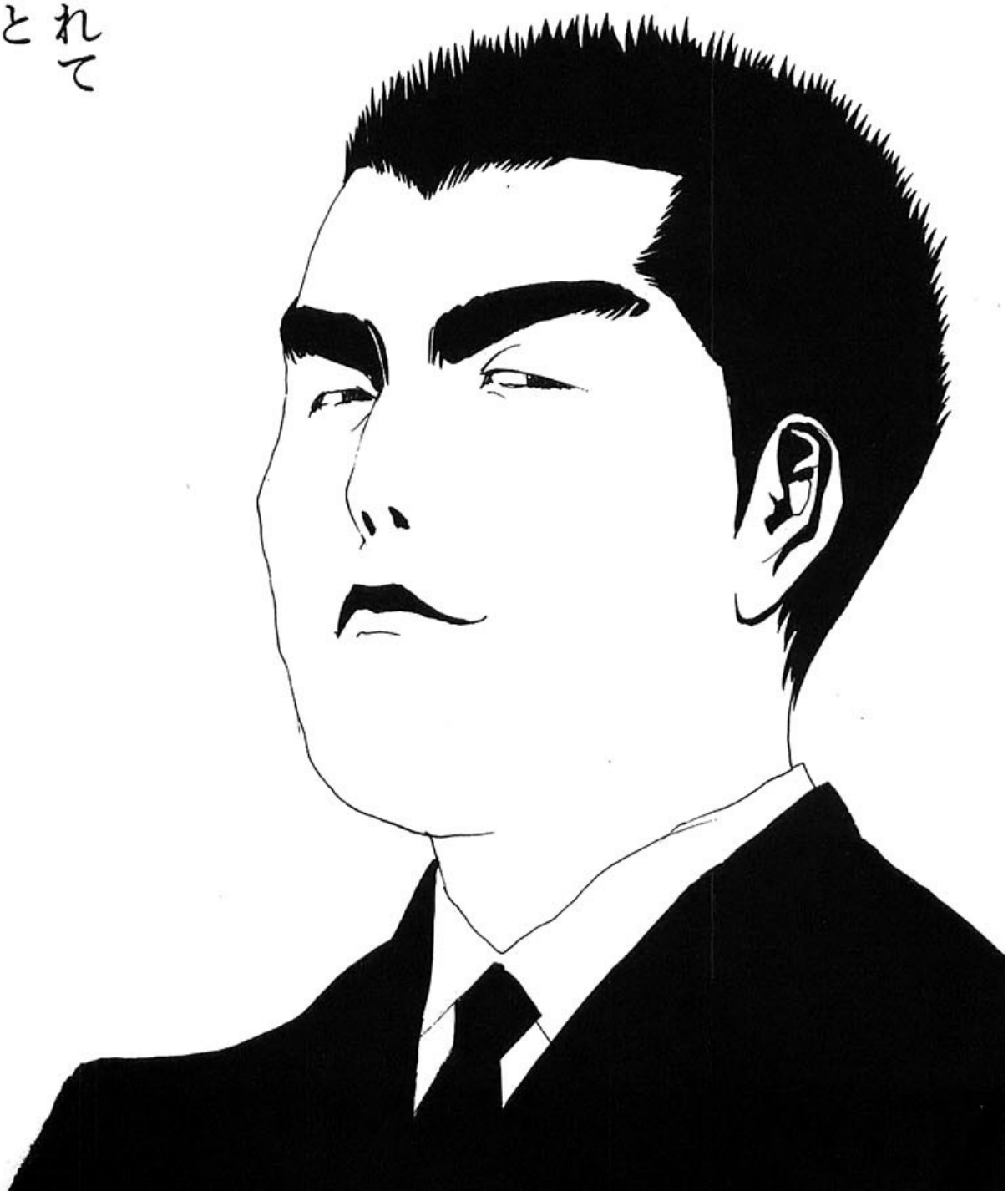


第十六章　夜明けの予備檻で　―第一話―

―
よかった

とうとう
ここまで
こぎつけたな

一時は
二人の仲がこじれて
どうなるものかと
思っていたが……



そのとき
麟一郎の目の前に
大きな杯と
変てこな形をした
酒器が二つ
持ち出された

三三九度の
固めの杯を
行なう
牧師がいった

杯一つに
酒器二つで
三三九度とは
変だな
——

それに
教会でやるのも
おかしい

祖国で
披露するときに
日本風の儀式を
やろうと話したことが
あったから

彼女が
思い出したん
だろうけど
それにしても
変な形をした
酒器だな……

いぶかりながらも
正坐して
杯をとった

牧師は
二つの酒器
——

横にねかせる
ようになって
上部に握り柄が付き
古代の香炉のような
形をした中に
黄色い液が
透けて見えた
——を
取り上げて

トッ
トッ
トッ

と
三度に分けてつぎ
もう一つからも
同じようにして
三度に分けて
つぎ込んだ

黄色い液が
白い陶器に
美しく満ちた

さあ
三
三
とついだ

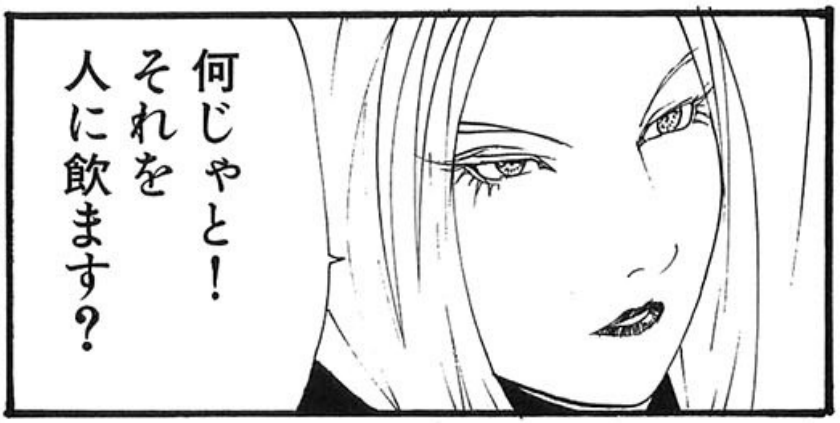
三三九度になるよう
それを三口で
飲み干しなさい

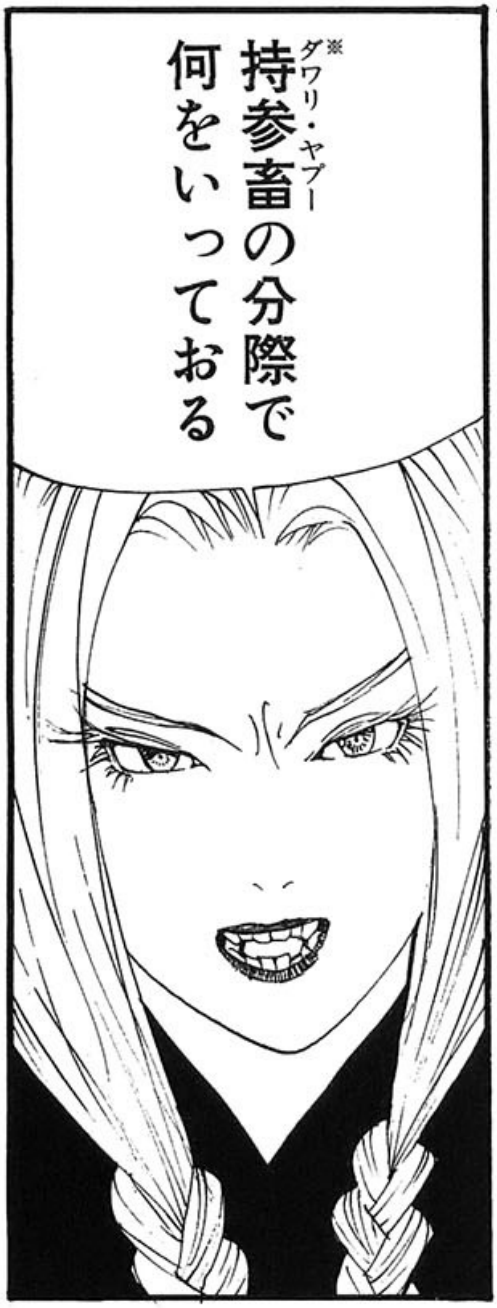
一口は新婦のために
一口は新郎のために
最後の一口は
選ばれた自分のために
……

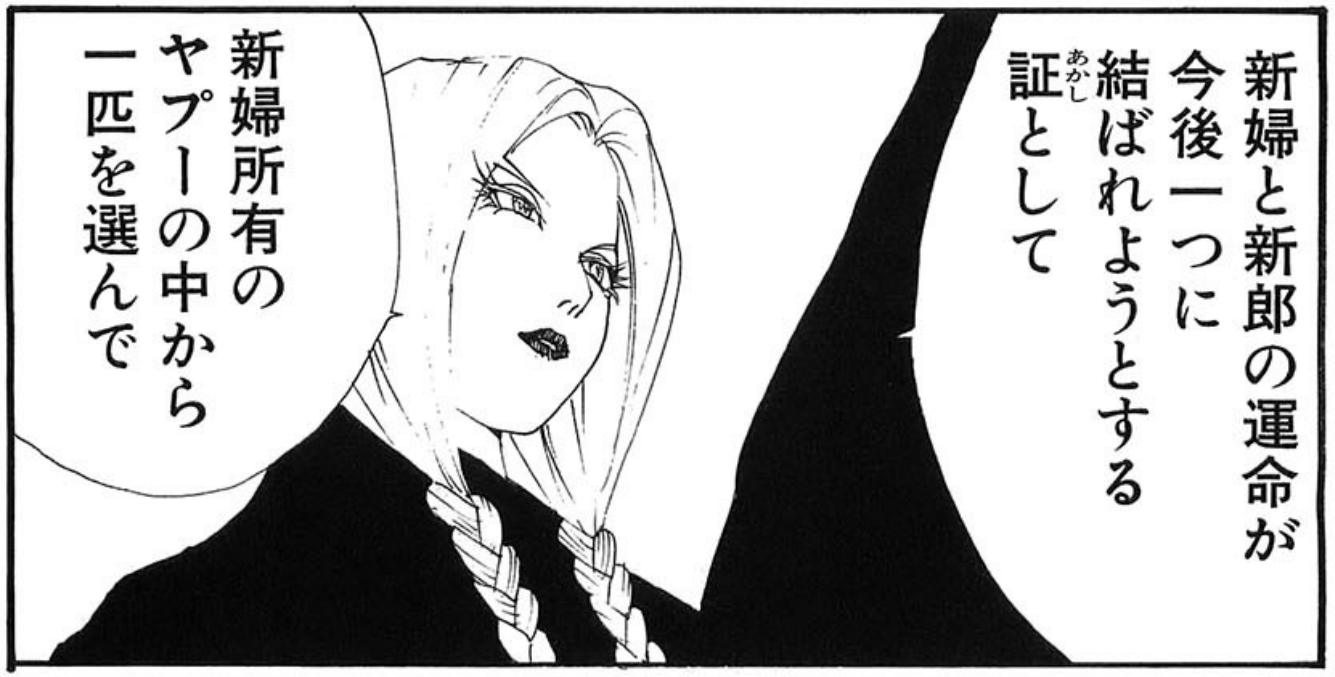
指図(さしず)をする牧師は
セシルに似ていた

……が
頭上に後光が
さしているように
見えるのは
気の迷いであるのか？

※ 花嫁の特有財産として新婚家庭に携えられる家畜







両人の聖水(ワラ)を
混ぜた下杯(ビス・カップ)を
飲ませるのが
三三九度の儀式じゃ

お前はその一匹に
選ばれたのじゃ

あまりの光栄に
血迷ったのも
無理はないが
落ち着くのじゃ

そして三口で
飲み干すのじゃ

お両人(ふたり)が
待っておられる……

牧師の
説得の意味が
わからなかった

お両人(ふたり)

といわれて
そちらを見ると

まず目についたのは
長身の青年である

亜麻色(あまいろ)の髪

灰色の目

鷲(わし)のような鼻

――
あのウィリアムが
婚礼用の礼装で
立っている

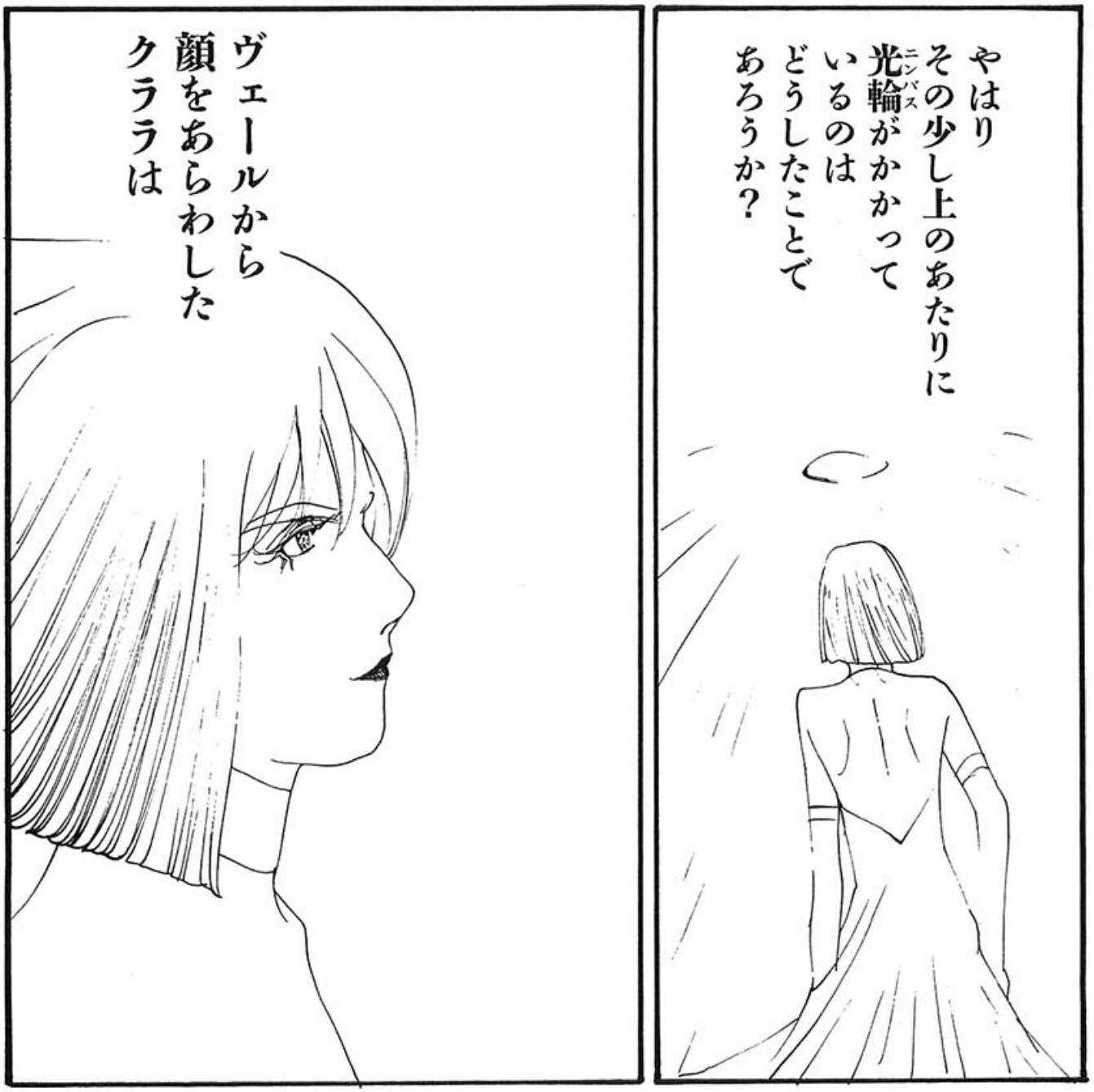
そして
花嫁が持つべき
白い花のブーケを
手に持って
いるではないか

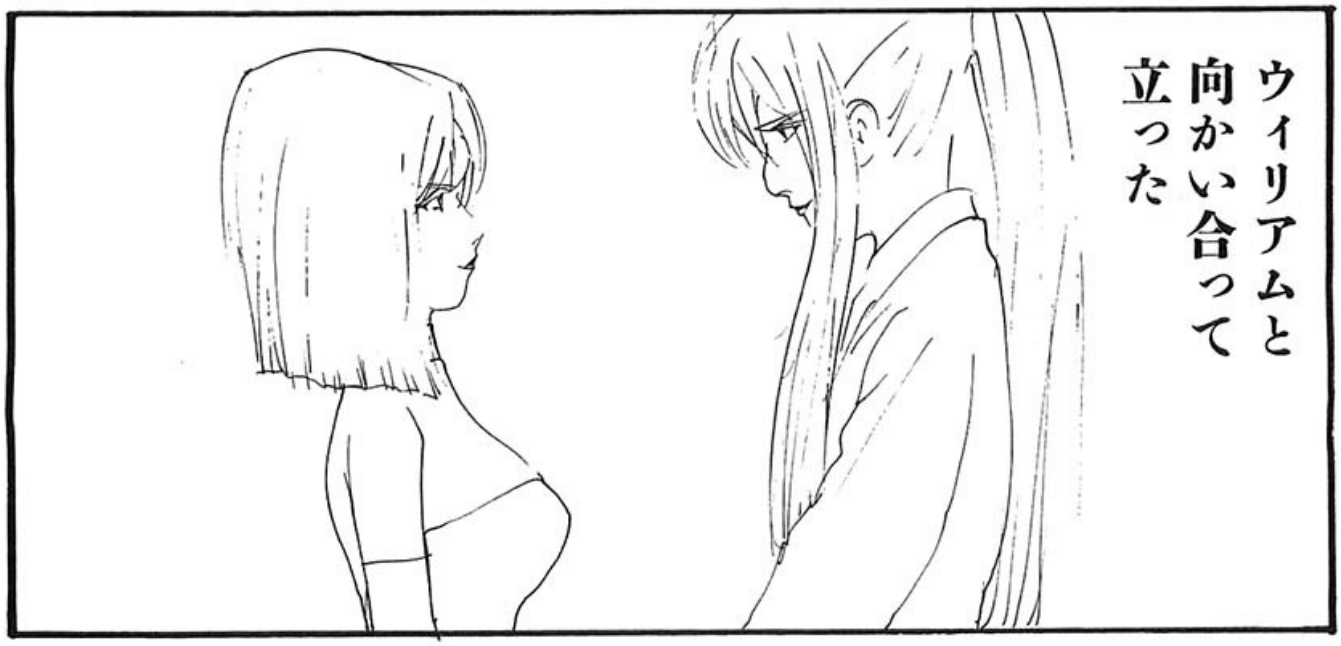
その彼の頭上にも
後光が輪のようになって
浮んでいる

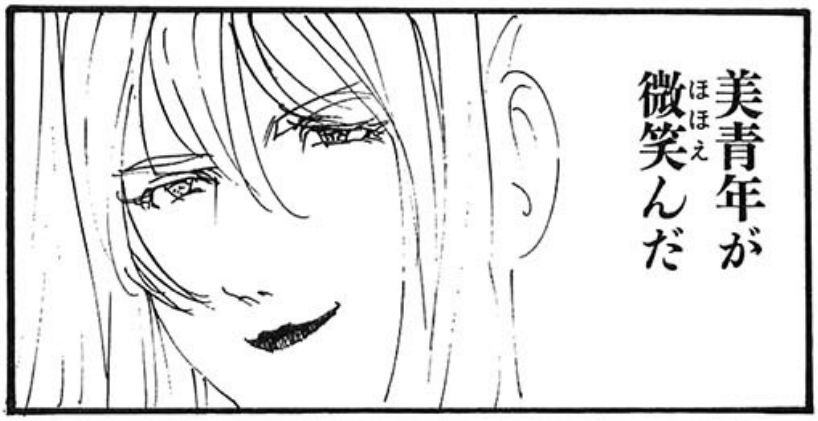
……
気がつくと
それまで
横にいたはずの
クララが

長い裳裾(もすそ)を
引きながら
ウィリアムのほうに
歩み寄っていく

頭上の
オレンジの冠は
いつか
脱がされていたが


やはり
その少し上のあたりに
光輪(ニンバス)がかかって
いるのは
どうしたことで
あろうか？
ヴェールから
顔をあらわした
クララは


ウィリアムと
向かい合って
立った


美青年が
微笑(ほほえ)んだ

両方から
手を伸ばし合い

かたく抱擁(ほうよう)し

顔を重ねる
ようにしての
長い接吻(せっぷん)だった……

麟一郎は
まるで悪夢を見る
思いであった

あまりのことに
信じられなかった

立ち上がろうとして
ハッと気づいた

自分はいつの間にか
素裸になっている
ではないか

羞恥のために
足がすくんだ

俺はいったい
どうなるんだ
裏切者！

婚約指輪の
交換まで
しておきながら
畜生！

こんな指輪
たたき返してやる

麟一郎は
クララ目がけて
指輪を投げつけた

ところが
それは牧師の背中に
命中し

そして
爆発した

ドーン

天地はために暗く

暗転のうちに

煙がはれていった
時には

すべて消えさって

ただ一つ
あの鞍形(サドル)の背を持った
怪物椅子(ばけものいす)が

ヒュン
ヒュン
ヒュン
ヒュン
ヒュン

鞭のような触手を
振り振り
近寄って来る

ヒュン
ヒュン
ヒュン

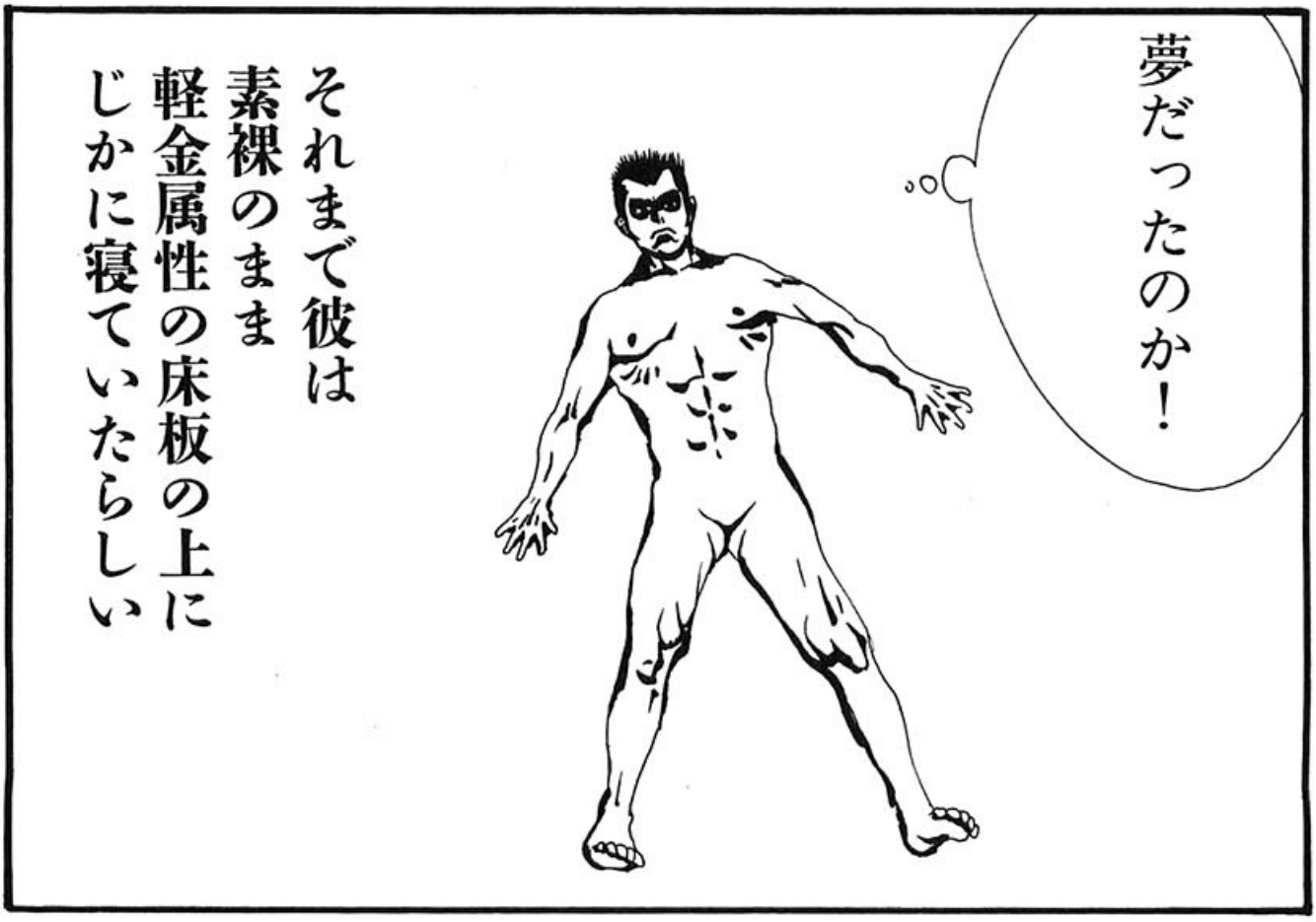
麟一郎が
後退(あとじさ)りするのを

ヒュン
ヒュン

ヒュン
ヒュン
ヒュン

どこまでも
追って来る……

アーッ
自分の
叫びで
彼は
目ざめた


夢だったのか！
それまで彼は
素裸のまま
軽金属性の床板の上に
じかに寝ていたらしい

網目の天井

鉄の格子

と見回して気づいた

これは檻ではないか！

獣の檻なのだ

檻が置かれた室内は煌々と明るかった

昨日の午後以来どれほど多くのことが起ったか

一連の出来事が走馬灯のように
麟一郎の頭の中をよぎっていた

――
全身麻痺
人犬
焦熱地獄
立回り
皮膚反応痛
再会
心中……
そして
自分だけが
死にはぐれた
去勢され
舌を噛んで
……
それも
失敗ったんだな
……

自嘲はあったが
不思議と絶望は
なかった
生本能原液の
注射が効いて
麟一郎の
個体保存欲は倍増し
生命を惜しむ気持が
逆に強くなって
きているのである

だが
クララは
もういない
ということが
彼の胸を締めつけた

一時の激情で
彼女を殺してしまった
ことの自責が
彼をさいなんだ

しかも
この奇怪な未来社会から
彼を救い出してくれる人
といっては

彼女をおいて
誰がいるというのか！

――
その彼女を
絞め殺して
しまったのだ！

クララ
赦(ゆる)してくれ！

叫んでみたが
いっそう悲しみは
倍加した

左手の指には
夢の中で
投げつけた指輪が
まだそのまま
チャンとはまっていた

これだけが
唯一の記念と
なってしまった

〈クララよりリンへ〉

と
指輪には
刻まれていた

昨日
タウヌスでの
二人の語らいを
彼は
思い出していた

逆境にある自分を
励ますために
クララがくれた
護符のように思えた

まるで彼女が
まだ生きてでも
いるような気がした

クララ！
僕は何もかも失ったが
この指輪だけは
残ってたよ

これが
僕を君に結びつける
ただひとつの羈絆だ

クララ！
上から僕を見守り
この指輪で
僕を導いてくれ
僕を励ましてくれ！

彼は
形見の指輪に
向かって
話しかけつつ
涙を流した

そのころ——
クララは
麟一郎とワルツを
踊っていた

クララは愛する男の
たくましい両腕に抱かれ
明日の幸福(しあわせ)に
胸がふくらんでいた

その甘美な旋律が
不規則に乱れ始め

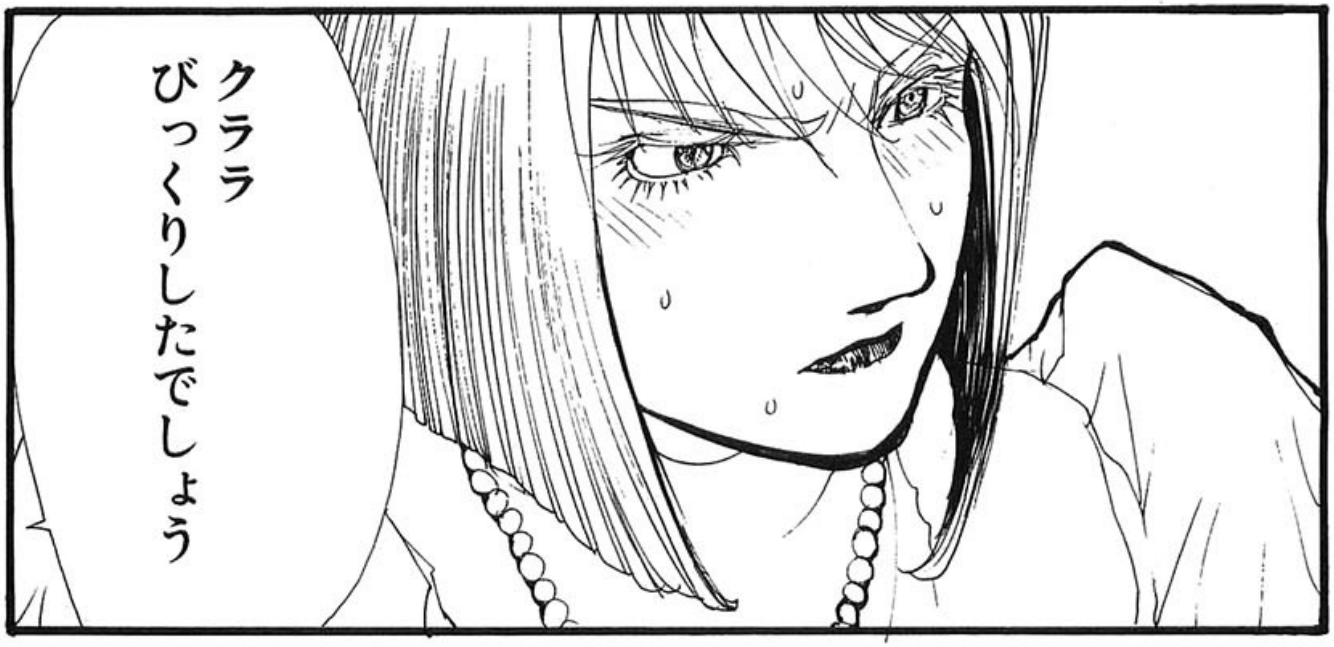
不意に麟一郎は
クララを突き放す
ようにして
上着を脱ぎ捨てた

何としたことか！
ズボンまで
脱ごうとする

その異様さに
クララは戸惑った

麟(リン)！
気でも
狂ったの？

クララの
悲痛な叫びをよそに
男は身につけたものは
全部脱ぎ捨てていく……


クララ
びっくりしたでしょう

耳元の声に振り向くとウィリアムが立っている

彼の灰色の目が微笑(ほほえ)んでいる

いったいどうしたことなの？

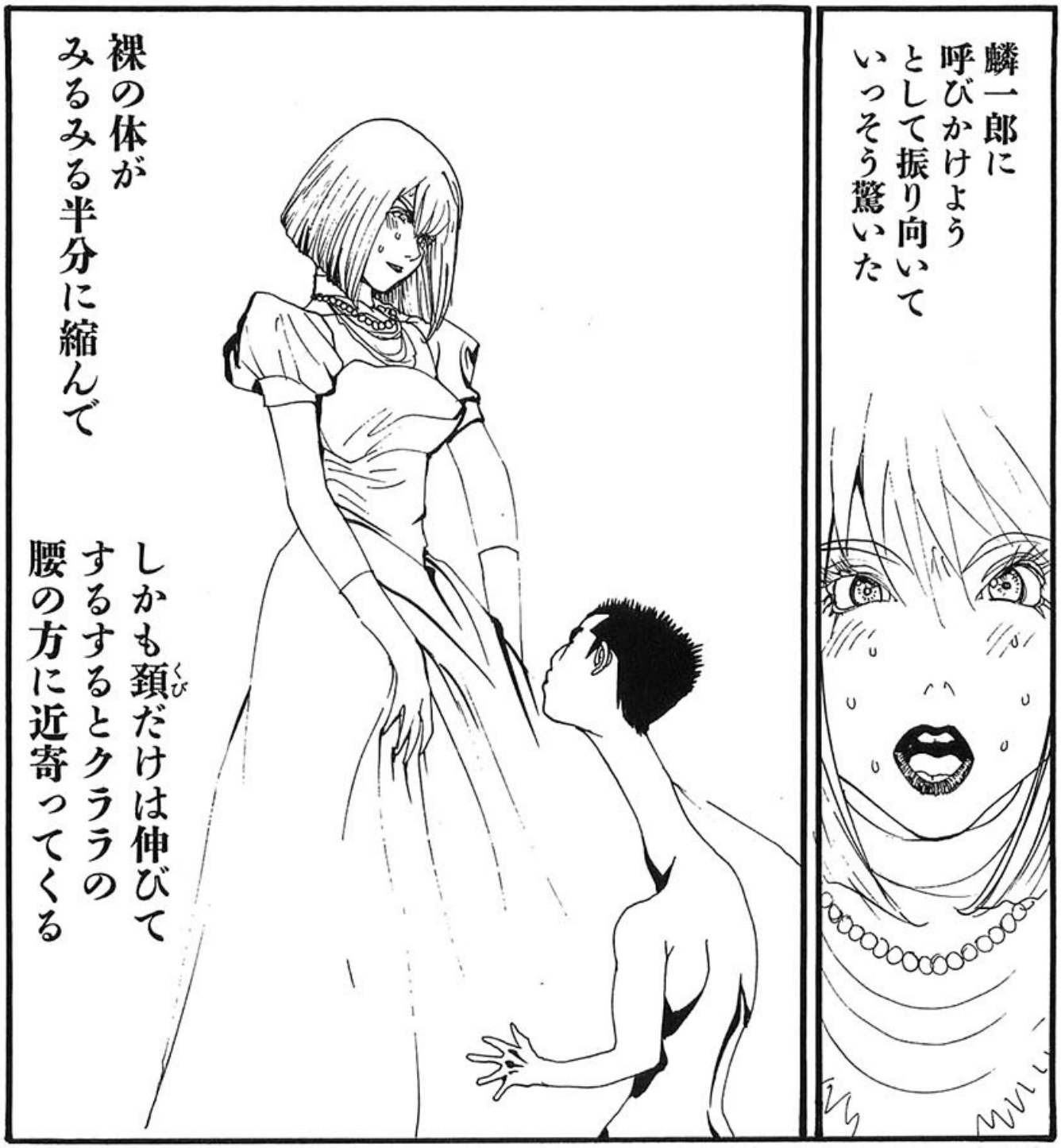
クララ奴(やつ)はヤプーだったんですよ

愕然(がくぜん)とした

ヤプー

麟一郎がヤプー？

嘘(うそ)だわ嘘に決ってる！ねえ麟(リン)！


麟一郎に
呼びかけよう
として振り向いて
いっそう驚いた
裸の体が
みるみる半分に縮んで
しかも頚(くび)だけは伸びて
するするとクララの
腰の方に近寄ってくる

顔は確かに
麟一郎のに
違いなかった

思わず
身を退くと
突然
その口元が
みにくくゆがみ
何か訳の
わからないことを
叫んだかと思うと
両手で急に
咽喉元を絞めつけてくる
ガシッ
苦しいっ
麟が私を殺す！
ウィリアム
助けて！……
ひどく
うなされたあげく
クララは意識づいた
額にべっとりと
汗の玉が
浮いていた

下着が
吸ってくれたせいで
感じないのであろうが
全身に冷や汗を
かいたに違いない

——あの瞬間の
麟一郎の怒りに燃えた
凶暴な顔がまだ
眼底に残っていた

よく死なずに
助かったものだわ

——との
思いと同時に
彼女にも怒りがわいた

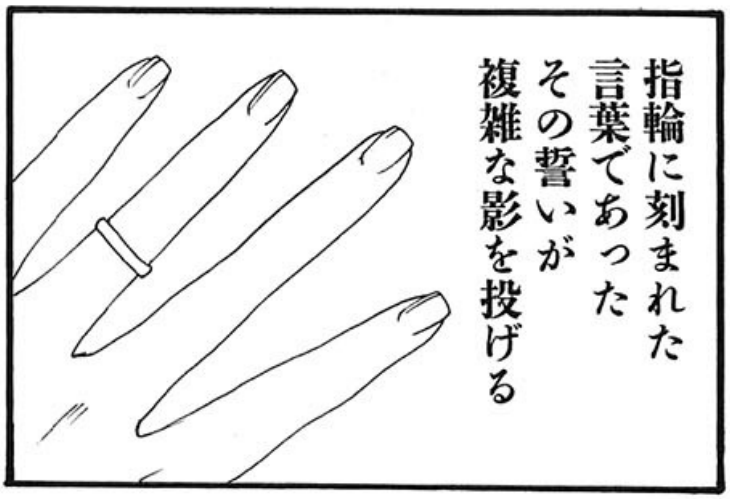
——麟(リン)
貴方(あなた)
妾(あたし)を殺そうと
したのね！

額の汗をぬぐう
片手の指に
固いものがあった

指輪であった
つい今
夢にも見た
あの日の舞踏会

ダンスの前に
交換したんだっけ
……

そして昨日
タウヌス山での
二人の語らいが
重ねて思い起される
〈永遠(とわ)に没(なれ)の所有(もの)なる者〉


指輪に刻まれた
言葉であった
その誓いが
複雑な影を投げる

が
クララの神経は
昂っていた

何て嘘っぱちな！

——
たたき返してやる
こんな指輪！

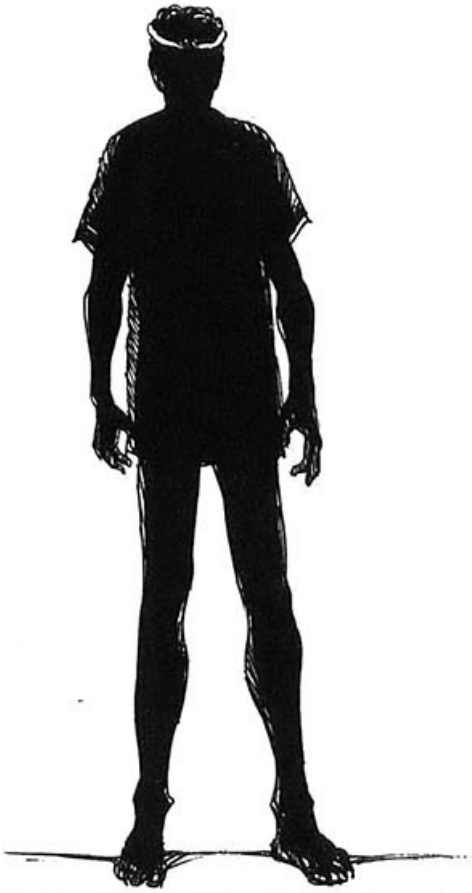
クララは
尿意を
覚えた

昨日使った
浴槽わきの
肉便器(セッチン)のところに
行くつもりで

身を起しかけたとき

たちまち
部屋の隅(すみ)から
何者かが近づいてきた

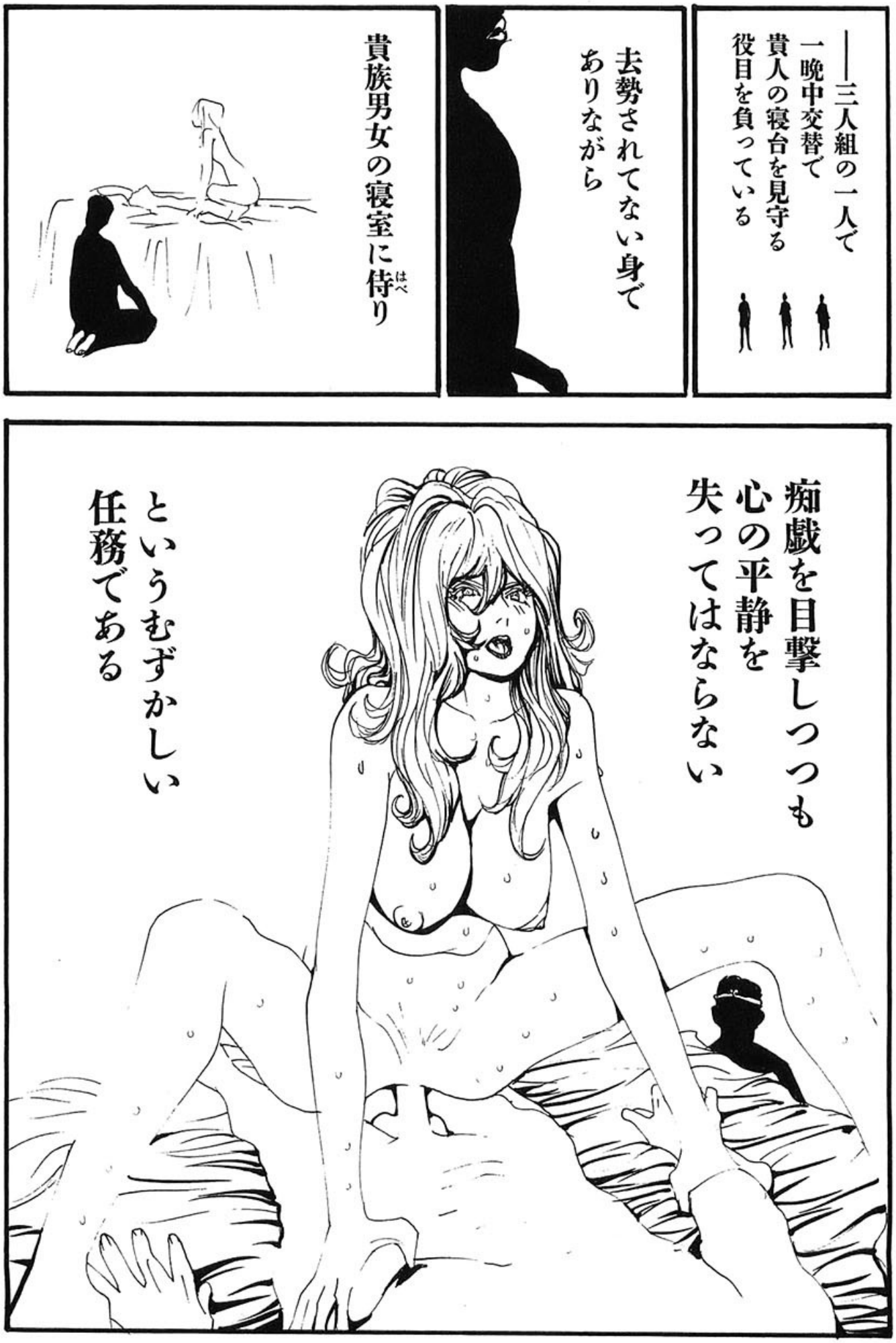
ほの暗かった照明が
急に明るくなり
黒地の
コンビネーションの
制服を着た
黒奴の姿を
照らし出した



F1(エフ・ワン)号ではない
彼は寝ている

この黒奴は
寝台番(ベッド・キーパー)——

宿直黒奴(ナイト・ウオッチ)
ともいう


——三人組の一人で
一晩中交替で
貴人の寝台を見守る
役目を負っている
去勢されてない身で
ありながら
貴族男女の寝室に侍(はべ)り
痴戯を目撃しつつも
心の平静を
失ってはならない
というむずかしい
任務である

御用でございますか

オシッコといいたいの

クララはまだ「肌に触れさせる」とか「食事させる」とかいう表現に慣れていないのだ

はっ ここにございます

黒奴は承って寝台下から轆轤首型単能具を這い出させた

夜明けの前の一刻は厠畜たちの身だしなみの時間でもある

賤しい肉体に聖なる飲食物を与えられる光栄に口腔を出来るだけ清めて

少しでも御神体を汚すまいと奥歯や歯茎をみがいて無垢の容器にし賜ったものを十分味わい

※舌表面の粒々

少しでも
それに異常があれば
覚知できるように
※味蕾の性能を増進する
薬液に舌をつけ

さらに唾腺に
強力抗生物質
ベロマイシンを
注射して

舌で清拭したとき
唾液の殺菌力で
ひと舐めで
消毒できるようにする

※厠畜房

最後に
食事ごとに
主人の肌身に触れる
顔面や肉瘤の皮膚の
手入れをする

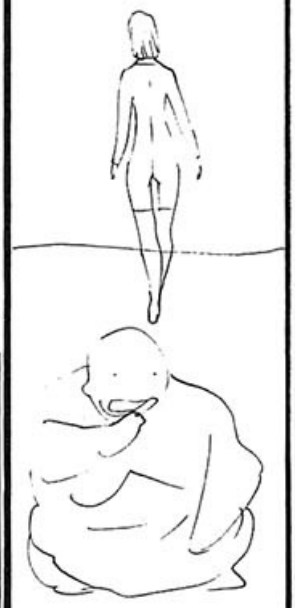
※SC内に
備えつけてある
上水道の蛇口は
セッチンが水を飲むための
ものでなく

こういう
手入れのための
ものなのである

こうして彼らは
SC内で毎朝
主人の起床前に
身支度をととのえて
一日を迎えるのだが

寝台下の
単能具だけは別で
主人の就床中は
身支度抜きに
不時の御用に備え

離床されて後
初めてその身だしなみに
取りかかるのが
常である

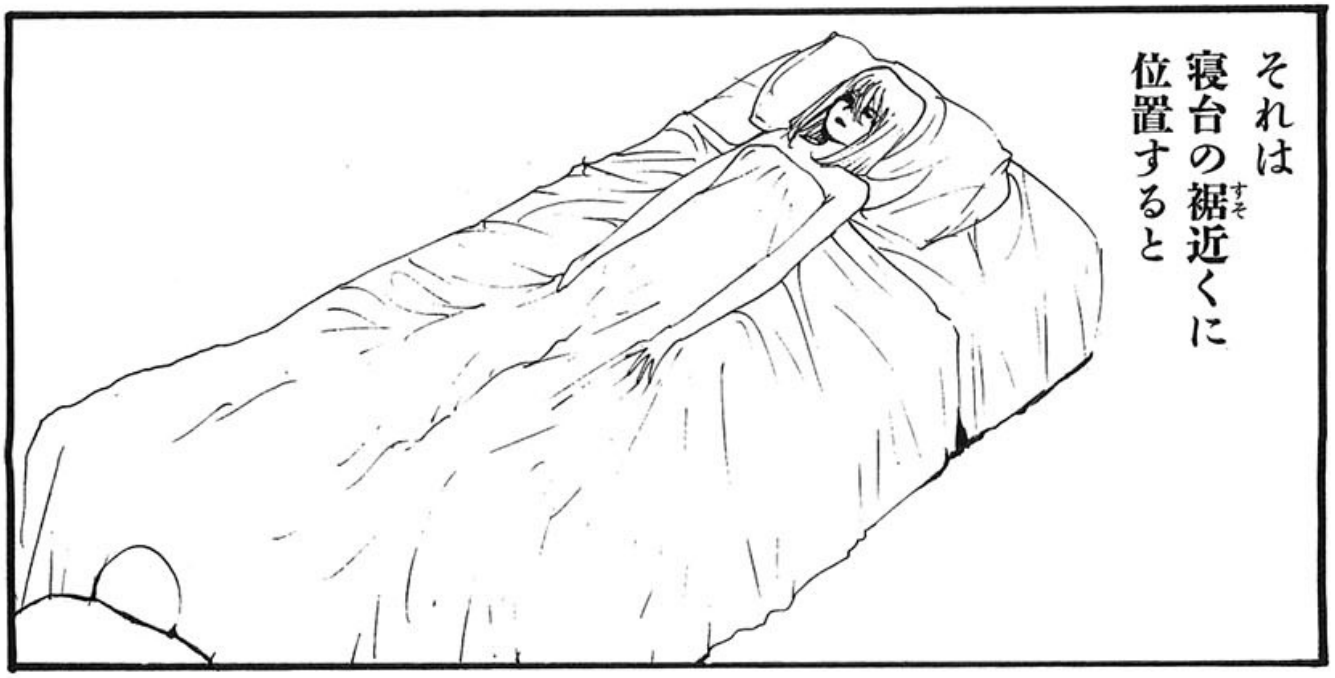


クララの
目ざめたころは

他の厠畜たちは
ちょうど支度最中
だったが

此奴(これ)だけが
すぐ這い出せたのは
そのためであった

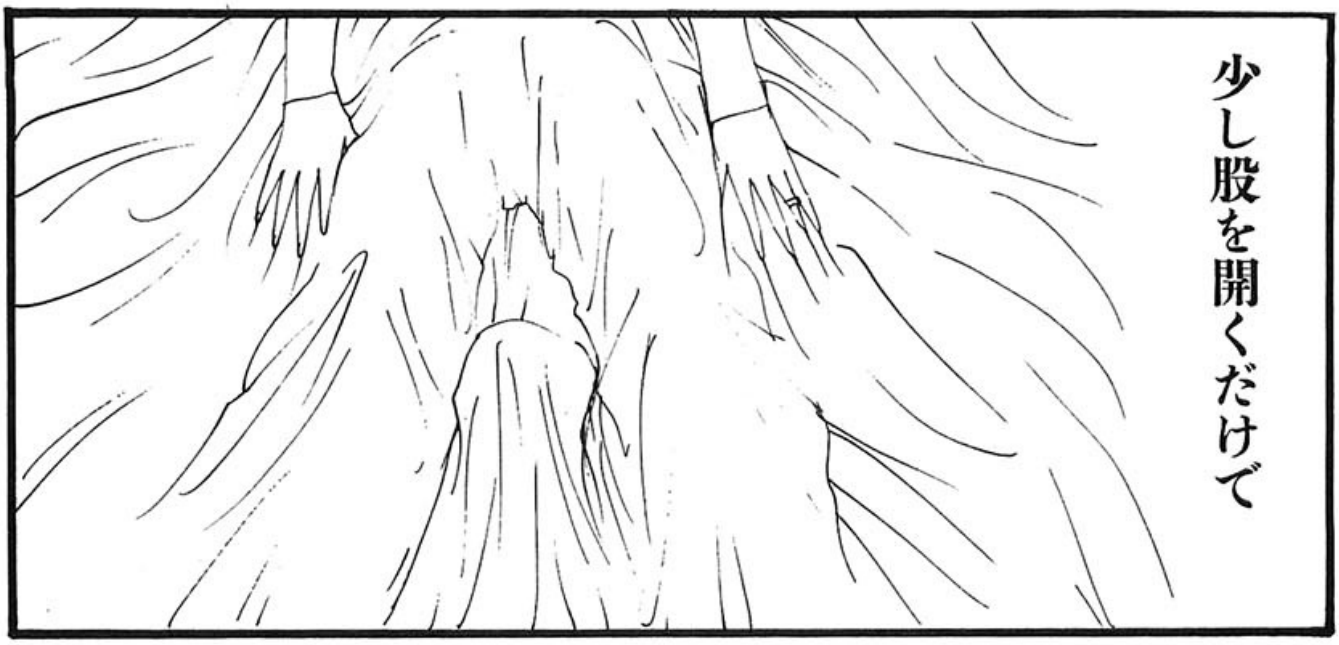
それは
寝台の裾(すそ)近くに
位置すると

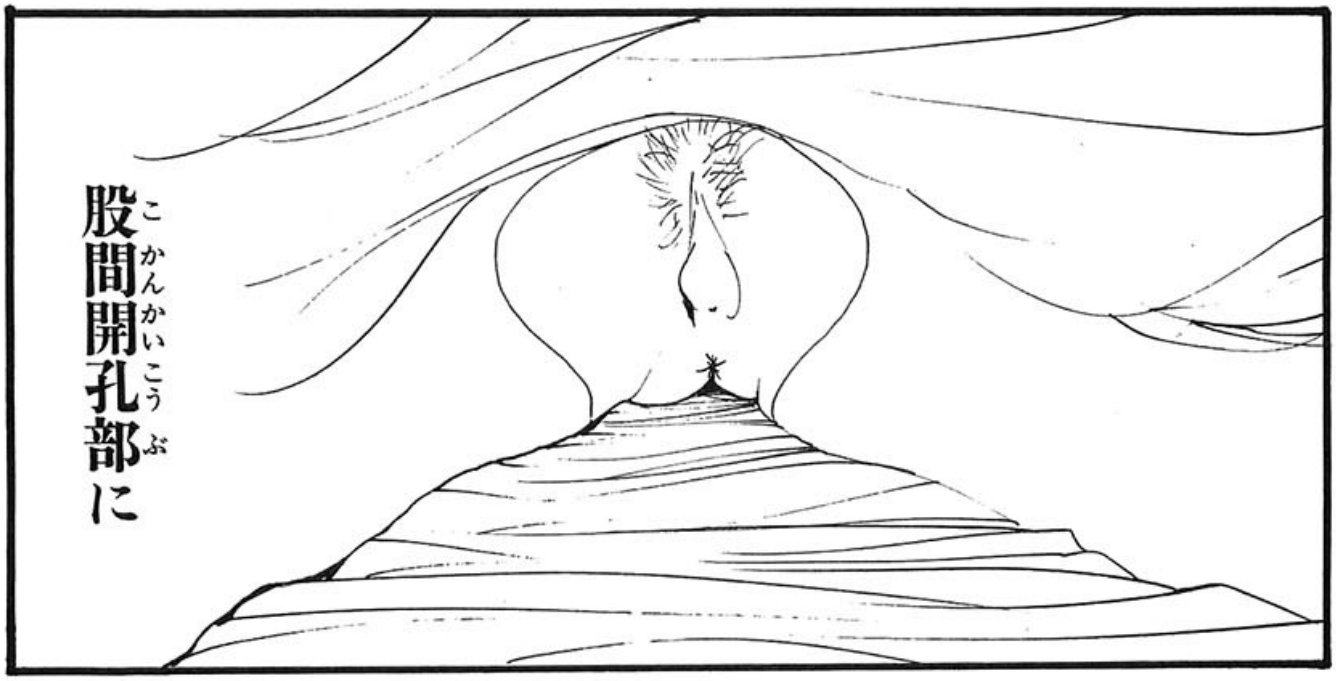


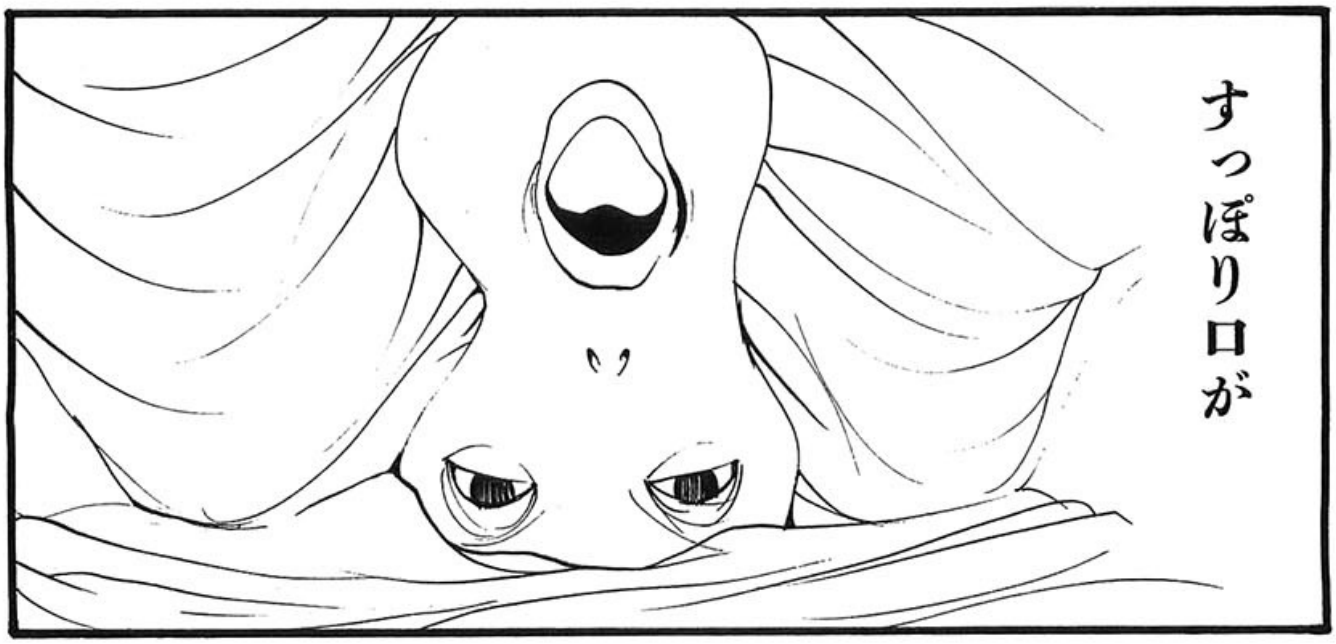
長い首を伸ばし

両腿(もも)にはさみやすく
瓢箪型(ひょうたんがた)になっている
尿壺頭(ユアリナル)を

掛布の下へ
もぐらせてきた


少し股を開くだけで


股間開孔部に


すっぽり口が

吸い着いた
のがわかる
かぽっ

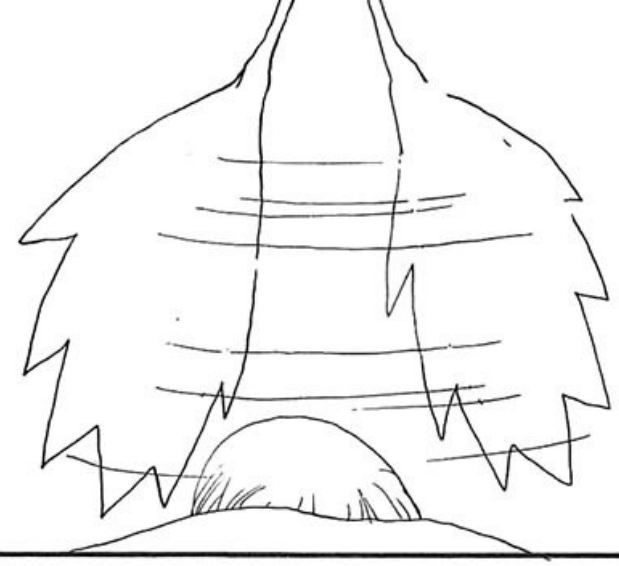
何のことはない
寝台を立つどころか
上半身を起すことさえ
無用だったのだ
口笛(ホイスル)で合図すれば
十分なのである
そのうちに
専用読心具(テレパス)を
持つようになれば
口笛さえ
必要がなくなる
だろう

照明が
元の暗さに戻り
彼女はふたたび
眠気におそわれ
夜の明けるのも知らず
快いまどろみに
落ちていった

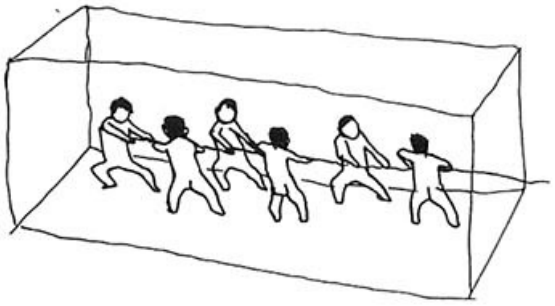
第十六章　夜明けの予備檻で　**―第二話―**

そのベッドの上方に
ゆっくり大きな
芭蕉扇が
往復している

これは
水晶宮の全寝台に
付属しており
一見
機械仕掛けで
動くように見えるが

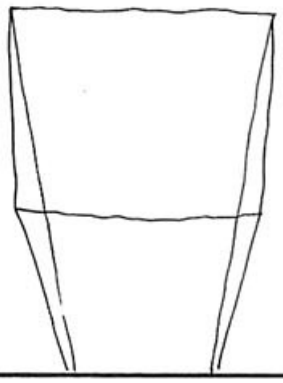


実は寝台数相当の
扇風畜が
地下の一室に集められ
綱を引いて
廻しているのである



水晶宮は
室温調節自在で
微風を送ることも
エア・コンディショニングで
自由にできるのに
こんなものが
なぜあるのか

地球前史の
研究家だった
大貴族ウィリアム公爵が
資料室のフィルム画像
――



それは
白人植民地時代の南洋を
舞台として作られた
ハリウッド映画
らしいのだが

――で
白人たちが
竹細工のダッチ・ワイフを
股に挟んでベッドに横たわり

天上から懸って
奴隷たちの引く紐で
一晩中動く大きな団扇から
ベッドに送られる風で
熱さを凌いで眠るのが
常だった南洋風俗を知り
真似したところ

※ダイアナ・ウィリスの曾祖父

エア・コンディショナーでは得られない快適さがあることがわかった

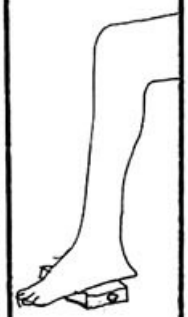
たちまち貴族社会に流行普及して今では平民でも富豪の邸宅には設備されている

足でペダルを踏むので手より能率的になったが

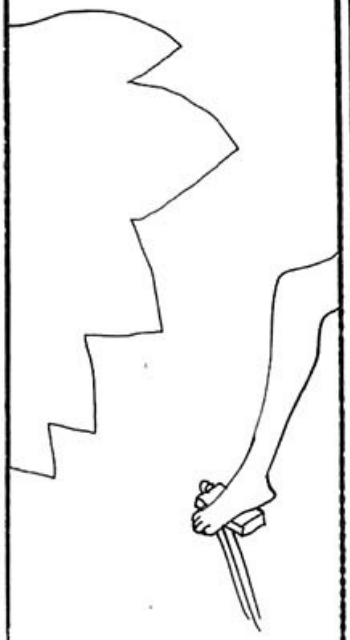
それだけ目立つから室内では目障りと部屋の外に追っ払われている点が昔と違うが

地下室に集められた扇風畜たちは各自の担当するベッドの有様を立体像縮写投影装置（ステレオ・ポード）で確認し

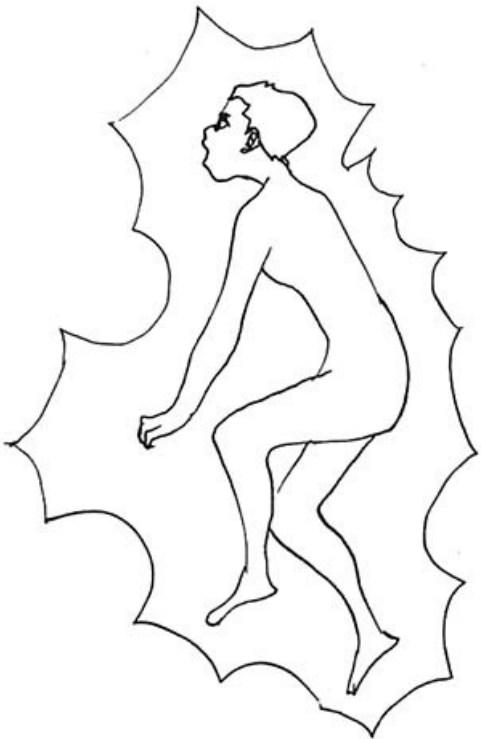
主人が就床するとペダルを踏む



芭蕉扇の動きはゆったりしているが扇風畜の脚は忙しく動き続けるのだ



勤怠は自動計器で測定され怠ると電気刺激が走って鞭撻（べんたつ）される



一晩中
汗みどろになって
風を作り
送り続けるのである

白い眠り手たちは
子供の時以来
扇風畜の存在は
知っていても

普段寝るときは
もう全然意識しなく
なっている

しかし
その眠りの快さは
♪

※アザーズ・レイバー
労働量に応じて
快適(アメニティ)さが増加する

という
新労働価値説で
説明できる

奴隷労働によって
はぐくまれた
ギリシャ文明の
申し子である
西欧白人文明が

植民地における
有色民族支配の間に
深層心理に培った
優越者心理が

イースで
ヤプー酷使という
水を得て
一挙に花開いた
理論である

※ 他者の筋肉の疲労度

前史末期には
誤った人種平等観から
有色人種の筋肉労働を
享受することに
後ろめたさが伴って
快適さを
減殺していたため
認識されなかったのだが

その謬見(びゅうけん)から
解放された
イースになって
その快適さが
はっきり意識され
理論化され
学説として確立するに
至ったのだ

つまり
イース人は
扇風畜の存在を
意識しなくても

下意識が
その労働ぶりを
知っているから
その分だけ気持よく
寝られるのである

クララは
すやすや眠っている

彼女は
扇風畜の存在など
全然知らない筈だが

前史時代の
碩学ユングなら
個々人の経験を超えた
〈種族的無意識〉を
指摘しただろう

起きていて
その風が
どのように作られるかを
聞かされたら

彼女の気持は
安らがなかったかも
しれない

だが
植民地支配を
経験して以後の
白人種族の一員である
彼女の深層心理は

白人が
奴隷の筋肉労働を
利用することに
後ろめたさを感じていない

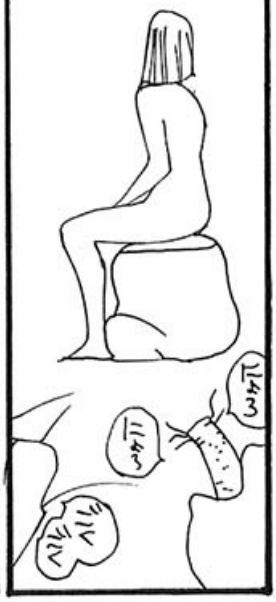
彼女の
〈種族的無意識〉は
このベッドの微風が
誰によってどのように
作られているか知っている

だから
その眠りは

イース人同様
健(すこ)やかなのだった

さて
ふたたび下界に
目を転じてみよう

クララのような
手軽な解決法



のない
麟一郎は

便意を催して
困り果て

狭い低い
檻(おり)の中を
うろうろして

と
見回していた

径十ミリほどの鉄棒が
十センチ間隔ほどに
植えてある

その格子の下方に
三十センチばかり
鉄の腰板が
四囲に張ってあり

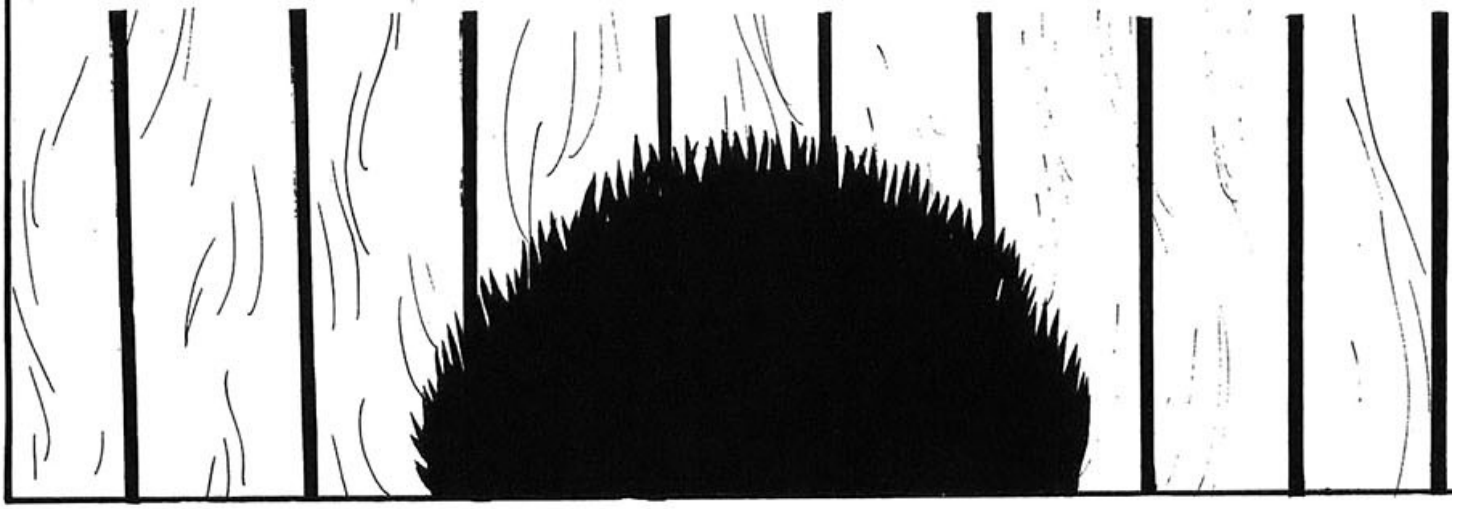
その一つに
中央に首一つほどが
抜けられる
潜り穴があり

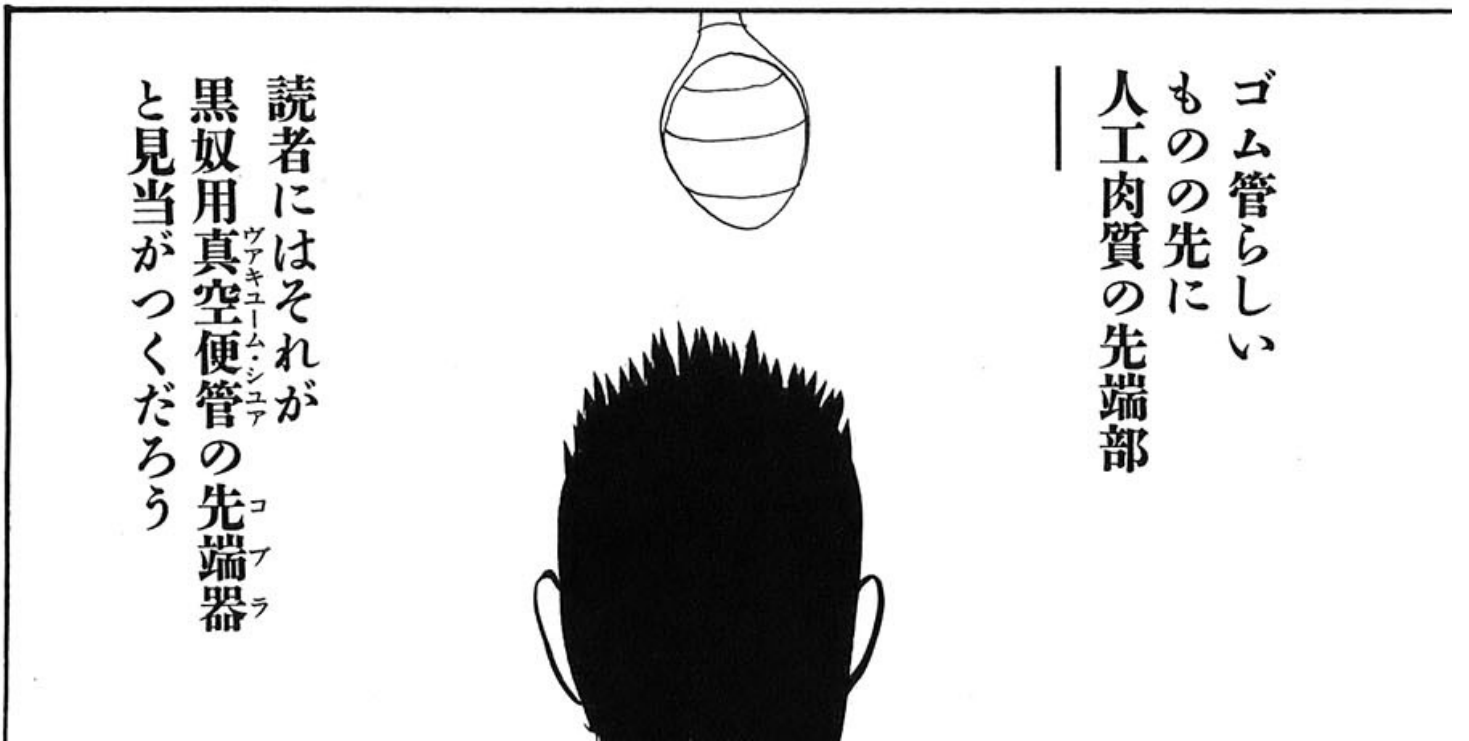
その穴の外に
丼状の容器が見える

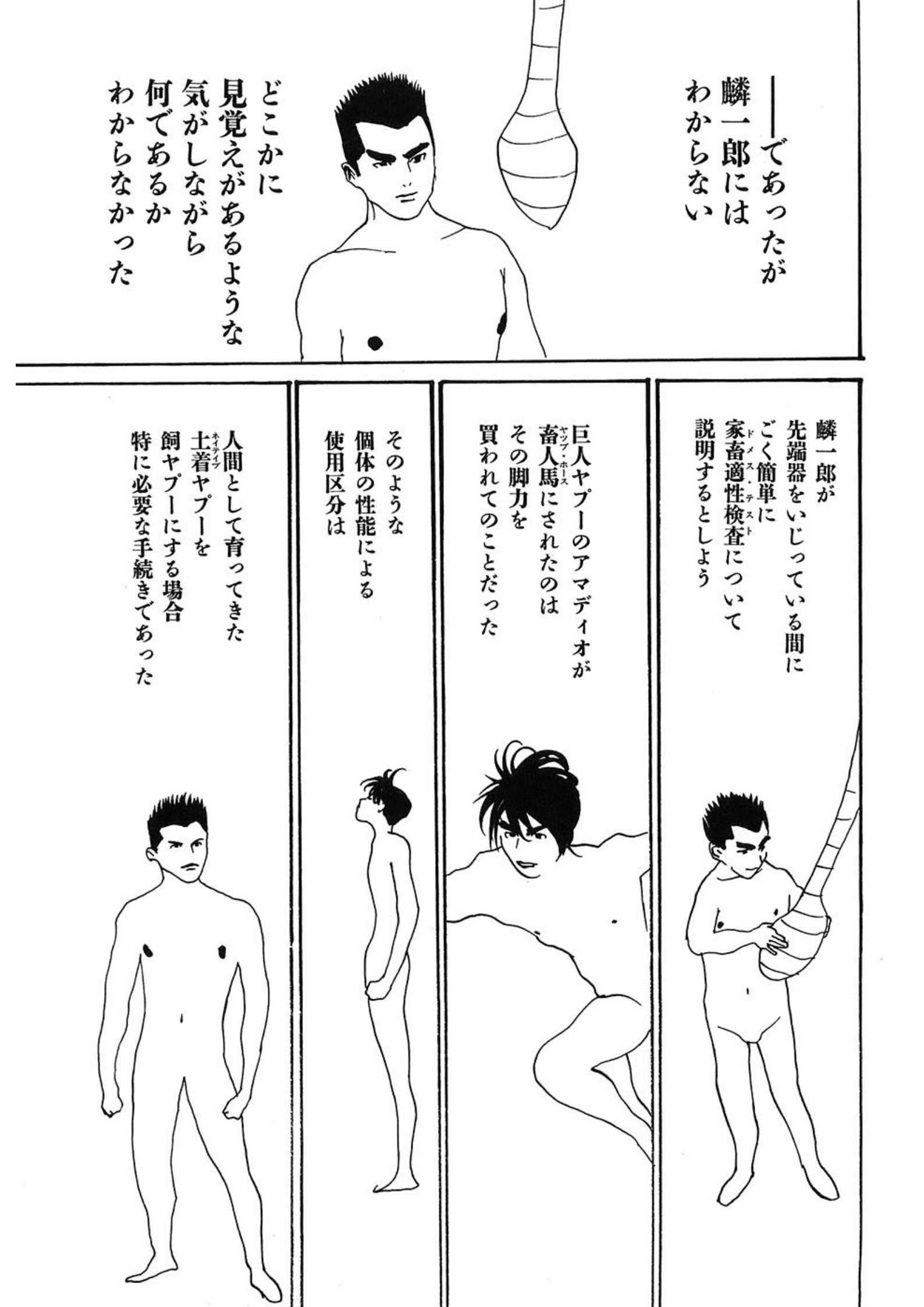
見たところ
食器のようである

外には
何の容器もない
檻の天井は
立ってやっと
頭のつかえないだけの
高さである
床は
二畳敷ぐらいの
広さで
檻の外の部屋の床より
五十センチほど
高くなっている
そして
奇妙なことに
檻の外は
四方いずれも格子から
二メートル範囲ぐらいの
ところまでしか見えない

壁も衝立(ついたて)も垂幕(たれまく)も
何ひとつ邪魔物のない
空間には違いないのだが
ゆらゆらと
陽炎(かげろう)の立つように
輝き揺れる
不思議な光の幕があって
視界を
さえぎっている
その向うに
何があるのか
部屋全体の
大きさや様子
この檻の
置かれている位置
それらが
何とも
皆目見当が
つかないのである






——であったが
麟一郎には
わからない
どこかに
見覚えがあるような
気がしながら
何であるか
わからなかった
麟一郎が
先端器をいじっている間に
ごく簡単に
家畜適性検査(ドメス・テスト)について
説明するとしよう
巨人ヤプーのアマディオが
畜人馬(ヤップ・ホース)にされたのは
その脚力を
買われてのことだった
そのような
個体の性能による
使用区分は
人間として育ってきた
土着(ネイティブ)ヤプーを
飼ヤプーにする場合
特に必要な手続きであった

この手続きが
つまり
家畜適性検査で
家畜化を
前提として
その個体の持つ
種々の可能性を計測し
用途別の決定に
資せしめんと
するものである
いわば一般でいう
適性検査と
いうものに当る

知能指数
これは人間のときと
変りがない

愛情指数
というのがある

これは
慕主性係数と
相関させて意味を持つ

秋田犬のように
一人の主人だけに
なつくか

洋犬のように
主人が変っても
わりに平気でいられるか

そして
そのなつき方は
どの程度か

といった
問題であった

性格指数というのは
各種因子を
正負十点で評価した
点数であるが

スコアの正負の評価が
人間とは逆になる

独立自尊性・批判性等が
負(マイナス)で

卑屈性・依存性等が
正(プラス)である

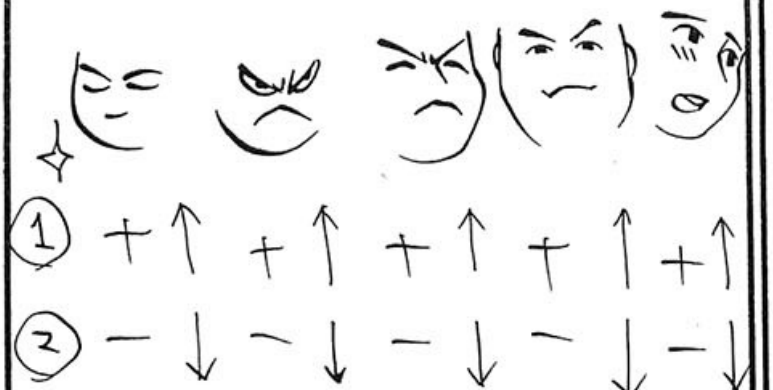
10 0 10
− +
− +

そして
更に一次形式と
二次形式とを分つ

一 人間 ー
前者は
人間的意識に
もとづくもので負(マイナス)

二 家畜 ＋
後者が
家畜的意識から
形成されるもので
正(プラス)になる

羞恥心(しゅうちしん)
名誉心
自負心
競争心
潔癖性



① ＋ ↑ ＋ ↑ ＋ ↑ ＋ ↑ ＋ ↑
② ー ↓ ー ↓ ー ↓ ー ↓ ー ↓

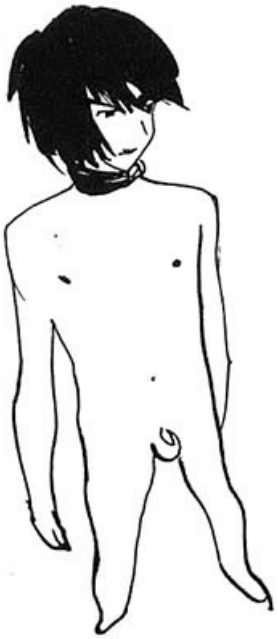
など
いずれも
一次と二次とで
評価が反対になる

ヤプーに
羞恥心が
あるわけはないし
あってはならない

誰でも
そう思う

しかしそれは
人間的羞恥心のことで
ヤプーにはヤプーなりの
羞恥心があっても
差しつかえはない

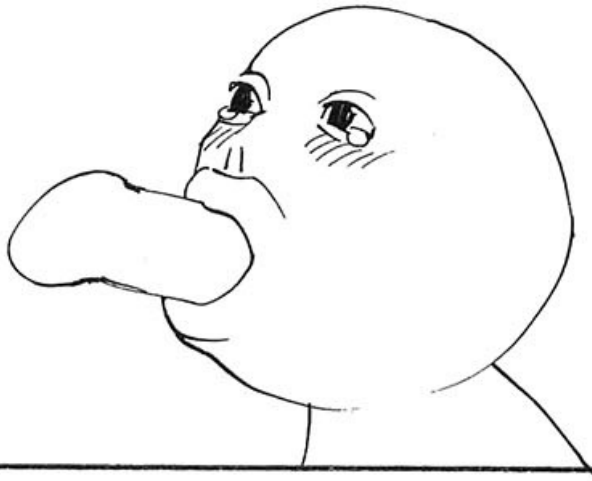
生れてから
首輪を
はずしたことのない
原ヤプー(ロー)は



首輪の下の部分を
露出することに

人間が素裸に
なるときのような
羞恥を感じるという

口唇(こうしん)を閉ざす
童貞膜(ハイメン)を
破られるとき



舌人形(カニリンガ)の示す
羞恥は
前史女性の
初夜のはじらいに
似て

使用する
レディたちに
こよなき刺激を
もたらす

食物(フード・ホール)の器を
飲物(ドリンク・ホール)の器より
先に舐(な)め上げ

ドリスから
その誤りを
拍車の一撃で
教えられたとき

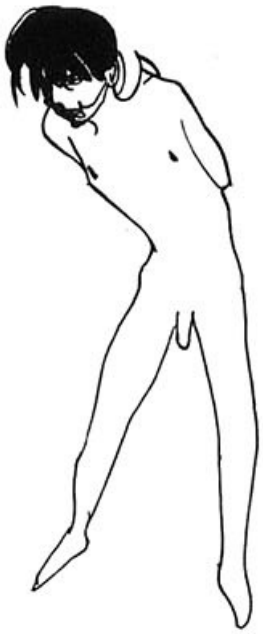
あの厠畜(しちく)は
どんなにか
恥ずかしく思ったに
違いない

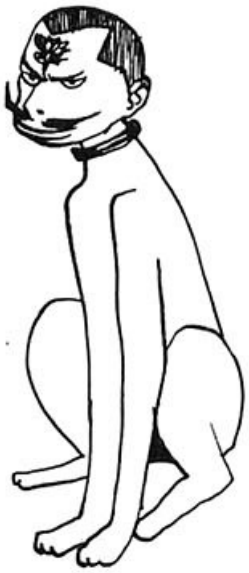
セッチンとしての
誇り(プライド)が
傷ついたからだ

品評会で
全犬優勝した
ニューマ

競馬で勝った
アマディオ

いずれも
犬として馬として
競争意識と
名誉と誇りを
持っていた
はずである
それが満たされ
自負自信となるとき
自信過剰の驕慢(きょうまん)な
ヤプーになることも
あり得る





だが
その驕慢さが
ヤプー仲間への
驕慢である限り
それは悪徳とは
いえない
セッチン族の
選畜意識の昂揚(こうよう)なども
それが彼らの
心の支えなのだから
……
要するに
人間とは別の次元で
ヤプーには
ヤプーの誇りがある
これにもとづくのが
二次形成なのだ……

潔癖性などにしても
一次形成のものは
畜化段階の初期に
早く捨てねばならないが
二次形成のほうは
むしろ
高いほどよい
人間(ウマン)のものを
汚ないと思う心が
あってはならないが
それ以外の不潔さには
敏感なほど良い

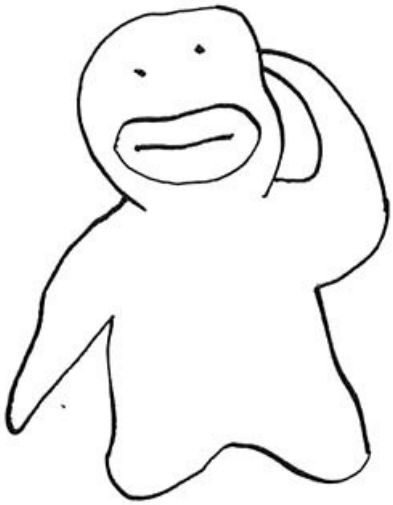
セッチンが
毎朝歯をみがき
顔を洗うのは
そのためであって

自分自身の
身体(からだ)の垢(あか)には
潔癖なのである

それが
使用者側にとっては
気持よく使えて
好都合なわけである

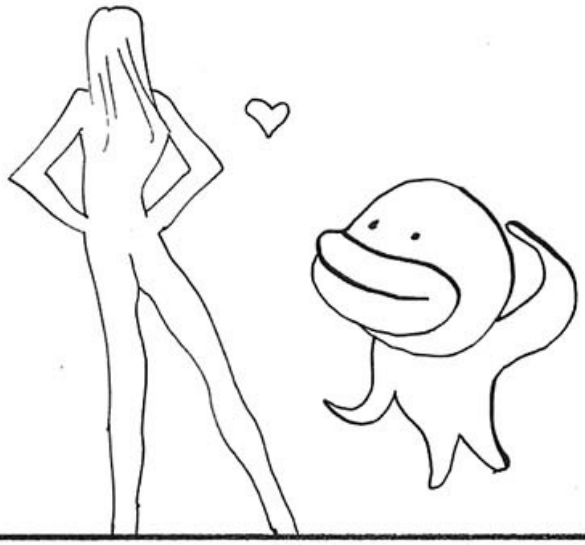
さらに
徳目指数もある
これも
美徳・悪徳の基準が
人間とは違う
孝行
友愛
博愛
信義
といった
人間関係に
もとづくものは
まったく
問題外である

質素などの
私生活を
前提とする
ようなものも
不要である

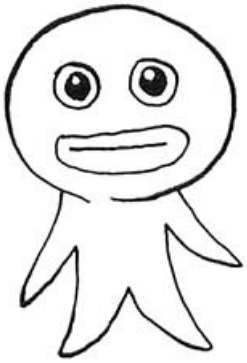


だが
隷属(れいぞく)関係から来る
忠実性は重要で

その点数は
慕主性係数と並んで
重視されている

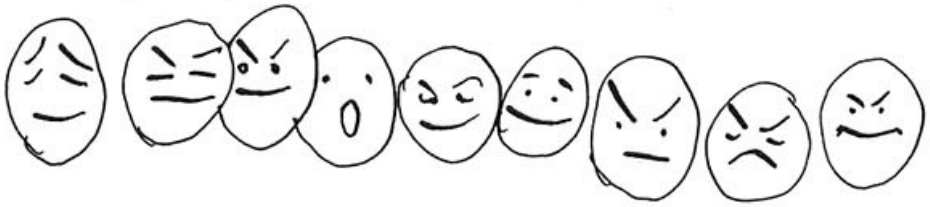


礼儀は
本来人間関係の規範だが

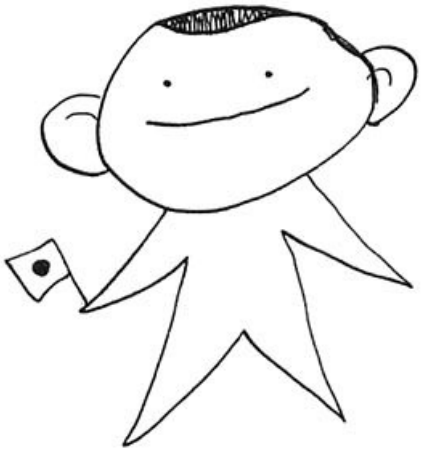


知性ある家畜の
人間に対する関係にも
この観念は
有用とされている

さらに
勇敢
忍耐
勤勉
従順
謹慎
愚直
報恩
奉仕
献身
等の徳目が
厳重に
採点される



——ヤプーは
忍耐とか勤勉とか
報恩とかの徳目では
一般にみな良い点を
あげるものである



これは
ヤプーがまだ
日本人と
いわれていた
ころからの
良い天性である

しかし
なぜそうなのか

実は
日本人の全部の
祖先である

イザナギ
イザナミ
自身が

航時機によって
逆送された
ヤプーだった

という
事実から来るのだ

こうした
各種指数が計測され

その土着ヤプーの
心のうちに眠る
服従本能の
量と質を知るための
服従検査がなされて

そのすべてを
総合したうえで
初めて
「家畜精神評価」
が結論される

これと
肉体的諸数値を
合わせて

ここに一匹の
土着ヤプーの
「家畜人」としての
評価が結論的に下され

「性能表」が
作り得られるように
なるのであった

※ヤプーの
市場価格を決めるには
この外

畜化度

※土着ヤプーの場合は畜化度は低いほど高価である

※血統書
も問題にされるが

とにかく
いちばん
たいせつなのは
「性能表」
であるから
これを作成する

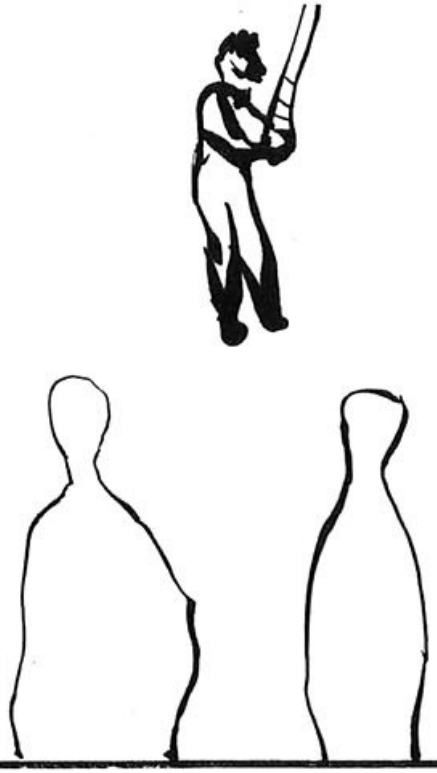
※飼育所（ヤプーナリー）生れのものと違って、「邪蛮（ジャバン）」国からの飼主の変遷（へんせん）の経歴が畜籍簿に記載される

※家畜適性検査（ドメスティケイティング・アプティチュード・テスト）
の重要性は
きわめて大きいと
いわねばならない

麟一郎は
これからその検査を
受けるのであった

※domesticating aptitude test――略してDAT、またはドメス・テストという

ヤプーが先端器(コプラ)を
ひねくり回している檻(おり)から
二メートル余り離れて



二人の男が
立ちながら
観察していた

一人は中年の白人で
色浅黒く小柄(こがら)ながら
見るからに精力的な
風貌(ふうぼう)をしていた
広い額と
鋭い目を持ち
研究一途(いちず)の学究の徒で
あることを
うかがわせた
そのためか
地味な
ジャンパー・スカートの
着こなしなど
投げやりなところがあり
イース男性にしては
珍しく服装に対して
無関心である
マニキュアなども
していない

この男が
コラン博士だった

「畜人学」の一科である
「畜人心理学」の
大家として知られ
ことに
家畜適性検査の専門家で
畜人省畜籍局嘱託として
同局の地球支局分類課に
籍を置いている

昨夜
ジャンセン家の別荘から
連絡を受けて
急いで南極の研究室から
飛来してきたばかりである

連絡内容は
「新捕獲の
土着ヤプーを
明朝登録したい」
ということに
過ぎなかったが

「二〇世紀球面で
獲れた珍品」との
但し書がついていたことが

南極飼育所の
博士の関心を
特に惹きつけたのであった

と聞き

立体像映写機や
録音機を用意させ

昨日
別室でヤプーが
大暴れした
そのときの模様などを
見聞きして
予備データを
仕入れているうち

やがて
ヤプーの目覚めを
報告された

コラン博士は
原畜舎の飼養係兼
この予備檻の看守を
務める黒奴B2号に
案内されて
檻のそばまで来た

まず外部からの
観察により
精神諸元の予備データを
得ようというのだ

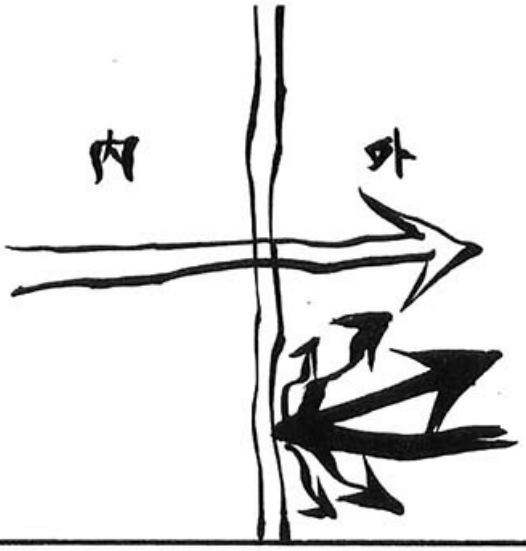
博士のほうから
檻を見るには
何の邪魔もないのだが

ヤプーのほうからは
見えないように
なっている

檻の鉄格子から
二メートルほど離して
磁界片視光幕が
張り巡らされて
あるからであった

ある局部空間に
特殊の磁場を作り
その界面が
内部から外部への
光線だけを通し

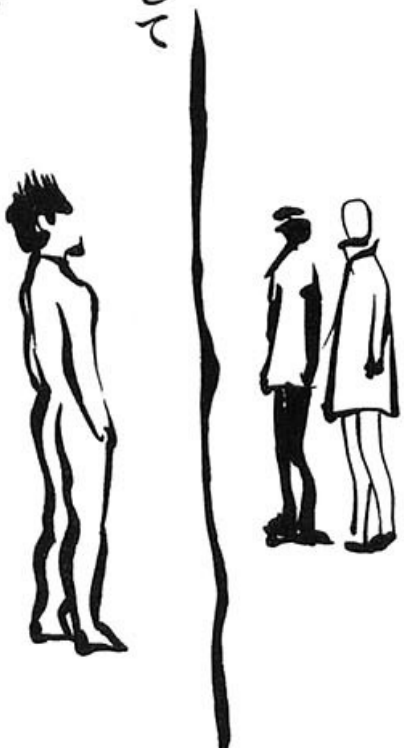
外部からの光線は
全部乱反射して
しまうようにした
仕掛である



おまけに
その界面と重ねて
強力空気幕(スーパー・エアカーテン)と
吸音装置を
連動させてあるので

こちらで
しゃべることも
中へは聞えない

そこで
中のヤプーに対して
姿も声も隠し
自由な観察が
できるのであった



精神検査の手始めに
まず知能検定の目的で
博士は

さっき
真空便管(バキューム・シュア)の先端器(コップラ)を
檻の中へ
差し入れてやった
ところであった

捕獲された
土着ヤプーは
エンジン虫の尾部が
成長しきるまでは
それまでの排泄(はいせつ)の習慣を
まだ身につけている

しかし
虫の出す体液の
特殊な効果で

水分も含めて
大腸に集まるので
軟便になり
先端器の使用が
可能だった

そこで
エンジン虫を
呑(の)ませて以後は
先端器を使用させる
のである

黙って
それを渡してみると
この未知の道具の
使用法を
そのうちに
ヤプーは悟る

それでも
ヤプーによって
相当個体差があり

時間の経過も
様々であって
一種の知能テストが
できるのである

これを
先端器試験(コプラ・エグザム)
というのであった

先端器を手にして
考え込むヤプーを

ちょうど前史時代に
チンパンジーに
道具を与えて観察した
動物心理学者のように

空腹感も
相当なものだぞ
二十なら

麟一郎は
奇妙な物の用途を
簡単に発見した

緩解注射を
される前に
吐瀉(としゃ)したとき

看護婦が
これを使って
口の周(まわ)りを
ぬぐってくれたが

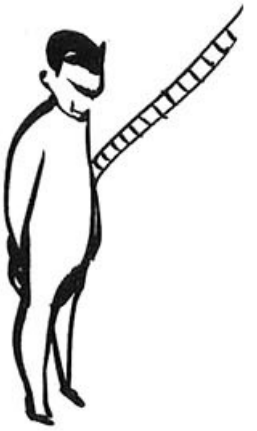
あのときは
目も動かせない
状態であったから
ぬぐった物が
何であったのか
見たわけではない

それをここで
ただひねくり回しただけで
それが真空吸引装置だ
ということが
わかったのは
やはり
特別な彼の頭の良さを
証明することになる

もっとも
先端部のくびれが
股(また)にはさむのに
都合よくできている
ことさえ看破すれば

使用法は
すぐわかることでは
あったが……

排泄し終ると
温湯で肛門(こうもん)が洗われ
次いで熱気が
乾燥させてくれる



快適で清潔
はなはだ
文化的で
あった

用が済んだところで
それは上のほうに
引き上げられていった

まるで誰かが
こちらの様子を
すっかり見ていて
都合よく動かしている
みたいではないか

その疑念より先に
襲ってくる空腹感が
彼を苦しめた

高栄養液が
注射してあるので
心配はないはずだが
その注射は
空腹感をいやすどころか
逆に増進するのだ

大多数の
ヤプーにとっては
飢餓感というのは
エンジン虫による
充塡作用への
欲望にすぎず

空腹感
つまり一般的な食欲
という意味では
関係がないのだが

口からの
摂食経験しかない
土着ヤプーの場合は

そのことを
訓練に利用する目的で

エンジン虫による
尻からの吸乳摂餌が
始まって以後も

それと並行して
口からの摂食も
従来どおり
続けさせる

つまり
食欲というものが
持続するのだ
そうして
いつか食べ物だけにしか
関心を持たない
畜生に転化させられ
高尚な
精神活動の面は
おろそかになっていく

空腹感が
こうして麟一郎を
苦しめ始めたが

これは
エンジン虫の尾部が
外に伸びるように
なってからも

彼の畜化に
一役演じつづける
ことだろう

さて次はと
コラン博士が
檻を見つめて
いった
赤クリーム
は？
はい
一杯分だけ
用意してあります

よし
まずクリーム馴致(コンバーション)だ
電気針の味を
教えながら
舐(な)めさせる

いいな

はい

黒奴は
壁の取手(ハンドル)を
動かした

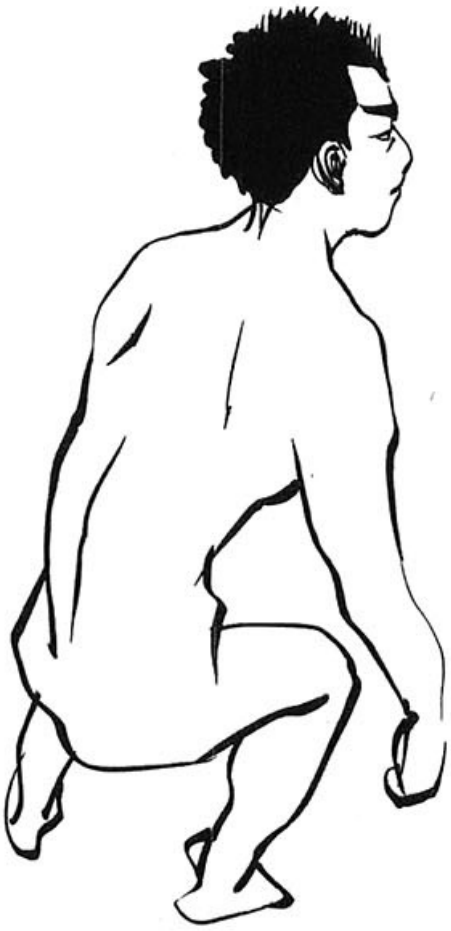
麟一郎は
油断なく
四方に
気を配って
いた
例の
丼状の
餌皿が
自動的に
いったん
檻の縁から
離れて
す〜〜っ
光幕の向うに
隠れたのに
ふっ
目を
見張っていると
やがて丼は
輝きかつ揺れる
光の幕を破って
ふっ
ふたたび檻の縁へ
もどって来た
す〜
一場の
幻想を見る
思いである
丼には
暗赤色の
半流動状のものが
なみなみと
満たされている

アイスクリームの
ように
そして
血糊(ちのり)のように

半ば固まり
かけている

餌皿のある以上
食べ物には
違いないのだが……

まさしく
食べ物であるに
違いなかった
飢えから来る
動物的本能で
麟一郎は
理性の働きを待たずに
それが
食べられるもので
あること
を嗅(か)ぎ当てていた



潜り穴から
首を出すためには
檻の床に
腹這いにならねば
ならない
踏みつぶされた
蛙みたいに
いかにも
みっともない
姿勢だった
彼の目にこそ
映らないとはいえ
どこからか
こちらを見ている人が
いることは
さっきの妙な便器や
今目の前にある
食器のさっきからの
動きでも
明らかであった

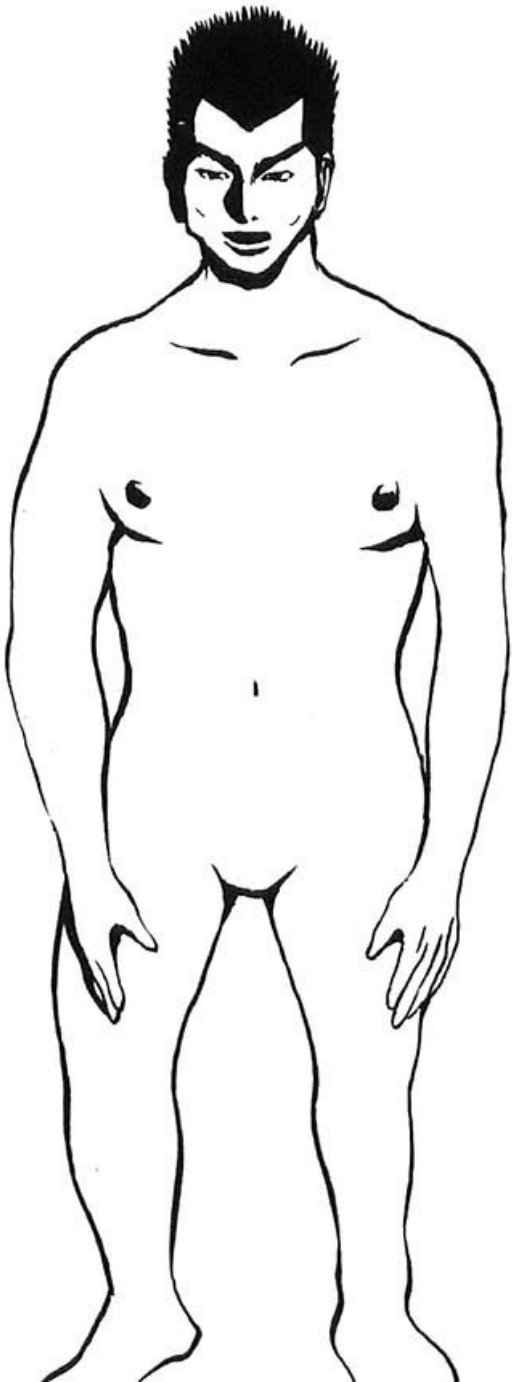
いつか
彼の羞恥感は
減少しつつ
あったのだ

その羞恥の
最も大きな原因は
素裸でいる
ということで
あったが

それすら
彼の意識からは
薄らぎつつ
あった

人類の文化は
智慧の木の実を
食った
アダムとイヴが
裸を恥じて
前を蔽うものを
作った時に
始まった
という寓話は
まことに故なしと
しない

イース人が
ヤプーに対して
素裸を強制するのは
畜化の
第一階梯(かいてい)としての
羞恥感の剝奪(はくだつ)が
ねらいなのである



第十六章　夜明けの予備檻で　―第三話―

光幕の彼方では
コラン博士が
満足そうに
微笑しながらいった

一次羞恥度
マイナス7
……

なるほど
羞恥心は減ってる

頭はいいし
これはなかなか良い
ヤプーになるぞ

……おい
電気針が
遅れないように
気をつけろよ

大丈夫です
博士(ドクター)

そら
舐(な)めるぞ！

両手とも
腰板にさえぎられて
使えなかった

それで
麟一郎は
四つん這いで
首を伸ばしたまま

舌先で
赤いクリームを
ペロリと舐めた
途端に

ビリリッ

と電撃を
舌に感じた

——
罠(わな)だったか！

あわてて
麟一郎は
首を潜り穴から
引っ込めようとしたが
引けなかった

舐めた瞬間
電撃と同時に
逆U字形の金具が
穴に落ちて

上から
彼の首筋を
押え込んだから
だった

苦しくは
なかったが
首筋を押えられて
自由がきかなかった

頭の上近くで
男の
含み笑いを伴った
声がした

くっくっくっ……
ヨシ
トイワレル前ニ
舌ヲ出スカラダヨ

ワカッタカ

……ヨシ
……食べテヨシ

どこから
話しかけてくるのか
流暢な日本語である

何者だろう

食べロ
トイウノニ
食べナイノカ！

と思う
余裕もなく
声は続いた

叱責するような
口調が
飛んで来たかと
思うと

ふたたび
声と重ねるように
先ほどの電撃が
麟一郎の舌を
刺した

あわてて舌を
伸ばす

舐め始める

と
不思議に
電撃が
やんだ

その
赤いものは
一見無臭と思える
ドロリとした
流動体であったが

口に含むと
一種異様な
臭いが
ツンと鼻を
ついた

しかし
何としたことか
今まで一度も
味わったことのない
珍しい味であり

いっぺんに
彼の舌を虜にする
妖しさがあった

電撃に
追われるまでもなく
もはや餌皿の底まで
舐め尽さねばやまない

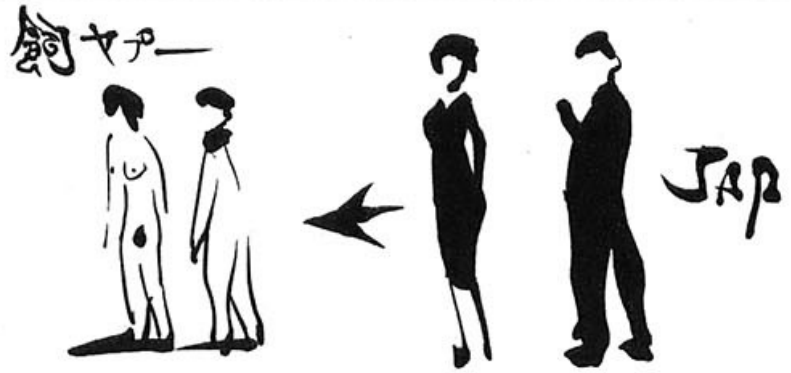
その勢いで
丼に顔を
突っ込むのだが

犬の舌と違って
そう器用には
舐め取れないのが
もどかしいくらい
であった

こうして
彼が懸命に
奮闘している間に

この
不思議な食べ物に
ついて少々
解説をする必要が
ありそうだ

前節末で
述べたように
一般の原ヤプーと
違って



ジャップから
飼ヤプーにされた
邪蛮畜人たちは
従前どおり
食欲を持ち

「餌欲しさ」に
芸をおぼえさせられる
のだが

この性質を利用して
イース人は
ジャップ訓練用に
特別の餌を作る

栄養には
無関係だが

特異な味を持つ
人体分泌物を
原料としての
菓子であった

月の羊羹（メンストリアル・スイートゼリー）

生理極小畜「メンス・ミゼット」を
生理帯から取り出すとすぐ神血を吐かせ
皮膚が吸ったものも絞り取る
この血は凝固しないから
特殊ゼラチンを加えて固まらせる
この膠（にかわ）状のブラッド・プリンというのを
さらに固めたものが
月の羊羹
「メンストリアル・スイートゼリー」
である
暗赤色をしている

愛の前餅（ラヴジュース・ビスケット）

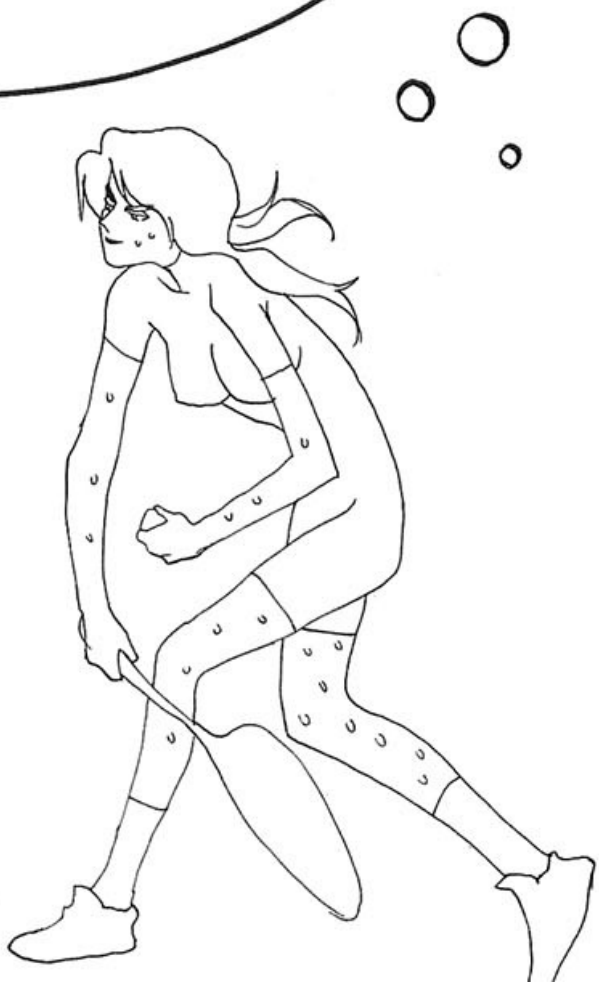
男女のlove juiceを
滲（にじ）ませて焼いたもの
舌人形の胃から
採った液を
原料とするのが
ヴィナス・ビスケット
唇人形（ベニリンガ）や玉門畜（カラス）のなら
アポロ・ビスケットという

ピデ・ボンボン

男女一緒のlove juiceを
肉洗浄器(ピデ)の胃から採って糖衣で包み
中から液が出るようにしたボンボン
交わり一回につき一個がつくられるので
「交わりの象徴〈コイタス・シンボル〉」
ともいわれる
「昨晩はボンボンを幾つ作った」
という言い回しもある
ちなみにこのボンボンを作る担当者は
前記の寝台番黒奴
「ベッド・キーパー」である

垢汗飴（ダーティ・ドロップ）

鼻糞　耳垢　爪垢　指間垢など
清潔なイース人からごく微量しか
採取できぬものを物質複製機で増量し
スポーツで発汗したとき
その汗を取って和え煮詰めて固形剤を加え
薄墨色のドロップにしたもの
ヤプーは昔から
「偉い人の爪の垢を煎じて飲むとよい」
という迷信を持っており
ダーティ・ドロップは
それに当るので非常に喜ぶ
主人の肉体の匂いをおぼえさせるには
これをしゃぶらせるのが普通である



恥垢凝脂
スメグマ・チーズ
smegmaから作る灰色の軟らかいチーズ菓子
やはり複製機で増量するが
ヴィナス・チーズ
アポロ・チーズの別があり
舌人形や唇人形の候補畜訓練には
必須であるが
その他のジャップにも与えられる
主人の体臭を教える速効性では
垢汗飴にまさるからである
貴族はドロップ同様
個人ごとにこれを作らせている

などが
おもなものであるが

いずれも
唾液に混って溶けると
それぞれ強烈な
異臭を発し

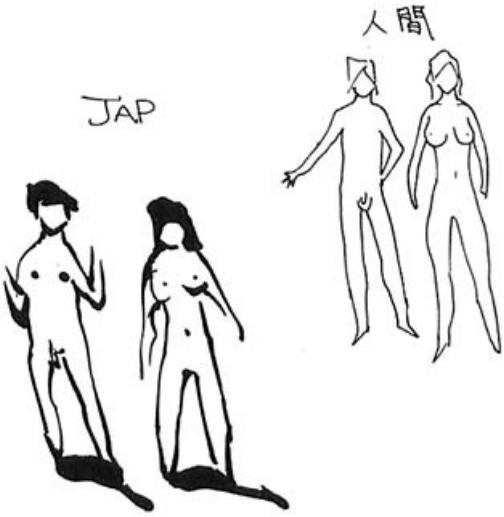
その異臭のゆえに
いったん嗜好物化
してしまうと

逆に
麻薬のような
強烈な
魅力が働く
という

血液中に
入ると

大脳の
辺縁系に
作用して
恒久的効果を
残すらしい

本来
この効果には
人間もヤプーも
変りはないはず
である



しかし
それらが悪魔の味覚と
称ばれて
ジャップ訓練用以外には
絶えて使用されることが
ないのは

その異味・異臭が
強すぎ
反発が激しすぎて

とてもそれが
嗜好物化する
段階までは

ヤプーの
白神崇拝心理を
以てしても
進めないからで
ある

材料が材料だから
もちろん人間の舌に
合うわけの
ものではない

では
なぜジャップには
その味を
教え込めるのか

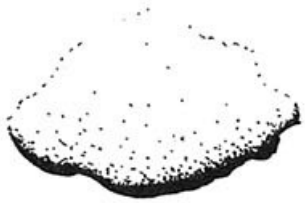
初め
タークァンを
混ぜるからである

ジャップには
前史時代の昔から
味噌とか
沢庵とか
くさやの干物とか

白人の到底
口にし得ないものが
喜んで食べられた

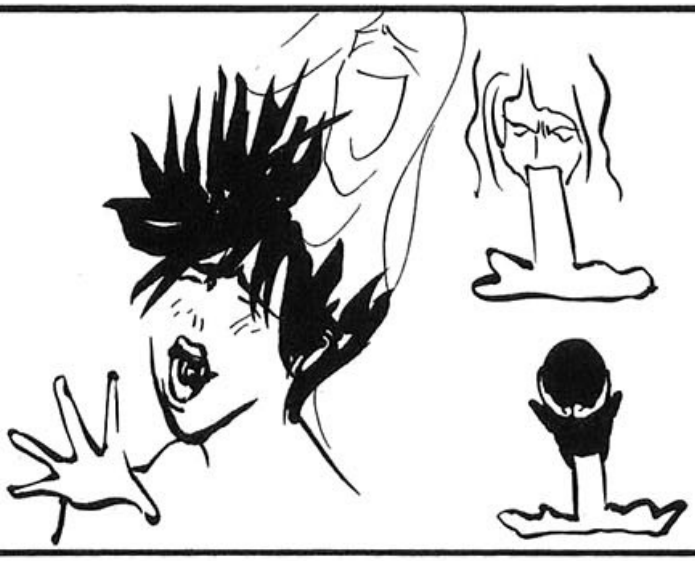
※「味の素」風

このことから
ヤプー的な
食べ物の調理科学が
研究され



それぞれの
エキスのみを抽出して
再合成した粉末※
が作られ

白人や黒人にとっては
嘔吐的(ディスガスティング)であるが
ジャップにとっては
珍味中の珍味ともなって



その味で
魂を天外に飛ばす
ほどだという

この味の素は
ヤプー系食品の代表
ともいうべき
沢庵にちなみ

タークァン
tarquan
と命名されているが

これを
混ぜることに
よって

ジャップ餌料の
あの異味・異臭を
魅力的にする
のであった

そこでこれらに
一時に慣れさせるよう
全部を混ぜて

赤クリーム

月の羊羹の元になる
ブラッド・プリンを固めずに
ゼリー状のままこれを主成分として
他の肉体分泌物を添加混成したものを
紅色凝乳ないし赤クリームという
各種材料の混合割合は
経験上いちばん有効性の
高いものに一定されている
ちなみに土着雌ヤプー訓練用の
男性の分泌物を主成分とするものは
白クリームという

白クリーム

赤クリーム

とし
これに
タークァンを
加えたものを与える

いや
むしろ
タークァンがない
純生(じゅんなま)のクリームが濃いほど
美味と感じるようになる

この転化教育を
赤(レッド)クリーム馴致(コンバーション)
といい

馴致後は
月の羊羹や
愛の煎餅の
味を喜び

このためには
どんな珍芸でも
おぼえてみせようと
することに
なるのである

そして
命じられさえすれば
直接
主人のセクスから
軟らかいsmegmaを
喜んで舐め取るにも至る

麻薬中毒患者が
薬の入手のためには
どんな羞恥・禁制をも
顧みないのと同じである

今
麟一郎が喜んで
舐めているのは
たっぷり
タークァンを混ぜた
赤クリームなのだ

広々と舗装された
騎馬並木道(ライディング・アベニュー)を
美少女ドリスを
肩にして
畜人馬(ヤップホース)
アマディオは
疾駆(しっく)し続けていた
葉を落し始めた
両側の樹列が
飛ぶように後ろへ流れ
みるみる水晶宮が
大きくなった
切子玉形の楼閣の
斜面の一つが
朝日にきらめいた

ドリスは
馬上で霊茸(チューイング・マシルム)を
ほおばった
他星植物であるが
これを噛(か)んで汁(しる)を吸うと
疲労回復の特効があるので
運動家に愛用される
繊維は不消化なので
無理して食えぬことは
ないが普通は
チューインガムのように
噛みかすは
吐き捨てるか馬にやる
黒奴には禁じられている

もっとも
白人から
その噛みかすを
もらうことは
さしつかえがない

と
されているので
実際には馬は
黒奴の口でもう一度
噛まれた末
食わされるのが
常である

水晶宮まで来ると
馬は正面広場の
左手の馬場の
隅にある厩に
帰ろうとするのを

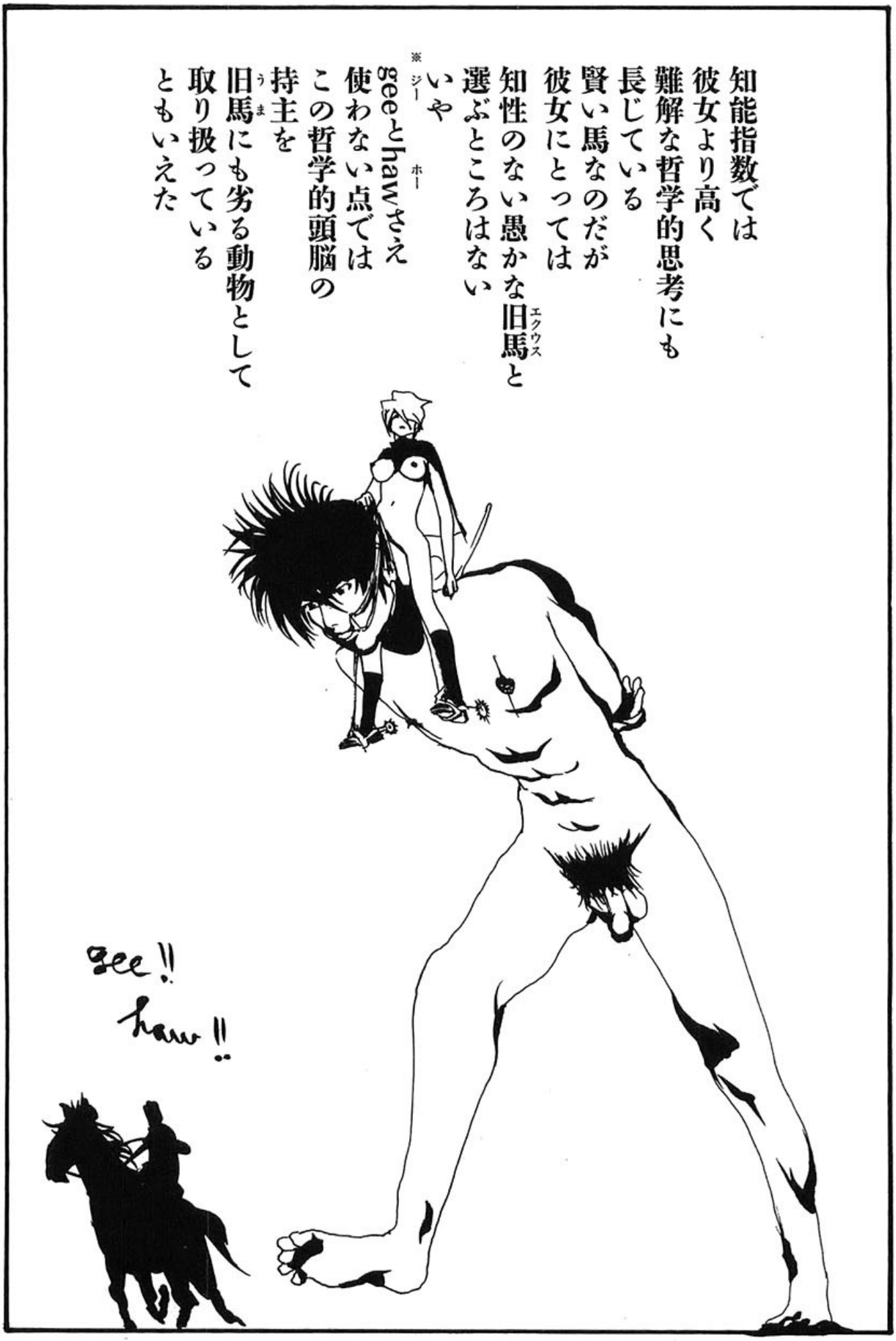
ドリスは
右耳の
方向手綱を
グイと
引き絞り

裏手地下の
原畜舎に通ずる
小門のほうへ
頭を向けさせた

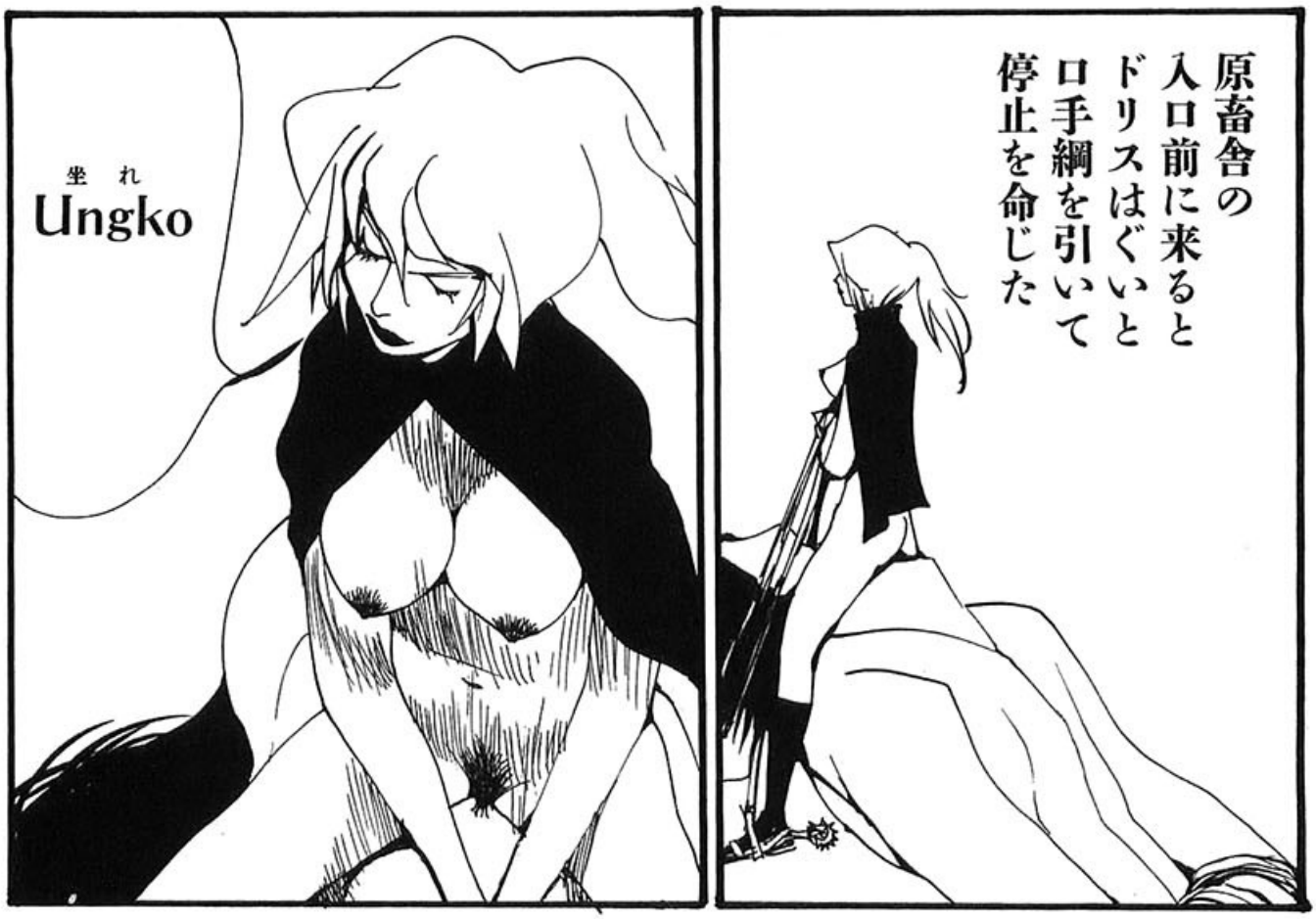
「原畜舎へ」と
一言命令しておけば
あとは
ほうっておいても
いいのだが

彼女は
女傑クァドリー伯爵の
流儀で
言葉より手綱で
自分の意志を伝える
ことにしている

知能指数では
彼女より高く
難解な哲学的思考にも
長じている
賢い馬なのだが
彼女にとっては
知性のない愚かな旧馬(エクウス)と
選ぶところはない
いや
※(ジー)geeとhaw(ホー)さえ
使わない点では
この哲学的頭脳の
持主を
旧馬(うま)にも劣る動物として
取り扱っている
ともいえた



※馬に対して、右、左という時の英語


原畜舎の
入口前に来ると
ドリスはぐいと
口手綱を引いて
停止を命じた
坐れ
Ungko

馬がしゃがむ時の
反動を利用して
両膝を開き
後ろ斜め上方に
両足先を
跳ね上げながら
全身を後ろに引き
両足をそろえて
いったん肉踏台に
靴底をおろし
その反動で
もう一度軽く跳ねて
ポイと
地上の人となった

あおられた
真紅のマントが
大きな翼のように
ふうわりと下って
身をまとう

厩には
黒奴馬丁も
いたのだが

ここには
急に来たわけだから
誰も待っていなかった

ドリスは
かまわずに
地下に降りて
中にはいり

当直の黒奴係員に
足蹴礼で応えつつ尋ねた

予備檻の
ヤプーは？

はただ今
博士コランが
適性検査中で……

※片手で相手の肩を軽くたたく

部屋は
二十畳敷くらいで
中央一段高くに
檻があり

ヤプーが潜り穴から
首を出して夢中で
赤クリームを舐めていた

どう
適性検査の
結果は？

ただ今
精神検査実施中で
ございますが
なかなか優秀なようで
……

いい
舐めっぷりね

はい
舌の使い方がまだ
たどたどしゅう
ございますが……

初心初心しくて
かえって可愛いよ

といいながら
ドリスは性能表に
書き込まれた
数字をながめた

その時
コラン博士が
送声器(マイク)に向って

オアズケ

と
きびしい声を
吹き込んだ

が
ヤプーは
舐め続ける

と
見るうち
急に彼は
舌を引いた

黒奴の操作する
電気針が
体を貫いたから
である

針といっても
有形物ではない

U字金具から流れる
一種の刺激電流である

ヨシ！

待っていた

と
いわんばかりに
ヤプーは再び
舐め始める

博士は
壁の性能表の
電気針服従度の欄に
〝1〟
と書き込んだ

それを眺めたドリスは
鞭の先をピタリと
そこに当てると
コランに尋ねた

電気針服従度1
これは低過ぎない？

妾のは
今まで大抵
2以上だったよ
初めから……

は
一度だけですから
正確では
ありませんが……

なぜ
繰り返さないの？

は
これから
お飼いになる
貴族達のお楽しみが
洗脳手術による
服従度の向上に
あるわけで
ございますので

そのお楽しみを
減らしますことの
ないように

ほんの一通りの
調査にとどめますのが
畜籍局の慣例でして

でも
学者としては
詳しく知りたい
んじゃない？

もちろんで
ございます

と
コランは
力強く答えた

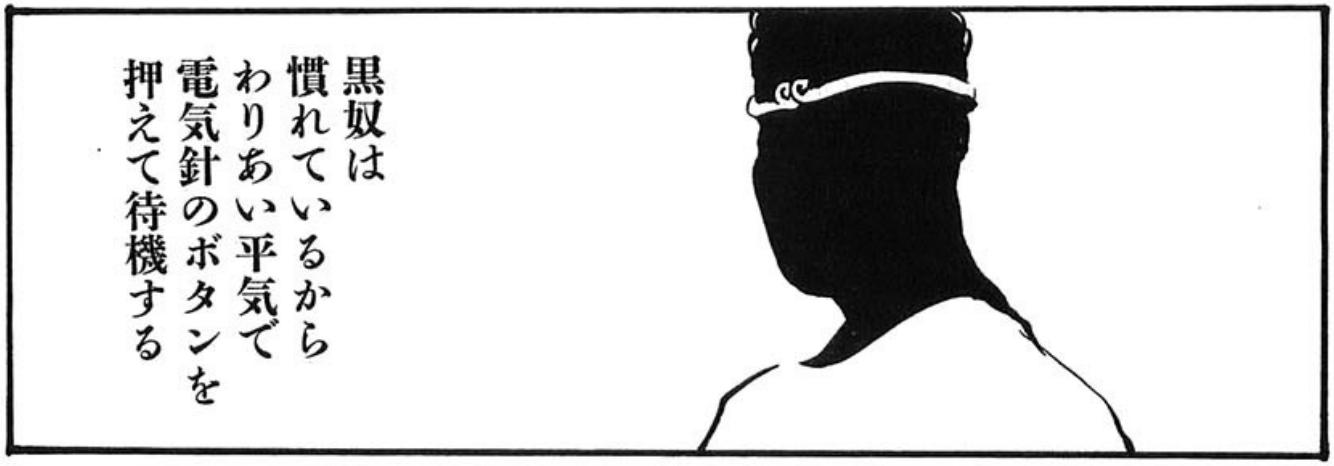
実験用に
手に入れた時は
徹底的に試験します

このヤプーも
もう一度くらい
ためしていいわよ

適性検査の手伝いに
子供っぽい
好奇心をわかした
わがままな令嬢は
口を動かしながら
博士の立つほうへと
近づいた

一見
素裸に見える
畜人皮(ヤップ・ハイド)から
発散する
性的魅力に
コランは
まぶしそうに
うつ向いて
席を譲った

雪灼けした肌が
さらにどす黒く
なったのは
紅潮したのだろう

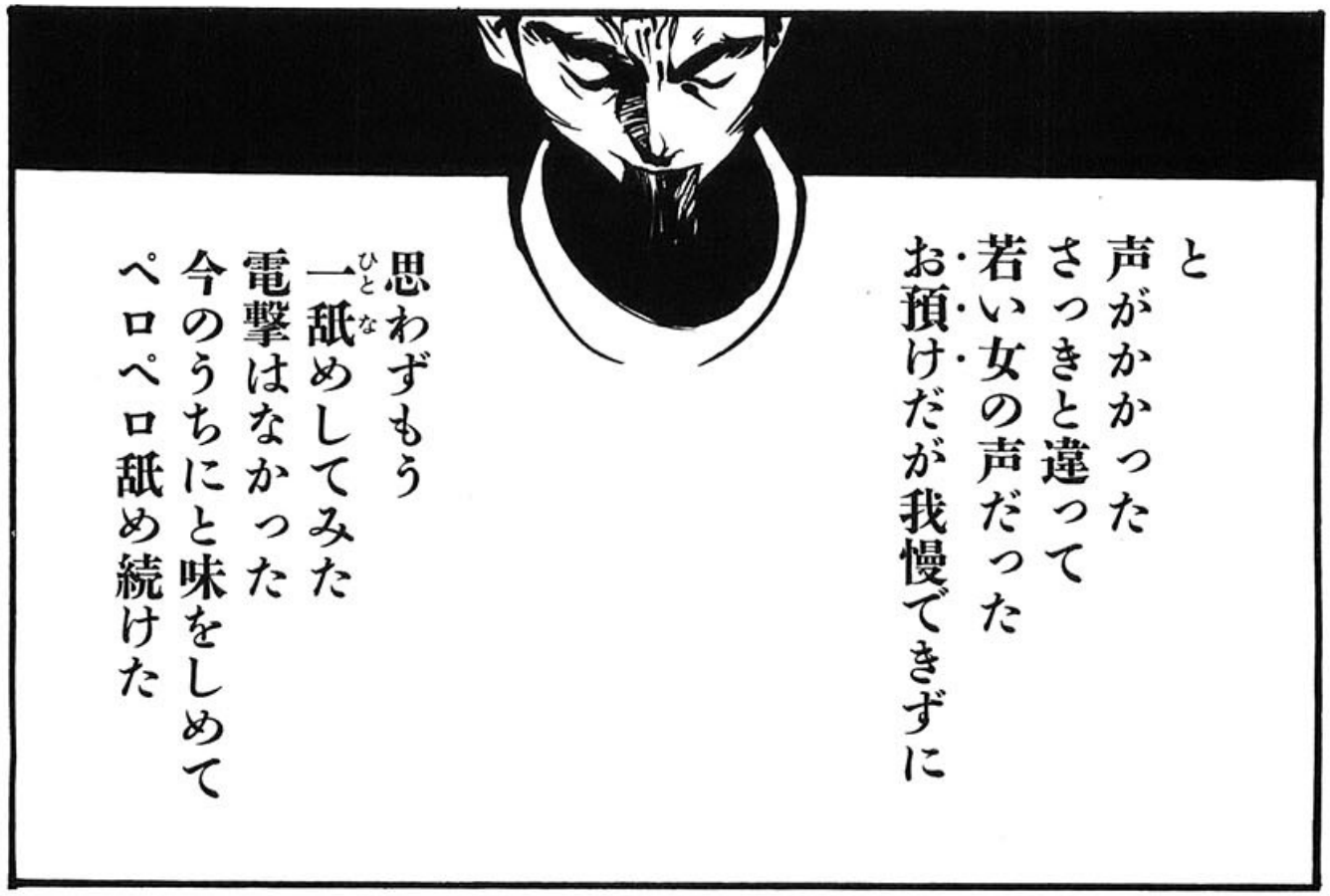

黒奴は
慣れているから
わりあい平気で
電気針のボタンを
押えて待機する

この時
カッパのピューが
退屈のあまり
スイッチの
一つを
いじったのを

三人とも
気づかなかった

——おいしいクリームだ
材料は何だろう
おいしい
実においしい……
ぴちゃっ
ぴちゃっ
ペロ
ペロ
麟一郎が
夢中になって
舐めているところへ
またもや

オアズケ


と
声がかかった
さっきと違って
若い女の声だった
お預けだが我慢できずに
思わずもう
一舐めしてみた
電撃はなかった
今のうちにと味をしめて
ペロペロ舐め続けた

全くいうことを聞かない

電気針にも平気だなんて……

と ドリスは あきれ返った

不思議でございますな

と 博士も頭をひねる

二人は気づかなかったが実は電気針の電流はカッパのピューのさっきの悪戯で止っていたのだ

う〜む

ヤプーは見る間に丼を空っぽにしたU字金具が同時に元に戻りヤプーは首を引っ込め、胡坐して考え込んでいる

YAPOO,THE HUMAN CATTLE 9 END

ミックス化!!
作画 江川達也 原作 沼正三
発行・幻冬舎コミックス 発売・幻冬舎
BIRZ COMICS
POO, THE HUMAN CATTLE
gawa Tatsuya × Numa Shozo
家畜人ヤプー
かちくじん
YAPOO
◉①693円(本体価格660円)②～⑧620円(本体価格590円)
(一)～(九)
絶賛発売中

衝撃のコ

西暦196X年、将来を誓い合った恋人同士であるドイツ人・クララと日本人・麟一郎。

二人が乗馬を楽しんでいたそんなある日、

突如見た事もない飛行物体が目の前に墜落する。

それに乗っていたのは、完璧な美貌を持つ白人女性・ポーリーン。

彼女は日本人が生体手術により、生体家具、肉便器などあらゆる「物」に加工され、

宇宙帝国イースを支える家畜「ヤブー」として生きる

二千年後の未来世界からタイムドライブしてきたのだった。

船内で気を失ったポーリーンを助けてしまったクララと麟一郎。

恋人同士の輝く未来は、この時を境にあらぬ方向へと流れ出す……！

異才・沼正三が放つた戦後最大のタブーに鬼才・江川達也が挑む!!

◎幻冬舎コミックスHP▶ http://www.gentosha-comics.net

ーテイメント！

毎月30日発売

幻冬舎コミックスホームページ http://www.gentosha-comics.net ※一部地域は発売日が変わります

加速するエンタ

月刊コミックバーズ
490円(本体価格467円)　発行・幻冬舎コミックス　発売・幻冬舎

バーズコミックス
家畜人ヤプー⑨

2007年1月24日　第1刷発行

著　者
江川達也（えがわたつや）
沼 正三（ぬま しょうぞう）
発行人
伊藤嘉彦
発行元
株式会社 幻冬舎コミックス
〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-9-7
電話　03(5411)6431(編集)
発売元
株式会社 幻冬舎
〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-9-7
電話　03(5411)6222(営業)
振替00120-8-767643
印刷・製本所
大日本印刷株式会社

検印廃止
万一、落丁乱丁のある場合は送料当社負担でお取替致します。幻冬舎宛にお送り下さい。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
定価はカバーに表示してあります。

©Egawa Tatsuya, Numa Shozo, GENTOSHA COMICS 2007
ISBN978-4-344-80899-7　C9979　Printed in Japan

幻冬舎コミックスホームページ　http://www.gentosha-comics.net
本作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などには関係ありません。